
砂の船第二部 「糸」

杜若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂の船第二部 「糸」

【Nコード】

N7604J

【作者名】

杜若

【あらすじ】

恋人であり、ほんのわずかの間妻であった木之口繭との

悲しい別れから10年後、佐々木はカリフォルニアで精神科医として働いていた。同僚で内科医の女医ミナ・ハーカーのやたらと

攻撃的な態度を不思議に思いながらも、専門医の資格を取るために忙しい日々を送る中、ある日突然彼はフラッシュバックに襲われ繭と同じくらいの年齢、性別の患者の治療が一切できなくなってしまう

……

<http://ncode.syosetu.com/n5578j/> の作品の第二部にあたります
独立した物語としても楽しめますが、できれば順番にお読みください

第一話 蒼い空の下で（前書き）

木之口繭との悲しい別れから10年後、佐々木はカリフォルニアの病院に

精神科医として留学していた。専門医の資格取得のために勉強と勤務に励む佐々木

そんな彼にやたらと攻撃的な態度を取る内科女医がいた。

<http://ncode.syosetu.com/n5578j/> の小説の第二部になります

単体でも楽しめますが、できればこちらを読んでからこの小説をお読みください

第一話 蒼い空の下で

なぜめぐり合うのかを私達は何も知らない
いつめぐり合うのかを私達はいつも知らない

—— 中島みゆき 「糸」 より——

灰色の重く冷たい鉄の扉を開けると、
身体が染まってしまいそうなほどの蒼い空が目に見え込んでくる。
五階建ての病院の屋上はぐると高いフェンスに囲まれているとは
いえ、

幾つもの扉でしきられた建物とは比べ物にならないほどの開放感がある。

佐々木は大きく空に向かって伸びをすると、

そのまま傍らのベンチに身体を投げ出すように座った。

少し裾の長い白衣の裾が空に向かって翻り、

胸元で銀色のチェーンに通された細いリングが揺れる。

しばらくそのままの姿勢で空を見上げていると、

強張っていた身体が徐々にほぐれていくのが判る。

それが気持ち良くて、少し遅れて屋上に上がってきた同僚の王が^{ワン}

同じようにベンチに身体を投げ出しても、

しばらくの間はその姿勢のまま無言でいた。

「……この空はいつみても身体が染まってしまいそうだ」

ようやく口から滑り出たのは、久しく使っていない日本語だった。

「用能理解的言?? (俺に意味がわかるように話せよ)」

返された中国語に、佐々木は苦笑する。

「It seems to dye the body to the color of the sky.

君が中国語を喋れるなんて初めて知った」

「この位が精々だ。俺はアメリカ人で、

生まれも育ちもここ、カリフォルニアだからな」

ふん、と胸をそらした王に佐々木は苦笑を深くする。

「たまには日本語を使わないと忘れてしまいそうなんだよ」

「そろそろ日本が恋しくなって、ここを逃げ出したくなったか
ブラック・ジャック」

にやりと笑う王に、佐々木はため息をついて身体を起こした。

「そのあだ名はやめてくれと何度も言っているだろう」

「いいじゃないか」

同じように起き上がって、王は頭一つ背の低い佐々木の長い髪を
ぐしゃぐしゃとかきまわす。

「日本から来た、顔に大きな傷のある医者。そのまんまなんだから」
「俺は彼みたいな天才じゃないし、外科医でもない。」

まだまだ駆けだしの精神科医だ。それにここを逃げ出したいとも
思っていないよ。日本にいた時も同じような病院に勤めていたんだか
ら」

生真面目な答えに今度は王がまいったと言う風に苦笑を浮かべた。
「本当にまじめだな、ブラックジャックは。でも時には肩の力を抜
かないと

ある日突然ぼっきりいっちまうぞ、ほら、とりあえずこれでリラッ
クスしろ」

と差し出されたのは、油染みの浮き出た紙袋だ。

「……また院長にドーナツを押しつけられたのか？」

ああ、と頷いて王は紙袋の中から粉砂糖のたっぷりまぶされた
大きなリング型のパンを掴む。

「昼飯、まだ食べてないんだろう。手っ取り早く糖分とカロリーを
補給するには一番だ。まだ一日は長いんだからな」

「ありがとう」

礼を言って佐々木も同じように袋の中からドーナツをつかみだした。

と、

「姿が見えないと思ったら、こんな所でサボっていたのね」

声と共に灰色の扉が勢いよくあいて、白衣をはおった長身の女性がいまだ勢いよく二人に向かって歩いてきた。

あるかなきかの風に、ショートカットの黒髪が揺れている。

「ミナ、俺達のどこがサボってるんだ。」

労働者の正当な権利、ランチタイム中だぜ」

王の言葉にミナと呼ばれた女性は、猫を連想させる

美しいが、鋭く強い光をたたえたアーモンド形の瞳で二人を睨みつけた。

「看護師たちが呼んでるの。受け持ちの患者さん達が急変したそうよそれでもランチタイムを続行したいならご自由にどうぞ」

「おいおい、それを早く言ってくれよ」

王が慌てて手の中のドーナツを口の中に押し込み、佐々木もそれに倣う。

「ポケベルじゃなくて、内科医が直接呼びに来たんだから

その位の緊急性は察して頂戴。ブラックジャックなんてあだ名をつけられているのなら

余計にね」

その言葉に、佐々木は首をすくめた。

それをちらりと一瞥すると、ミナは来た時と同じように背筋を伸ばして

勢いよく去っていく。

「相変わらずきついなあ、ハーカー先生は。子供にはとっても優しいんだけど

どうしてだろう」

「ブラックジャックがなにか誤解されるような事を言ったんじゃないか、

こっちの女性はセクハラには厳しいぜ」

肩をすくめる王に、佐々木はドーナツを咀嚼しながら深くうつむい

た。

「……英語がまだよく理解できない時に、表現を間違えたかな」

「おい、冗談を本気にするなよ。言葉が通じないと言ったってブラックジャックほどの奥手は見えたことないから安心しろ。

まあ、我が従姉妹ながらミナは少々じゃじゃ馬だからなあ、機会を見て注意しておく。さ、いこうぜ」

「王、頼むから俺をブラックジャックと呼ぶのはやめてくれ」

「いいじゃん」

ベンチから勢いよく立ちあがり、王はもう一度佐々木の長い髪を思い切りかきまわした。

「佐々木も兵衛も呼びにくい。ブラックジャックのほうがいいと格好が

いいじゃないか」

そう言って歩きだした王の幅の広い背中に、佐々木はそつとため息をつく。

病室へと続く階段を駆け降りる二人の後ろで、蒼い空が重い音を立てて閉まる

鉄の扉の向こうに消えた。

第二話 専門研修医（フェローシップ）

「佐々木先生、王先生よかった、探していたんですよ」

「すまない、屋上にいた。で、急変したのは誰？」

「キャシーちゃんとアラン君です。佐々木先生は閉鎖病棟3号室へ王先生は開放病棟プレイルームにお願いします」

看護師の言葉に二人は頷くと、二人はどちらからともなく

「じゃ、がんばれよ」と囁き合うと廊下を右と左に別れた。

右手、王が進む先にあるのはだれでも出入りできる観音開き式の扉で子供が喜びそうなカラフルな色合いで動物達の絵が描かれている。

一方佐々木が進んだ左手にある扉は、

同じような動物達の絵が描かれているものの

頑丈そうな鍵がかけられている。

鉄格子の隙間から佐々木の姿を認めた看護師が、内側から鍵を開けてくれる。

「状況を説明して、歩きながらいい」

「それが、よくわからないんです。いつものように昼食の後お掃除の人が部屋に入ったあと、急に恐慌状態になって……」

「ここ一カ月くらいずっと落ち着いていたよね」

「ええ、身体の安全を考えて拘束した方がいいのでは？」

看護師の進言に佐々木は首を振った。

「まずは様子を見てみる、鍵を開けて」

「気をつけてください、さっき危うく噛みつかれそうになりましたから」

「わかった」

酷い傷痕が残る右手が掴んだのは、先ほどのものと同じ形状の扉。頑丈な鍵が付けられ、白く塗られているとはいえ鉄格子がはまっているのに

そこに描かれているのは可愛らしい小動物。

「キャシー、どうしたんだい」

佐々木の呼びかけに、ベッドの上でピンク色の小花模様の壁紙を引き剥がしていた

10歳くらいの少女がくるりと振り返った。

その左手には、腹部から綿のはみ出たぬいぐるみが握られている。

「外に逃げるの!!!」

可愛らしい唇から金属的な叫び声上がる。

「逃げなきゃ……逃げなきゃ……きゃあああああ」

もはや言葉にならない絶叫を上げながら、窓にはまった鉄格子に飛びついて

激しく揺さぶり始めたキャシーを、佐々木は後ろから抱きとめた。

「そう、怖かったんだね。逃げ出したいほど怖いことがあるんだね」
子供とはいえ全力でぶつかってくる手や足をまともに受けて

白衣の下の身体が悲鳴を上げる、それを堪えて佐々木はキャシーに囁き続ける。

「一つ、大きく息をしてごらん。大丈夫、先生が後ろについているからね」

その言葉にようやく少女の手足が動きを止めた。

「そう、キャシーは何が怖かった？　ぬいぐるみ？　それとも窓の外に

なにか見えた？」

穏やかな声に、少女の手からゆっくりと力が抜ける。

そのままずるとベッドに横になった彼女の脇に、佐々木も座り込んだ。

無言のまま首を振りぼろぼろと涙を流し出すキャシー。

佐々木はゆっくりと頷いた。

「あせらなくてもいいよ、喋りたくなるまで先生はここにいるからね。

よく自分で自分を押さえられたね。いい子だ、キャシーはとってもいい子だ」

その言葉に何度も頷くキャシーを見て、看護師が胸をなでおろした。

※

「で、結局原因はなんだったんだ」

「煙草の匂いだよ。彼女を虐待していた父親がヘビースモーカーだったんだ。」

今日はたまたまいつもの閉鎖病棟のクリーンスタッフが休みで、たばこを吸う

別の人間がキャシーの部屋を掃除したんだ。もちろん啜え煙草なんて真似は

していないんだが、服に染みついた匂いに敏感に反応してフラッシュバックが起きた」

「そうか、原因が判って何よりだ」

「ああ。今日は念のために薬をいつもより多めに飲んでもらったけど、拘束なしで

パニックが収まったのなら上出来だよ。で、王はどうだった？

その青あざを見れば想像がつくけど」

佐々木の言葉に、目の周りに青あざをこしらえた王が苦笑う。

「大分症状が緩和した患者を試しに

解放病棟のプレイルームに連れ出してみたんだが早すぎたらしい。

別の子供達のはしゃぐ声にパニックを起こして

宥めようと近づいた瞬間に振りまわされた腕が当たった」

「それは大変だったな」

「まったく、自分の読みの甘さを思い知らされたよ、

で、キャシーちゃんが上手くいったのなら

ブラックジャックの手形はどこでつけられた？

女性看護師でも口説いて失敗したか？」

今度は佐々木が王と同じ表情を作った。

「別の患者をカウンセリング中にうっかり気に障る事をいった、らしい」

右頬の上の赤い手形は指の形まではっきり判って、
よほどの力でつけられたことが判る。

佐々木と王が再び顔を合わせたのは、すっかり日も暮れきった頃。
医局で当直の医師の為に引き継ぎ日誌を書きながら、
二人はそろってため息をつく。

「全く未熟者だよな俺達」

「ああ、子供とはいえ患者に殴られるなんて」

「そんなに悲観することではないわ」

背後からかけられたおっとりとした声に、佐々木と王は慌てて立ちあがった。

「院長先生」

「ああ、ごめんなさい、仕事を邪魔してしまったわね。
いいから座って頂戴」

まるで童話の挿絵にでも描かれそうな典型的な田舎の人のいい老婦人が

肉の厚い両手を上下に動かして、二人に着席を促す。

ピンクのスーツと白衣の組み合わせより、エプロンと揺り椅子と網棒が

似合いそうなこの女性が、全米でも小児の精神病治療では
トップクラスの規模と実績を誇るこの病院の院長だ。

「彼らの心はね、穴のあいた地面なの。しかも穴には落ち葉が厚く
積もっていて

固い地面と中々区別がつかない。経験の浅い貴方方が穴に躓くのは
仕方ないわ」

「お言葉ですが院長、俺達はまだ経験が浅いとはいえない年月を……」

「医師としては過ごしているわ、でも専門医にはまだまだ及ばない、
だから専門研修医なんでしょう」
フェローシップ

佐々木の言葉を途中で遮り、院長は相変わらずゆったりと言葉を続ける。

「は、はあ」

「失敗するのは構わない。しかし同じ失敗を繰り返してはいけな
わ。」

失敗から必ず何かを学びなさい。私達が治すものは目に見えないの
だから

経験の積み重ねこそが、大事なのよ」

まるで祖母が孫に向けるような笑みを浮かべながら、優しい口調で
医師として厳しい言葉を紡いでいく院長に、

佐々木と王は姿勢を正して「はい」と答えた。

「いい返事ね。頼もしいわ、さ、怪我には甘いものがいいのよ
これを食べて明日も頑張りなさい」

そう言って院長は油じみの浮いた紙袋を二人に渡すと

その体型にふさわしいゆっくりとした足取りで部屋から出て行った。

「またドーナツか」

「ああ。俺達完全に子供扱いされてないか」

「されてないかじゃなくて、されているだろう。完璧に」

「ああもう、腹が立つ」

乱暴に前髪をかきあげて、王は猛然と再び日誌にペンをはしらせる。

「腹が立つから俺は早く児童精神専門医になって、院長を

婆さん扱いしてやるんだ」

そう言って自分を鼓舞する王の隣で、佐々木もまた日誌に記入を再
開しながら

こちらは口の中で呟いた。

「落ち葉が積もって平に見える、穴だらけの地面、か」

第三話　まだ十年しかたっていない

「すみません、いつものベーグルサンドください」

「おや先生、やっとお帰りかい。お疲れさん。たまには違う物を買ってくれよ」

そっけないが暖かい言葉と共に差し出されたサンドウィッチを

佐々木は疲れた顔に笑みを浮かべて受け取った。

大都市の、しかもファーストフード店に毛が生えたような

セルフレストランでは珍しく、この店主は気さくで人懐こく

佐々木のような外国人にも親しく声をかけてくれる。

どうしても孤独感を抱えがちな異国での一人暮らしの中で彼のような存在は貴重で、テイクアウトのメニューがそれしかないのに

食生活の偏りを感じながらも、殆ど毎日通ってしまう。

そこから5分程歩いた場所にある6階建ての老朽化したアパートの最上階が、カリフォルニアでの佐々木の住まいだった。

エレベーターもなく水周りもよく故障するが、

その分家賃はこの辺りの相場の三分の二だ。

医師とはいえ専門研修医、しかも

お世辞にも儲かっているとはいえない病院に勤務している身の上では、

切り詰めるところはとことん切り詰めないで、生活が出来ない。

真夜中近い時刻とはいえ、まだ昼間の熱気が仄かに残っている部屋の古ぼけた電灯をつけると、佐々木はそのまま湿っぽいベッドに倒れ込んだ。

勤務の疲れが瞬く間に全身に回り、数分とたたずに眠気が襲ってくる。

夕飯を食べて、シャワーくらい浴びないと思うのだが、身体が中々言う事を聞いてくれない。もう年だなと思いつながら

とろとろとした眠気に身を任せていると、身体の脇に放り投げたカバンから

携帯の着信音が聞こえてきた。

——患者の急変か？ ——

慌てて起き上がってかばんから携帯を掴みだし、

液晶に表示された名前を確認して、どっと力が抜けた。

「……小母さん、こんな夜中に何の用」

「おやごめんよ、こっちは朝だからね。元氣かい、馬鹿息子」

耳元で聞こえる老いてはいるが艶を含んだ懐かしい声に、

佐々木は苦笑する。

「時差の事を考えてよ。元氣だけど馬鹿息子は酷くない？

うん、大丈夫ちゃんと食べているよ。これから夕飯」

口は悪いが彼の事を気にかけて、日本から唯一電話をくれる

小さな地方都市で、ホテルとスナックを経営している養母のような

人に

佐々木も文句をはさみながらも、嬉しそうに喋り続ける。

「そういえばこっちに届いた兵ちゃん宛てのハガキを

転送したけど届いているかい？」

「うん、届いてるよ。報告が遅れてごめん」

答えながら佐々木はそっけない灰色に塗られた壁に掛けられた

コルクボードを見る。そこには何枚かの「結婚しました」と書かれた

写真付きのハガキが留められていた。

「兵ちゃんの大学の同級生も大分結婚したね」

「そうだね、もう卒業して何年もたっているし、そろそろ皆

医者としても一人前になっている頃だから」

「……兵ちゃんももう三十を超えただろう、

そっちにいい人はいないのかい？」

「仕事と勉強でそれどころじゃないよ」

苦笑交じりに言いながら、佐々木はコルクボードからその下の日用品を納めたカラーボックスに目を移す。

その一番上のスペースには、大分色あせてしまった写真を納めた銀製のフォトスタンドがぼつんと置かれていた。

重かった黒髪をバツサリと切って、見違えるような美人になった繭とその横に仏頂面でのっそりと立つ、浪人生だった頃の自分。たった数日間であるが妻だった人との唯一の写真。

「それに、俺はもう結婚しているし」

「結婚している、じゃなくてしていた、だろう。」

あれから十年以上もたったんだ。新しい人を見つけても繭ちゃんは許してくれるさ」

その言葉に、佐々木は何も答えなかった。

「今年の正月は帰っておいで。」

休暇ぐらいはもらえるんだろう。じゃあ、ゆっくり休むんだよ」沈黙に耐えきれなくなったかのような立て続けの早口の言葉を最後に、電話は切れた。

「……まだ十年しかたってないんだよ」

無音になった電話をゆっくりと下ろしながら佐々木は呟く。

その胸元で、銀の鎖に通された細いリングが揺れた。

※

十年前のクリスマス、浪人生だった佐々木は、坪内総合病院のICUの個室で

妻を看取った。

妻、と言っても共に生活したことはない。

それどころか知り合ったのも僅か数ヶ月前だった。

親に殺されかけた自分と、親に身体ではなく魂に深い傷を負わされ続けてきた妻

十九才と十七才。親と言う名の獣から逃れるための入籍だった。

「兵ちゃんが一方的に出したことにしてある婚姻届だからね、繭ちゃんが婚姻無効の申し出をすれば取り消せるからね」

知恵を授けてくれた佐々木の養母である久代の言葉に、妻は

「私は、木之下繭より、佐々木繭でいたい」

と言ってくれた。

僅か数日間の結婚生活。親から魂だけでも逃れる為に、

自ら遅効性の毒を飲んだ妻は、病室でささやかな結婚式を上げた次の日

天に召された。

通夜、葬儀と慌ただしい時が流れていき、

ようやく佐々木が妻の死を実感できたのは、小さな骨壺を納めた白木の箱を腕の中に抱いた時だった。

本来ならそれは墓に納めるべき物だが、冷たい石の下、それに自分を殺そうとした両親と同じ場所に妻を置くことがどうしても出来なくて、

佐々木は調べた末に、妻の骨をカロートペンダントに加工してもらう事にした。

手元供養と呼ばれるそれは、アメリカではごく一般的に行われているらしく

デザインも豊富だ。悩んだ末に渡せなかった指輪の形に作り上げてもらったそれを

首にかけて瞬間、強い感情が心の底から湧きあがってきた。

悲しみ、寂しさ、怒り、そして後悔。

両親に殺されかけて以来、凧の日の海のようにあまり感情を動かす事がなくなった

佐々木にとって、それは自分の心とはいえ恐怖すら覚えるものだった。

何も考えたくない。考える暇も無いくらい打ち込めるものが欲しい。そして、浪人生の彼に打ち込めるものは一つしかなかった

「今から医学部を受験する？冗談だろう」

ぽかんとする予備校の講師たちに、

「決めたことですから」とだけ返答して

それからセンター試験の日まで、佐々木は睡眠はおろか食事すらまともにとった記憶がない。

少しでも勉強の手を止めたら、妻の事を考えてしまう。

それが怖くてひたすら参考書と模擬テストの問題を解くことだけに集中した。

年が明けセンター試験、本入試とあつという間に過ぎていき

ふと気がつくと、一年前まではE判定だった国立大学の医学部の合格通知が

ポストの中に入っていた。

奇跡だと大喜びする予備校の教師達を佐々木は暗い顔で見つめていた。

これから何にわき目もふらずに打ち込めば、妻の事を考えず、自分の感情から

逃れることが出来るのだろう。

重い体を引きずるようにして家に帰り、ずっと掃除もしていない埃だらけの床の上にぺたりと座りこんで茫然としてみると、携帯が鳴った。

どうせ、久代小母さんからだろう。何度も心配して電話をくれるのだが

佐々木は十回に一回くらいの割合でしか出なかった。

おかしい、と気づいたのはどのくらいの時間がたってからか。

数コールで留守電に切り変わるはずが、

今日に限っていつまでも携帯はなり続けている。

鉛のように重い身体を動かして携帯を取り、

液晶に示された名前を見て、心臓がはね上がった。

「木之口繭」

二度とかかってくることはない相手。

妻の携帯は、空の上からかけられるようにと叶うはずのない願いを込めて

棺の中に入れた。

「……も、もしもし」

震える手で耳に携帯を当て、かすれた声を上げる。

「もしもし」

答えた声は、まぎれもない妻のものだった。

続く

第四話 過去

「兵衛さん、久しぶりだね」

まるでしばらく連絡が取れなかっただけ、という風な言葉。

「びっくりした、当たり前だよね」

「うん……少しね」

死者からの電話などありえない。

たちの悪いいたずらか、よく似た声の別人の間違い電話か。それとも、悲しみのあまり心が作りだした幻聴か。

だが、そんなことはどうでもよかった。

「大学合格おめでとう、兵衛さんならきっと

いいお医者さんになれるよ」

「……ごめん」

俺があの時改札口で君を無理矢理でも父親から引き離していれば。

「どうして謝るの？」

「……ごめん」

あの日、1時間早くホームセンターに行っていれば、店内で君を見つけられたのに。

「……本当に、ごめん」

話したいことは山ほどあったはずなのに、たった一つの言葉しかでてこない。

いつのまにか頬に涙が伝っている。

妻を失って以来、初めて押し殺した声を上げて泣きながら、

佐々木はただ「ごめん」と繰り返し返した。

「泣かないで、もう自分を責めないで。」

兵衛さんは悪くない」

穏やかで少しはにかんだような、数か月前と全く変わらない声で紡がれる優しい言葉に、涙は止まることはない。

「兵衛さん、疲れているんだね。」

私を見送ってくれて、沢山勉強して。

休まなきゃ。ゆっくり眠って、美味しいものを食べて」

「……いやだ」

まだ君と話をしていたい。切らないで、お願いだから。

だが、再び何かを言おうとした瞬間、ぶつりと何かを断ち切るような音を立てて、電話は切れた。

慌ててリダイヤルボタンを押すと、数コール目で呼び出し音がとまった。

「繭、もしもし、繭」

「兵ちゃん、もしもし、どうしたんだい。もしもし」

しかし、答えた声は妻ではなく、何回も電話をくれた久代だ。

「もしもし、兵ちゃん。繭ちゃんがなんだって、もしもし？」

「……なんで」

今度はこっちが電話を切って着信履歴を見ると、そこには久代の名前だけがずらりとならんでいて、妻からの電話の痕跡はかけられない。

今度は電話帳から繭の携帯に電話をかけてみると、

「……この電話番号は、現在つかわれておりません」

流れてきたのは無機質な女性の声だった。

「なんで、だよ」

奇跡は一瞬で終わってしまうのだろう。

携帯を握りしめた腕から、いや、身体全体から急激に力が抜け、佐々木は埃だらけの床に倒れ込んで、そのまま意識を失った。

※

「本当に私はあの時ほど自分の無力さを痛感した時はなかったよ」

「先生、また古い話を」

咲き始めた桜が微かな芳香を部屋の中に運んでくる。

坪内総合病院心療内科、改め精神科、医局。

すっかり白髪頭になってしまった羽場医師はかつての患者であった研修医に、少々煮つまったコーヒーをすすめた。

「心の傷に古い新しいは関係ないよ」

「でも八年も前、大学に合格した頃の事です、それに先生は全力で俺を

治療してくれたじゃないですか。本当に感謝してます」

そう言って佐々木は苦すぎるコーヒーを啜った。

「数か月以内に私の患者を二人も、しかも結婚式にも出席させてもらったご夫婦両方の臨終をみとるなんて真似は

絶対に嫌だったからね。それは久代さんも同じ気持ちだっただろう」

あの日、佐々木からの電話にただならぬものを感じた久代の通報で坪内総合病院に担ぎ込まれた彼に下された診断は、

重度の疲労と栄養失調。

「私を感情のゴミ箱だと考えてくれて構わないよ」

目が覚めた佐々木に、羽場医師は言った。

「悲しみでも、怒りでも、恨みでもいいから

ぶつけてほしい。また食べる事も眠ることもできなくなる前に」

「……俺はあの言葉に救われました」

「君が私の前で泣いてくれた時は、嬉しかったな」

躊躇する佐々木に、羽場医師は何度も

そうしてくれると私は嬉しいと言い続けた。

そして繭の死から一年後、初めて佐々木は

他人の前で泣いた。

「思えばあの時、俺は将来を決めたのかもしれない」

「本当に、いいのかね」

カップを机の上に置いて、羽場医師はじつと佐々木の顔を見つめる。

「君はご両親と、繭さんの二つの重すぎる離別の記憶を

抱えている、その上で他人の心まで一時的とはいえ
しよい込むことに、私はあまり賛成できないよ。

外科と救命救急と、二つの科が君を欲しがっている。

佐々木君は外科の才能があるらしいね。めったにないんだよ
こういうことは」

佐々木はゆっくりと首を振った。

「俺が抱えている離別の記憶は一つです、両親の事は
未だに全く思い出せません」

「……そうか、思い出したくは、ないかね」

「ありません。俺は大学卒業後、

先生の元で研修させてもらって

妻と同じ苦しみを抱えた人たちが沢山いることを知りました、
俺が医学部に入れたのは……妻が死んだからです」

「……」

「妻の死が、俺を医者にした。だから俺は
妻と同じ苦しみを抱えた人たちを治したい。それが
彼女を救えなかった俺が唯一出来る償いなんです」

「……そうか」

「はい、だから俺は精神科医になります」

まっすぐに指導医を見つめ返して答えた佐々木に

羽場医師は深くうなずいた。

「だったらここで働くよりもふさわしい所がある。

大学の医局に頼んでおくから、そこに行ってみなさい」

「ありがとうございます」

立ちあがって深く頭を下げる佐々木の深い傷跡が残る

子供のように小さな手を、羽場医師の両の手が

そっとくるんだ。

「これは指導医ではなく、一人の医者と言うんだが」

「はい」

「辛いと思ったら限界が来る前に、逃げなさい。」

それは決して敗北ではないんだよ。ゴミ箱もまだ定年まではもう少し時間があるから、君の話をまだまだ聞けるさ」

「ありがとうございます」

暖かな恩師の言葉に、佐々木はもう一度深く頭を下げた。

※

羽場医師に紹介された病院は、日本全国でも珍しい

一七歳以下の児童を多く受け入れる精神病院だった。

ベッド数は多くないが、通院や入院をしてくる患者の多くが深刻な問題を抱えていた。

「子供」が持つはずの、優しさ、かわいさ、無垢、純粋さ。

そのような物がすべて削げ落ちた患者達に、佐々木と同期で入った

医師や看護師達の何人かは戸惑い、受け入れることが出来ず、

早々に病院を去っていった。

医者、といっても専門を決めて

一年目の佐々木に大してできることはなく

人手不足も手伝って、子供の遊び相手からシーツの交換まで

出来る雑用はすべて仕事になった。

がむしゃらに働いて一年が過ぎた頃、佐々木は院長室に呼ばれた。

「俺が、アメリカに。ですか」

ぽかん、とした顔で言われたことを繰り返す佐々木に

「佐々木君は、この病院で1年勤務してどうだった」

精神科医特有の穏やかな声で問いかける院長。

「大変……でした」

「そうでしょう。大人向けの心療内科やメンタルクリニックは乱立する世の中ですが、子供向けのそれはめったにない。

それは、大変、だからですよ。子供達はまだ自分を語る

言葉を多く持たない。ゆえに心の悲鳴が問題行動として現れる

佐々木君も大分苦労したでしょう」

「ええ、まあ」

と佐々木は苦笑した。

すぐに暴力を振るってくる子供、やたらべたべたと甘えてくる子供、嘘ばかりつく子供、大分なれてきたとはいえ、まだまだ彼らに振り回されるばかりである。

「ですが、子供達をこのようにしたのは、我々大人です。」

「虐待のことを言っておられるのですか」

佐々木の言葉に、院長は頷く。

「この病院に入院してくる子供の7割が、身体的心理的……そして性的虐待を受けています。

日本も大分児童虐待に厳しい国になりましたが、まだそのケアの受け皿は十分ではありません。」

「はい」

「アメリカのカリフォルニアに、全米でもトップクラスの規模と実績を誇る精神病院があります。

そこでは小児の患者も沢山受け入れている。

日本も九〇年代以降、精神病の治療は飛躍的に進歩しましたが

欧米に比べればまだまだ遅れている、そこは数年ごとに

各国からフェローシップ（専門研修医）を受け入れているのですが、今年はこの病院に声が掛かりました。

小児精神科専門医を志す人間が望ましいと、佐々木君、行ってみませんか」

「いいんですか、俺なんかで」

「僕は一年間じっくりと君を見てきましたが、

子供の心に寄り添うのが妙に上手いですね」

「そんな……」

院長は眼鏡の奥の細い瞳をわずかに細めて、佐々木の体にはしまった幾つもの傷跡を見る。繭の事を含めて、自分の過去は就職する時に全て説明した。

「多分、君は彼らと同じような経験をして、そこから立ち直ってき

た。

そういう経験をした医師は貴重です。君はこれからの経験と実績次第で

この病院をひっぱっていくような医者になると、僕は思っています」

「……かいかぶりです」

褒められるのには、なれていない。全身にむず痒さを覚えてうつむく佐々木に、院長は続ける

「期間は恐らく3年ほど。いつて、見ませんか」

院長の穏やかな言葉に、佐々木は長いこと沈黙した後、答えた「俺で、いいのなら」

続く

第五話 罪悪感

再び聞こえてきた着信音に、佐々木の意識は回想の水底から現実に引き戻された。

手元の携帯電話は沈黙したままだ。

金属的な単音で彼が10代の頃流行った歌を奏でているのは、フォトスタンドの前に置かれた解約済みの古い機種。

曇って見えにくくなった液晶画面に表示されている名前は「木之口 繭」。

あたりまえのように、佐々木は通話ボタンを押した。

大学に合格したあの日以来、電話は気まぐれに妻の声を彼に届け続けている。

羽場医師の治療を受けている時は、幻聴だと思った。

彼の前で妻の死を悼む涙を流すことが出来た後は、たちの悪いいたずらだと

思いこもうとした。

優しく語りかける声に怒鳴りつけた事も、

一晩中なり続ける携帯を布団にくるんでベランダにほうりだした事もある。

だがそれでも、携帯は妻の名前を液晶に表示して

謳い続けた。そして水没させた携帯を解約したその夜、

高らかに着信音を鳴らし始めた携帯を見て、

佐々木は全てをありのままに受け入れようと決意した。

これは、神様がくれた奇跡だ。

「もしもし」

十年前と少しも変わりもない声に、

「もしもし」

十年の年月を重ねた声が答える。

「今、何をしているの？」

「仕事から帰って来たばかりだよ。これから夕飯なんだ」
交わされる会話は、いつもたわいのないものばかり。

「夜中に食べ過ぎると太っちゃうよ」

「わかってるよ、気をつけている」

この声を聞く度に、日本で妻が自分の帰りを待っているような錯覚に襲われる。だが、

「そっち……」

……ツー・ツー・ツー……

一分にも満たない時間で一方的に向こうから通話を切られた瞬間
佐々木は現実に取り戻される。

妻はもう、世界中を探してもどこにもいない。

肉体の僅かな名残りが冷たい銀のリングとなって、
彼の胸にぶら下がっているだけだ。

「ごめんね」

通話が終わると佐々木はいつも同じ言葉をつぶやいて、
携帯電話をミル君が印刷されたハンドタオルで丁寧に拭く。

大学合格と同時にバイトを辞めた時に、大量にもらってきたそれも
すでに残りが五枚ほどになってしまった。

だが、妻が死んでそれほどの年月がたっても、
何度謝罪の言葉を口にしても、佐々木の中で罪悪感が薄れることは
なく、

目に見えぬ枷となって、彼の心に食いこんでいる。

ため息をついて、佐々木は買ってきたベークルサンドを
アパートに備え付けられていた、広すぎるダイニングテーブルの上
であけた。

「こりゃあ家族用だな。椅子だって四客もついているし
早く彼女を作って、手料理を並べてもらえよ」

以前家にやってきた王はからかいまじりにそう言った。

「兵ちゃん、知り合いのお嬢さんがまじめな交際相手を探しているんだけどね、会って見ないかい？」

日本で働いていたころ、事あるごとに小母さんは見合いの話をもってきた。

だが、佐々木はいつも困ったように笑いながら黙って首を振りつづけた。

「俺には、創る資格なんてないんだよ。彼女も、家族も」

誰もいない虚空に向かってつぶやいて、乾き始めたパンを口の中に押し込む。

かさかさとしみじみ紙が擦れる音が、広すぎるテーブルの上で妙に大きく響いた。

※

「おはよう、皆さん、今朝の御気分はいかが。

ちよつと先生にお話を聞かせて頂戴ね」

朝の慌ただしい空気の中を、優しく暖かな声が伝わっていく。

決して大きくはなく、ましてや命令口調でもないのに

ベッドの上でおもしろいおもしろい事をして朝食前のひと時を過ごしていた子供達が

ぴたりと動きを止めた。

そして部屋の入口に立つピンクのスーツに白衣をまとった人の良さそうな

老婦人の姿を見ると、優しい祖母が尋ねてきた時の孫のような表情を浮かべる。

「そうそう皆いい子ね、順番に回っていくから待っていて頂戴ね」

微笑みながら言葉をついで、院長は回診を始める。

その後につき従いながら佐々木は何度も見たはずなのに、普段の定期回診との余りの違いに感嘆のため息をつかずにいられない。

それは、他の専門研修医たちも同じようで、すぐ後ろから

「相変わらずすごいなあ、院長は」

と王の呟きが聞こえた。

週に一度院長が回診するこの病棟は、入院している子供達の中でも症状が重い者たちが集められている。

他害、自害、パニック、多動、虚言、e t c。

ここにいる子供達とコミュニケーションをとることは一苦勞で、毎日の検診は専門研修医達が交代で行っているが、簡単な会話すら成立せずに

時々人というより、手負いの野生動物を相手にしている気分になる。しかし、院長の手にかかるそんな彼らが一時とはいえ、普通の子供のようになるのだ。

職員たちはこれを、病院の七不思議のひとつに数えている。

「何も特別なことはしてないわ」

子供達を従わせるコツを尋ねる研修医たちに、いつも院長は微笑みながら首を振る。

「ただ、いつも心に留めておくの。ここにいる子供達の大部分は周りの大人たちから正しい人とかかわり方を教わっていない。

そして、世の中すべてを極端に恐れている」

確かに、統合失調症や発達障害を除けば、ここに入院してくる子供達は

心身共に虐待を受けてきたものが多い。

「口汚い言葉で罵ってきても、拳を振り上げてきても、

それは彼らなりの感情の表現であり、愛情の伝え方かもしれない。

決して人を傷つけたくて傷つけている訳ではない。だから私はまず自分が彼らにとって絶対安全な人間であると伝える努力をします。

信頼のロープが双方の心にかかるまで、決して怒らない、否定しない生まれたての赤ん坊に接するように丸ごとかれらを受け入る

それだけの事です」

「……それが難しいんだよなあ」

王の呟きに、佐々木や他の研修医達がそっと頷く。

心を閉ざして己の内に閉じこもった子供達にこちらが投げかけるロープはなかなか届かない。中々出ない治療の成果は苛立ちをうみ、つい若い医者達は、

「この子供は病気ではなく単に性格が歪んでいるだけではないか」という結論に達しそうになる。

「精神の病氣に一番禁物なのは焦りよ。最近の世の中はスピードが重視され過ぎているから、一つくらい『ゆっくり』が尊重される事があっても

いいでしょう」

患者に向けるのと同じ穏やかで優しい声で院長はいつも研修医達を諭す。

「リサ。気分はどう？」

何番目かに院長が話しかけたのは、黒髪黒目の大人びた顔つきの少女。

「いつもと同じ、変わらないわ」

そっけなく答えた彼女に頬笑みを返しながら、

院長は主治医は誰と問いかける。

「俺です」

一歩前に進み出た佐々木に、院長は病状を説明して頂戴と告げた。

「自傷行為はなくなりましたが、先日……その、同じ年頃の

少年に挑発的な行動をとったために、一時的に個室に移し、

昨日二度としないと約束した為に、部屋に戻しました」

佐々木の手にしたカルテには、養父から幼少時から長期間にわたる性的虐待を受けたと記されていた。

銀のリングの下の胸がずきりと痛む。

個室に隔離された彼女に、佐々木は行動の訳を尋ねたが

明確な答えは帰ってこなかった。

「そう、リサ。貴方は普通になっているだけで魅力的よ。

次は言葉だけで、相手を誘ってみましようね。絶対にうまくいくわ」

「……私に、できるのかな。やったこと、ないよ」

長い沈黙の後たどたどしい言葉で答えたりサの肩を
院長は優しくたたく。

「大丈夫、やり方が判らなかつたら佐々木先生が教えてくれるわ」

……そう言う事だったのか……

多分彼女は養父とのコミュニケーションを

そうやってとり続けていたのだろう

だから、普通のやり方が判らない。

性的虐待を受けた子供にありがちなことだったのに、

どうして気付かなかつたのだろう。

唇をかみしめる佐々木の胸の奥から

……そんな事も気づかないようじゃあ、繭との結婚生活も続かなか
つたと思うぜ

よかつたじゃないか、彼女がとつと死んで美しい思い出だけが残
つてさ。

お互い傷つけ、ののしり合つて別れるよりよっぽどましだったろう

……

ふと恐ろしい考えが湧きあがる。

「……ちがう、俺は」

思わず呟いた佐々木に、隣にいた王が「どうした？」と声をかけた。

「なんでもない」

どうかしている、昨日久しぶりに妻の声を聞いたせいかな。

数回頭を振つて湧き上がる考えを打ち消したが

白衣の内側で冷たい汗がいくすじも身体を伝っていた。

第六話 カンファレンス

「この頃氣候がいいせいかしら、
どの子も皆落ち着いてきているようね
とてもいい事だわ」

院長は穏やかな声で言いながら、ぽっちゃりとした肉厚の手で
暖かい紅茶が満たされたカップをつかんだ。

回診後、専門研修医達と院長とで行われる勉強会を兼ねた
カンファレンス。しかし、専門医や看護師達と行われるその雰囲気
が

緊張感に満ちた作戦会議だとすれば、こちらは午後のお茶会だ。
それは、院長の容姿と身にまとう空気が

周りを穏やかな気持ちにさせるせいかもしれないし
そっけない会議用のテーブルの上の大皿に山と積まれたドーナツと、
各々に配られる暖かい紅茶のせいかもしれない。

通常のカンファレンスは苦手でも、

月一回のこれは楽しみだと言う専門研修医達が多い。

「では担当している患者さん達の病状で、
相談したい事がある人はいるかしら」

何本かの手が一斉に上げられ、

院長が孫の話を聞く祖母のような表情で

順々に発言者を指名していく。

アメリカの専門研修医とは、レジデント課程を終えてなお
より専門的な知識習得を目的に研修を続ける医者達である。

以前は外科、内分泌科など限られた科にしか存在しなかったが
医学が進歩してより高度な専門知識が必要となった現在、ほぼ全
ての科に

専門研修医は存在する。

佐々木が志す小児精神科専門医は最も新しい分野の一つで

今日の前にいる現役の院長が草分け的存在の一人だった。

彼女が院長に就任してから

この病院は特に一七才以下の虐待を受けた子供達の心のケアに力を入れている。

研修医達から放たれる質問を、院長はやはり穏やかな口調でゆつくりと答えていく。

他の研修医達はそれを熱心にノートに書き留める。

四〇年以上第一線で子供達の

治療に当たってきた医師の言葉は、どんな医学書よりも貴重だ。

佐々木もノートを広げていたが、ペンを走らせる速度は

他の研修医達よりかなり遅い。

アメリカに来て三年、喋ることと聞くことはほぼ不自由なくなったが、

他人が喋る事を理解しながら書きとめるという

三つの作業を同時にこなすのは、やはりまだ難しい。

書くことに集中すれば、英語は単に音の羅列となって

頭を通過していくだけだし

聞く事に意識を向ければ手が止まる。

いつものように四苦八苦していると、

隣に座っていた王がさりげなく自分のノートをこちらに押しやってきた。

そこには

「ノートはあとで見せてやる」

と走り書きがあった。

「ありがとう」

小声で礼を言って佐々木はペンを置き、院長の話を聞く事に集中した。

「院長先生、よろしいですか」

一通りの質問が終わり、静寂が訪れた室内に凜とした声が響く。

同時に上がったすりりとした手の持ち主は、ミナ・ハーカー医師だ。

その姿を見て佐々木は、

今日の回診は小児内科の専門研修医も一緒だった事を思い出した。
まだ大人ほど意思を言葉として伝える能力がない子供達の心的不調は
よく身体の不調となって現れる。頻繁に彼らが訴える頭痛や腹痛や
だるさが

精神的なものか、身体的なものか判断を下すために、

この病院は小児科内科も併設されていた。

「なんですか、ハーカー」

名前を呼ばれた彼女は、猫を連想させる強い光をたたえたアーモン
ド形の瞳を

なぜか佐々木に見据えて立ちあがった。

「国によって、固有の虐待があると書物で読みましたが、
そういう場合特殊な対処法が必要でしょうか」

「国に、よってというのは大げさね。ただし文化の違いによって
我々では考えられない虐待がおこることは、あるわ」

きびきびとした早口の問いに、

院長はあいかわらずゆったりと返答する。

「たとえば、日本の心中のようなものでしょうか」
心中、という言葉に、

佐々木は心臓に針でも突き刺されたような痛みを覚えた。

「そうね、心中は我々には想像できない虐待だわ」

かつて、米国人の夫の浮気を悩んで

子供を道連れに車で湖に飛び込んだ邦人女性がいた。

子供は溺死、女性は助かったこの事件は全米に大きな衝撃を与え
裁判では日米の親子関係の考え方の相違が浮き彫りになった。

「親、特に母親に先立たれた子供は哀れである」

日本ではごく自然に受け入れられてきた母子を一体と見る

考え方は、米国人には理解されず

母親は子供の生きる権利を侵害した殺人罪で裁かれた。

「そういえば、佐々木医師は心中から生き残られたんですね」

いきなり話の矛先を向けられて、佐々木は面食らった。

と同時に、とうに治ったはずの体中の傷痕が不快な熱をともなってジクジクと痛みだす。

「心中から生き残られた後に、何かこの子供達のように問題行動を起こした自覚がありますか？それと、貴方は今ご両親に対してどのような思いを抱えられています？」

矢継ぎ早な質問に、佐々木は黙って首を振った。

「どういう意味ですか？」

ミナの追及の手は緩まない。

「俺は、両親についての記憶は一切ありません」

部屋の中が微かにざわめいた。

「俺の記憶は両頬の傷を鏡で見た時から始まっています。

心中の時の事は、後日医師や警察官に聞いた話しか判りませんだから、心中が原因の心的外傷トラウマもありませんし

PTSD（心的外傷ストレス症候群）も発症していません
唯一刃物を見ると過呼吸の発作を起こす事が、十代後半まであつたくらいです」

「乖離が治っていないのですか、それはPTSDより
重大な問題だと思えます。記憶の一部を欠落させたまま
精神医療に携わる事に私は強い危機感を覚えます」

「ハーカー」

珍しく強い調子で、院長がミナの発言を遮った。

「そのような質問はこの場には不適切です。これ以上続けるなら
退出を求めますよ」

それに何を感じたのか、ミナは不承不承頷いて着席する。
息をつめて三人のやり取りを聞いていた他の研修医達が
ほっと胸をなでおろし、

再び部屋の空気は午後のお茶会のそれに戻っていった。

※

「佐々木。少しいい？」

カンファレンスが終わった後、院長はこれも珍しく少し厳しい表情で佐々木に声をかけた。

「どうして貴方はあの時怒らなかったの？」

「怒る？だれにですか」

困惑したような佐々木に、院長は諭すような口調で話を続けた。

「ハーカーによ。彼女は二つの過ちを犯した。

一つはみなの前で貴方の了解なくあなたの過去を話した」

「……いや、それは皆も知っていることですし」

佐々木の傷跡は髪で隠しているとはいえ、相当目立つ。

当然ここにきたときも質問されたし、隠してもしようがないことなので

佐々木も正直に答えた。日本と違ったのは、だれも陰口を叩かなかったことと

「ブラックジャック」というありがた迷惑なあだ名を頂戴したことだろう。

「喩えそうだとしても、貴方に傷を負わせた過去をこのような場所で勝手に話すのは大問題よ。そして、

偏見によって勝手に貴方を精神科医不適合と発言しようとした」

「でも、解離というか、記憶が戻ってないことは事実ですから」

いい訳じみた佐々木の言葉に、院長は深いため息をついた。

「いい。佐々木。貴方はここに来るために、

幾つかのレポートと心理テストを受けたわよね

それを採点したうえで、専門研修医として迎え入れる決定を下したのは私なの

彼女の発言を貴方が認めるなら、

それは私の見た目が無かったことになるわね」

「すいません」

口の中で呟いて頭を下げた佐々木に、

院長はもう一度ため息をついた。

「佐々木、謝罪が美德に繋がるのは貴方の国だけよ。

貴方は「怒る」ということを覚えた方がいいわ。

すべてが自分の非だと思ってしまえば、楽なのかもしれないけど
それでは相手の為にもならないのよ」

あくまでも穏やかな口調で話し続ける院長に、

佐々木はただ、頷くことしかできなかった。

第七話 志望動機

「それで？ 説教を食らった上にドーナツを押しつけられたのか。ブラックジャックは」

「うん、だからノートのお礼に王にやる。遠慮せずに受け取ってくれ」

十三時を少し回った半地下の職員用カフェテリア。

先ほどのカンファレンスのノートを受け取った佐々木は、王が再び口を開く前に彼の手の中に油染みの浮いた紙袋を押し込んだ。

日本の物より数倍は大きく、甘ったるい菓子パンはとても毎日食べ続けられるものではない。

だからといって食べられる物をゴミ箱に放り込むわけにもいかない。かくしてこの病院では毎日あちこちで、

職員同士によるドーナツの押し付け合いが行われているのだ。

無論全ての元凶は院長で、昔は抗議する者もいたらしいのだが、暖炉の傍らで編み物をしているような表情で

「あら、でも甘いものは気分が落ち着くし皆大好きでしょう」とおっとりと言いつ返し返されるばかりで、いつしか皆諦めきってしまったらしい。

「絶対に院長はこの病院の職員を纏めて成人病にする気だぜ。

自分が肥満体の糖尿病予備軍だから

道連れが欲しいんだ。あ、でもブラックジャックは違うな。

大きくなってほしいんだよ」

と言っているものように人の長い髪の毛をぐしゃぐしゃとかきまわす王を、

佐々木はじろりと上目づかいに睨みつけた。

「殴ってもいいか、グーで」

日本人の中でも小柄な佐々木は、大きな目に丸顔という童顔も重な

って

こちらでは未成年に間違えられる事も多い。

その事をからかわれると流石に気分が悪かった。

叩きつけられた腕を寸での所でかわして、王は意外そうな顔をする。

「なんだ、こういう時はちゃんと怒ることが出来るじゃないか」

ばつの悪い表情をする佐々木に、王はまあ、さっきのと今のは状況が違いすぎるか、と独り言のように呟いて

「すまん、悪かった」

ときちんと佐々木に向けて謝った。

「いいよ、からかわれるのは慣れているから」

「可愛くないな。……所で本当なのか。その、両親の記憶がほとんどないというのは」

本当だよ、と答えて佐々木はカフェテリアの隅に備え付けられているサーバーからコーヒーを二つの紙コップに注ぐと、一つを王に手渡した。

「聞いた話だけど、子供に無関心な人たちだったようだし

ここの患者さん達みたいに辛い記憶に苦しむよりは、よっぽどいいと思っっているよ」

「それでも、幸せな思い出が皆無というわけじゃないと思うんだがな」

ややあってぼつりと返された言葉に、佐々木は妻の言葉を思い出す。実の親から性的虐待を受けた彼女も、楽しい思い出があると

それを糧に生きてこれたと言っていた。

また、胸の奥が痛んだ。

「治療は受けた事があるのか？」

「何回か。効果がなかったからもう諦めているよ」

それを頭を軽く振って誤魔化して、佐々木は答える。

「そうか、不思議だよ人の心は。ブラックジャックみたいに
ある時期の記憶だけすっぱりと抜け落る事もあるし、逆に何十年も
前の事なのに」

昨日のように思い出すことができ、それで苦しんでいる患者さんもいる。

俺の祖父さんは中国人だから、病は気からってよく言っていて子供の頃は信じられなかったけれど、実際自分が医者になって見ると納得できる事例は多い。俺は人の心を解きほぐす事が治療とはいえ恐ろしいと思う時があるよ」

「じゃあ、別の科を選択すればよかったんじゃないのか？

どうして精神科医の道を進んだ？」

佐々木の問いに、王は肩をすくめる。

「治してやりたい人がいるんだ」

「心の病をか？」

酷くまじめな表情で王は頷いた。

「正式な精神病、というわけじゃないんだが。こっちが見ていて辛くなるほど

本人は自分を追い詰めている。でも何度説明しても認めようとしないんだ」

「そうか、それは辛いな」

精神病は患者や周りの人間が病気を受け入れられない例が、肉体の病気よりはるかに多い。それは時として病の悪化を招き最悪な状態になってから、精神科救急に担ぎ込まれる人々を佐々木は何度も見た。

アメリカは日本より遥かに精神科受診に対してのハードルが低いが、それでも抵抗を感じる人もいるのだろう。

「それ以外は頭もいいし、理解力も人一倍ある奴なんだけどな。あんまり頑固だから、俺の方が心配でおかしくなりそうになった時に思ったんだ。

助けを求められた時、すぐに手を差し伸べられるような職業についておけば

少しは俺自身が楽になれるし、一生かけて付き合ってやれるだろう。ブラックジャックから見れば邪道だろうけどな」

その言葉に佐々木は首を振った。

「いや、立派な理由だと思うよ。半年ごとに恋人を替えるから色々と誤解していた。王君、悪かった」

今度は王が慚然とした表情を浮かべる。

「恋人だと言った覚えはないがな。せっかく男に生まれたんだから楽しむ時は楽しまなきゃ損だろう。ブラックジャック」

そこでにやりと笑って、王は白衣のポケットからカラフルなチケットを

取り出した。

「今度の日曜日、よく行くバーでライブがあるんだが行かないか？
いや、演奏は大したことないんだが、集まる女の子達が中々美人揃いなんだ。

たまには息抜きも必要だぜ」

「いいよ」

苦笑しながら佐々木はもう一度首を振る。

「俺はそういう事は苦手だから」

「……本当に奥手だなあ、ブラックジャックは。そんな事じゃいざ好みの子が現われても、何もできやしないぜ。それにいつまでも右手が恋人じゃ寂しいだろう。お兄ちゃんは判ってるんだ」

「真昼間になんてこと言うんだ、それに誰が兄だ」

顔を赤黒くして叫ぶ佐々木の頭を、今度は子供にするように軽くたたいて王はもう一度笑う。

「身長差で決定した。じゃ、そろそろ診察があるから

行くぞ。ノートは来週までに返してくれればいい」

空の紙コップをゴミ箱に放り投げて、さっさとカフェテリアから立ちさる友人の背中が見えなくなると、残された佐々木はため息をついて

「一生かけて付き合ってやれる、か」

と王の言葉を口の中で反芻した。

何のてらいもなく自然とその言葉を口にできる友人が心の底から

うらやましい。

自分がそうしてやりたいと思う相手は、もうこの世のどこにもいないのだから。

空っぽの右手が無性に寂しくて、佐々木は胸元の銀のリングを握り締める。

だが、冷たい金属のそれに、十年前妻の手に感じていたような温もりは

欠片もなかった。

続く

第八話 発作

「パパ。お願い、もうやめて」

「どうしてだい、パパはお前を愛している。

愛しているからこそ、これをやるんだよ」

「嫌、こんなこと友達は誰もやっていない。

パパの愛は本当の愛じゃない」

カーペットだけが床に敷き詰められた

白い壁のがらんとした部屋に、数人の男女が大げさな身振りで会話を交わしている。

棒読みの台詞に、真に迫る表情や動作が壁際で見つめる

佐々木には妙に生々しく思えた。

サイコドラマ療法。

過去の体験を乗り越える為の集団精神療法（グループ療法）の一つで即興で自分の抱え込んでいる悩みを、他の参加者に「話す」かわりに

「演じる」ものだ。これによって、演者は参加者に慰めをもらい、

参加者は演者、主に主役を演じた人に癒しを与える。

人を受け入れる体験と、受け入れられる体験を同時にできるこの療法は

回復期の患者達がわりと積極的に参加したがる治療のひとつである。

佐々木はこの場に進行、内容、など起こること全てに責任を持つ
ディレクター
治療者として参加していた。

今日の主役は父親の性的虐待の記憶を乗り越えたいらしい。

身体的、心理的虐待より性的なそれは、より大きな罪悪感と自己卑下の

感情を抱え込みやすい。それを他人に話せる様になるまでには長い時間と、葛藤とそして根気強い治療が必要だっただろう。

「パパ、嫌なの。私を愛しているのならこんなことはやめて」

ひと際悲しげな声で、主役を演じている女性が叫ぶ。

その姿にいつのまにかよく見知った人影が、二重写しのように重なる。

重そうな長い黒髪に、疲れたような表情と暗いまなざしをした少女。

「繭!」

ぴたりと演者たちの動きがとまった。

一斉に向けられた視線に、初めて佐々木は自分が叫び声を上げた事に気づく。

「佐々木先生、どうしましたか。何かの指示ですか」

一緒に劇を見学していた心理士が怪訝な顔をして尋ねてきた。耳慣れない日本名が何かの合図に聞こえたらしい。

「い、いや何でもなし。すまなかった。演技を続けて」

佐々木の言葉に、演者たちは頷いて劇は再開されたが一度霧散してしまった集中力は戻らずに、先ほどより演技はずっと上滑りしたモノになっている。

……どうかしている、本当に……

いくら性的虐待という共通点があるからと言って

大柄でブロンドの髪の白人女性に、妻の姿を重ねるなんて。

もう余計な事を考えないようにと、佐々木は患者達が演じる劇に意識を集中させる。だが、

「お前が私を誘惑するから悪いんだ」

父親役の患者の台詞に、再び脳裏に泣き顔の妻の姿が浮かぶ。彼女も同じような事を言われたと自分を責め続けていた。

そう思うてしまうと、もう佐々木には劇を演じている患者が繭にしか見えなくなった。

十七歳の妻が、もっとも信頼され、守られるべき父親に押し倒され、欲望のはけ口にされ心を殺されようとしているのにただそれを傍で見ているしか出来ない自分。

「先生、佐々木先生、先生」

再びかけられた声に、佐々木はようやく我に返った。

いつのまにか劇が終わっていて、演者たちがまた自分を見つめてい

る。

「大丈夫ですか、顔色が真っ青ですよ。

劇の総評と、患者さん達にアドバイスをお願いします」

心理士の言葉に佐々木は操り人形のようなぎくしゃくとした動きで頷いた。

※

「珍しいな、二日酔いか？」

かけられた声に、佐々木はやっと水を流し続ける水道の下に突っ込んでいた

頭を上げた。

「ああ、肩口までびしょぬれじゃないか。しっかり拭かないと風邪をひくぞ」

振り返ると同時に、後ろに立っていた王が手の中にタオルを放り込んだ。

「何か用か？」

自分でもぎよっとするほどとげとげしい声に、王もまた面食らったようだ。

「どうした、えらいご機嫌斜めだな。何があったブラックジャック」

「なんでもない。ごめん」

タオルで髪を乱暴にぬぐいながら、佐々木は一転して小声で謝る。

冷たい水で頭を冷やせば少しは妻の面影が

離れてくれるのではないかと思ったのだ。

「いや、謝らなくてもいいが。本当に大丈夫か

先日から少しおかしいぞ、お前は」

「何でもないんだ。大丈夫だよ本当に」

無理やり明るく答えて、佐々木は大仰な動作でタオルを友人の手の中に

投げ返した。

「だいいいな。ハイデッカー先生が呼んでいたぞ」

「それを早く言ってくれ」

佐々木は慌てて男子トイレから飛び出して医局に向かった。

「佐々木、どうしたの？患者さんから何かをかけられた？」

まだぐっしりと濡れたままの髪を見て、佐々木の指導医である

黒人の女医が問いかける。

「ええ、まあそんな所です。何の御用ですか」

それを曖昧な笑顔でごまかして、佐々木は問い返した。

「ああそうそう、私は今日の午後一件カウンセリングを入れていたんだけど」

急な仕事が入ってしまったの。回復期の患者さんだから代わりを頼むわ

帰ってきたら内容を聞かせて頂戴」

差し出されたカルテを受け取って目を走らせ、佐々木は心の中で舌うちする。

「ミキ・ロス・タチバナ 17歳 女子。」

幼少時より実父からの性的虐待あり。自傷、他害、幻覚、幻聴。解離症状あり。」

今一番話を聞きたくない症状の患者だ。だが、断る理由も思い付かない。

カウンセリングルームに入って、改めてカルテを読み返していると赤黒い筋が幾つもはしる白い腕が、そっと繋いでいた荒れた指先が、ごめんなさい、と謝る声が、切れ切れに、

しかし鮮やかに佐々木の脳裏に蘇ってきた。

……なんでこんな昔の事ばかり……、落ち着け、これは繭じゃない……

何度も深呼吸を繰り返していると、控えめなノックの音がして心理士に伴われて小柄な少女が入ってきた。

その長い黒髪に、先ほどの女性患者よりも鮮やかに妻の姿が重なって見える。

「気分はどうか」

動揺を押し殺して佐々木は尋ねる。

「まあまあ、かな。天気がいいし。外に出られればもっとよくなりそう」

控えめに笑いながらミキは返答した。と、その手から弄んでいた白いハンカチが落ちた。

「あ、ごめんなさい」

その言葉を聞いた瞬間、佐々木の目の前の風景が一変した。部屋の中央に置かれた様々な医療器具に囲まれたベッド。その上に力なく横たわる妻。

「……ごめんなさい」

苦しい息の下から囁かれる謝罪の言葉。

そして、握りしめていた腕から急速に力が抜けていく感覚。手足の先がずっと冷えていく。

呼吸を繰り返しているのに酸素が肺に入っていない。

……フラッシュバックによる、パニック発作だ……

自分がどんな状況に陥ったのかは冷静に把握できるのに、身体が動いてくれない。

「先生、佐々木先生」

異常を感じ取った心理士が慌てて駆け寄ってきた。

早く、ほかの、医師を。

言葉が出ない。細かい震えが全身を駆け巡る。

その様子を見て、ミキが悲鳴を上げてうずくまった。

その拍子に、カルテの入った移動式ワゴンが倒れ大きな音を立てる。

「どうした、何があった」

部屋に飛び込んできた王の姿を見たのを最後に佐々木の記憶は途切れた。

第九話 絶望

「馬鹿じゃないの」

頭上から降ってくる罵声を、佐々木はベッドに横たわったまま無言で受け止めていた。

「患者さんをカウンセリングしている最中に倒れるなんて、貴方は自分の体調一つ管理できないの？ それ以前に精神科医としての自覚はあるの？」

数分前に佐々木が目を覚ましてから、ミナは途切れることなく糾弾を続けている。

「患者さんの方も倒れた貴方を見て、恐慌状態に陥って拘束して鎮静剤を使わなければならなかったわ。

判ってる？ 貴方の行動がせっかく良くなりかけた患者さんの症状を悪化させたのよ」

「……ごめん」

シーツの端を握り締めて、佐々木は呟くような声で謝る。

ミナのアーモンド形の瞳が怒気で輝きを増す。

「言う事はそれだけ？ それで済む問題なの？」

「おいミナ、いい加減にしないか」

何時の間に部屋に入ってきたのか、王が大きな手で彼女の華奢な肩を宥めるように叩いた。

「なによ、陰月いんげえ私はこの医者いんげえの自覚もない

大馬鹿者に事の重大さを教えているだけよ」

今度は従兄弟にくっつかかるミナ。

「自覚がないわけないだろう。何をやらかしたのか

佐々木は十分に判っているはずだ。今ここで彼を責めてもどうしようもない」

「陰月、私は」

「ミナ」

王の口調がほんの少し強くなった。

「病人の耳元で怒鳴り続ける。これが医者やる事か？」

その言葉にミナは再び口を開きかけたが、王が手振りで外してくれ、と伝えると荒い足音を立てて部屋を出て行った。

「やれやれ、すまん。手が空いている医者が彼女しかいなかったから

診ていてくれと頼んだんだが……。気分はどうだ？」

枕元に腰を下ろした王に、佐々木は首を振る。

「俺の事はどうでもいい、患者さんの具合はどうだ？」

王の顔が曇った。

「ミナのいった通りだ。今は薬で眠っているから

目が覚めないと詳しい事は判らないが、多分症状は悪化すると思う」

「俺のせいだ」

ちぎれるほどシーツを握り締める酷い傷痕の残る子供のようにな小さな手を、一回り大きな王の手がいたわるようにそっと叩く。

「余り自分を責めるな。不可抗力だったんだろう」

「……ハーカー先生の言うとおりだ、俺は医師としての自覚もない大馬鹿者だよ」

自責を続ける佐々木を、王はしばらく黙って見つめていたがやがて

「起きられるか？ 院長が会いたいそうだ」

と言いにくそうに告げた。

※

「謝罪はいいから、こちらに来てお座りなさい。

倒れた時に頭は打たなかった？ 目眩や気分の悪さはもうないかしら？」

院長室に入るなり、

「申し訳ありませんでした」

と深く頭を下げた佐々木に、院長はいつものように優しく語りかけ、ソファの方を指差した。

その態度が逆に身を切られるほど辛い。

怒鳴りつけられた方がよほど気が楽だ。

「ドーナツはいかが？」

「いえ、結構です」

腰を下ろし硬い表情で首を振った佐々木に、院長は

「ではせめてお茶をお飲みなさい。少しは気分が楽になるわ」

と大きなカップになみなみと入ったミルクティーを手渡した。

カップの縁に口をつけると、柔らかい甘味が口の中に広がる。

「少しは顔色が良くなってきたわね。じゃあ貴方が喋りたくなったら

カウンセリングルームで何があったか聞かせてもらえるかしら」

どこまでも自分を気遣ってくれる院長の態度に、佐々木は

入院患者達が彼女を慕う理由がやっとわかった気がした。

「そう、奥様が亡くなった時の風景が急にフラッシュバックして

過呼吸発作を起こしたのね」

少なくとも時間をかけて、出来る限り客観的に自分の症状を

説明した専門研修医に、院長は深くうなずいた。

「奥様が亡くなったのが十年前。いままでにこのような症状が

でたことはない？」

佐々木は首を振った。

「過呼吸の発作も、二十代に入ってから皆無です。

妻の死は……乗り越えたものとはかり思っていました」

「自分の心は、自分が一番わからないのかもしれないわ」

「俺はもう、精神科医としてはやっていけないのでしょうか」

「結論を急ぐのは良くないわ」

孫に対する祖母のような口調で、院長は佐々木を諫める。

「病は治療すれば治るものよ。貴方だって今まで

積み上げてきたキャリアを無にしたくはないでしょう」

「はい」

「でも、佐々木」

院長の表情が孫を見る祖母から、研修医を見つめる指導医のそれに代わる。

「十分に判っていると思うけれども、精神の病は

治療期間がはっきりしないわ。性的虐待の経験を持った

女性患者はこの病院に沢山いる。そして、

貴方が精神科医を続けていくならば、患者として

数多く出合う事になるでしょう。彼女達を

長期間治療できないかもしれないと言う事は、

大変なハンディよ」

「……じゃあ、俺はやはり」

「結論を急ぐのは良くないと言ったでしょう、

三か月、貴方には投薬を中心とした治療を受けてもらいます。

もちろんその間、発作を起こす条件に該当する患者の

治療は一切禁止。それでもし、症状が緩和されなければ」

そこで一度言葉を切り、院長は佐々木を

じっと見つめた。かわいい孫に悪い知らせを告げなければいけない

祖母の表情で。

「私は精神科医として、貴方に転科をすすめます」

その言葉に、佐々木は足もとの固い床が砂になって崩れていくような

錯覚を覚えた。

「今日はこのまま帰りなさい。そしての休養を命じます。」

「大丈夫です。仕事をしていたほうが気が休まるんです」

「佐々木」

院長の肉厚の手が優しく白衣に包まれた肩をたたく。

「病を仕事に依存して誤魔化そうとしている時点で

貴方に患者は診せられないわ。これはこれは院長ではなく

一人の精神科医としての意見よ。貴方に必要なのは休息。

処方箋は書いておくから、きちんと服薬して心を休めなさい」

「……はい」

絶望感がゆつくりと体中に満ちるのを感じながら
佐々木は硬い表情で、院長の言葉に頷いた。

第十話 紛失

「おい、ブラックジャックここにいたのか」

のろのろと佐々木が更衣室で着替えを終えた時、

王が息を切らせてそこに入ってきた。

「探したぞ」

「何か用か？」

ぼんやりと佐々木は問い返した。

目の前の風景全てが色を失い、現実味に欠けている。

まるで分厚い硝子越し世の中を見つめているような感覚。

十年前まではそれが当たり前だった。

また、ガラス瓶の底にもぐりこんだのか、俺は？

ロッカーの内側につけられた鏡の中に、自嘲的な笑みを浮かべる自分の姿が写っていた。

「何か用かって、薬局から薬が届かないうちに帰ってどうする。

ほら……大丈夫か？」

機械的に頷きながら、佐々木は差し出された紙袋を受け取った。

「タクシーで帰れよ、倒れたんだから。その、今晚はゆっくり休むとして

明日辺り、夕飯を食べないか。いい店を見つけたんだ」

友人の気遣いすら今は疎ましい、まるで太陽の光を厭う吸血鬼だ。そう思うと、また同じ笑みが浮かぶのを今度ははっきりと感じる。

「いいよ……一人にしてくれないか」

「仕事が終わったら電話する、必ず出てくれよ」

王の言葉をどこか遠くで聞きながら、佐々木は重い体を引きずって更衣室を出た。

※

——こんな所があったんだ——

木製のベンチに腰を下ろして、佐々木はぼんやりと

目の前の池と、そこで泳ぐ水鳥を見つめる。

病院は出たものの、家にまっすぐ帰る気にはどうしてもなれなくて通勤路を外れて細い路地から路地へふらふらと彷徨い歩いた末、小さな池とバラの植わった花壇とベンチだけがある公園に辿りついた。

秋の暖かい日差しをいっぱいに浴びて泳ぐ水鳥を見ると、妻に手作りのプレゼントを贈ろうと、公園で水鳥をスケッチした日の事が

昨日の事ように思い出される。

繭と出逢ってからあの日までが、自分の人生の中で一番輝いていて喜びに満ちていた日々だった。

——疲れたな——

手足を動かすことすら億劫に感じるほどの疲労感がずっしりと両肩にのしかかる。

医大に入学してから今日まで、妻のような苦しみを抱えている人たちを

助けたいと、それだけを願って生きてきた。

勉強して、経験を積んで、アメリカにまで留学したのに自分の心がこれまでの日々を帳消しにして、未来を断ち切ろうとしている。

何かに驚いたのか、水鳥たちが一斉に鳴き声を上げて飛び立った。それに佐々木は酷い傷痕の残る、子供のように小さな手を伸ばす。

——繭、君の元に行ってもいいかな——

唯一の生きる意味を失ってしまえば、これ以上この世にいる理由が見当たらない。

どうせ、両親に殺されかけた時点で半ば終わったような人生だったのだ。

もう、ピリオドを打ってもいいじゃないか。

「先生、佐々木先生じゃないか」

唐突に肩を叩かれて名を呼ばれ、佐々木ははっと我にかえった。

「あ、あなたは」

振り返ると、いつもベーグルサンドを買うセルフレストランの店主がいつもの表情で立っていた。

「こんな所で日向ぼっこかい？　でもそろそろ夕暮れだ。

終いにした方がいいんじゃないか」

言われて空を見上げれば、蒼かったそれはすっかり茜色に染まっている。

物思いに沈んでいる間に過ぎ去った時間の長さに驚いていると、

「先生、暇ならちよっと付き合ってくださいかい」

店主はそう言って、返事も聞かずに歩きだす。

「え、えっと俺は」

「手間は取らせないよ」

ぶっきらぼうな答えに、佐々木は戸惑いながらも店主の後をついていった。

「はい、熱々だから気をつけて食べてくれ」

連れて行かれたのは何時も帰りによる彼の店。有無を言わずテーブルに着かされて、目の前に湯気の立つ具だくさんのスープとパンが置かれた。

「あの、こ、これは」

「実は店のテイクアウト用の新メニューにしようと思うんだが、意見を聞かせてほしくてね。先生が今のところウチのテイクアウトの一番の利用者だから」

「で、でも」

「遠慮はいらないから、率直な意見を聞かせてくれよ」

にこりともせずそこまで促され、佐々木はおずおずとスプーンを握った。

トマト味の、大きく切った根菜とベーコンがたっぷり入ったそれを口に含むと、ほっとするような優しい味が舌の上に広がる。

「どうだい」

「美味しい……です」

最初は緩慢だったスプーンの動きが徐々に早くなる。簡単な朝食を食べて以来、何も口にしていなかったと気付いたのは皿がほぼ空っぽになった頃だ。

「よかった。飯が食えるなら少しは安心した」

「え？」

「さっきベンチに座っていた先生の顔、酷かったぜ。まるでそのまま何処かのビルの上に上って飛び降りちまいそうだった。今は大分ましだけどよ」

「……」

そう言えば、食べ物をお口にしたらせいか手足すら動かすのが億劫だった疲労感が大分軽くなっている。気持ちもしゃんとしてきて、院長が帰れと言った意味がやっと判ってきた。

死を望むような心理状況で、どうした患者の治療が出来ただろう。と、同時に店主が自分をここに連れてきた理由も。

「あ、あのすいませんでした。なんだかご、ご心配をかけてしまったみたいで」

新製品の試食は方便にちがいない。

慌てて立ちあがって頭を下げる佐々木に、

店主は初めて苦笑じみたものであったが笑顔を見せた。

「生きていればどうしようもなく辛い事もあるさ。特に先生は外国で一人頑張ってるもんなあ。スープ一杯で元気が出てくれれば安いもんだ」

「い、いえ。ちゃんと料金は払いますから」

「今日の昼飯の残りだ、気にすんな」

相変わらずぶつきらぼうだが暖かい言葉に、佐々木はもう一度頭を下げる。

人の親切が痛いほど身にしみたのは、これで二度目だ。

「あの、じゃあすいませんが」

「なんだい」

「いつものベークルサンドを下さい。明日の朝食にします」
「……あいよ」

もう一度笑って頷いて、店主は厨房へと消える。

それを見送って佐々木は王から渡された薬の紙袋を開けた。

ごく軽い睡眠導入剤も処方されている。今日はとりあえず

これの助けを借りてゆっくり眠ろう。疲れているとさっきみたいに碌な判断が出来ない。と、

「すいませーん」

呂律が回っていない声と共に、店のドアが開いた。

千鳥足でよろよろと店内に入ってきたのは、スーツを着た若い女性。その顔を見て佐々木は驚いた。

「ハ、ハーカー先生」

「あら、佐々木先生」

こちらを見るアーモンド形の瞳にいつもの攻撃的な強い光はなく、とろんと霞がかかったようだ。彼女が側に近寄って来るにつれつんと強いアルコールの匂いが鼻をついた。

まだ宵の口だというのに、どうやらさうとう飲んでいるらしい。

「謹慎中なのに、こんな所でどうしたの？」

口の悪さは相変わらずだが、迫力は昼間の半分以下だ。

「先生、大分飲んでますね」

「そんなことないわよう、部屋で飲み直そうと思って。」

お酒、売ってるわよねえ、ここ」

とぐるりと辺りを見回した後、ミナは佐々木の前の椅子に崩れるように

腰を下ろすと、テーブルに突っ伏してしまった。

※

「ハーカー先生、しっかり歩いてください」

肩を貸して道を歩きながら、佐々木は女医に呼び掛ける。

店主が戻ってきて呼びかけても、揺さぶっても

テーブルに突っ伏してしまった彼女が起きる気配はなく

悪いと思いつつ持っていたハンドバックを開けてみると、

身分証明書がでてきた。それによるとミナはこのすぐ近くに住んでいるようだ。

放っておくわけにもいなくて、送って行くことにしたのはいいが、女性とはいえ長身の彼女は、小柄な佐々木よりも背が高く、

しかも半分眠っているらしく、まともに足を動かそうともしない。

苦勞して歩を進めていくうちに、流石に腹が立ってきた。

大体彼女は会った頃から、些細なことで暴言を吐きながら突っかかってきたのだ。

そんな相手にどうしてここまで親切にしてやらねばならない。

「いい加減目を覚まさないで、道に放り投げるぞこの酔っぱらいめ」

「そんな事言わないでよう、もう少しなんだからあ」

間延びした答えに、膝が砕けそうになる。

病院の彼女とはまるで別人だ。

「……ここか」

たどりついたのは、佐々木の住んでいる物とよく似たアパート。

場所も意外なほど近い。

やはりエレベーターなど便利な物は着いておらず、

狭い階段を苦勞して登って、彼女の部屋に辿りつく

ドアの前にミナを下ろした。

「着きましたよ。ちゃんとベッドに入って寝てくださいね

風邪ひきますから」

そう声をかけて階段を降りかける佐々木の耳に、苦しげなうめき声が聞こえた。

振り返れば、ミナは立つ事も出来ずに外廊下にしゃがみこんだままだ。

「飲み過ぎだよ、何があったか知らないけれど」

面倒をみる義理など少しもないのだが、佐々木はため息をついて彼女の元に戻ると、その手から鍵をとった。

「はい、水を飲んで。そうそう、飲めなくなったら思い切り吐いて」やはり苦しげな声を上げて、嘔吐するミナの背中を佐々木はさする。水を飲ませた上の嘔吐は、飲み過ぎた時最も有効な治療法だ。バスルームで数回水を飲んで吐き、をくりかえすとうまくミナはふらふらと立ちあがった。

「二日酔いくらいは覚悟しろよ、懲りたらむちゃな飲み方はやめてくれ」

そのままベッドに直行して倒れ込んだ彼女にそう言って毛布をかけてやった時、

白くしなやかな手が、佐々木の両肩をつかんだ。

思いのほか強い力で引き寄せられて、

佐々木はバランスを崩して彼女の上に倒れこむ。

スーツ越しとはいえ、十分に柔らかい女性の体を全身で感じてどつと汗が噴き出す。

「離して、ハーカー先生、離してください」

そのままぎゅっと抱きしめられて、佐々木は何とか抜け出そうと必死に体をよじった。

「なんで、逃げるのよ。男でしょ」

拗ねた様な声が耳元で囁かれ、自分の唇に彼女のそれが重なる。

と、同時にぬるりとした生暖かい物が口の中に入ってきた。

舌だ、と理解した瞬間佐々木の中で嫌悪感が爆発した。

「やめてくれ」

手加減など考える余裕は無かった。ありったけの力でミナを突き飛ばすと、

アパートの階段を駆け下りる。

ようやく足を留めたのは、自分のアパートの入り口だった。

世慣れた男性なら嬉しいに違いないシチュエーションも、

繭以来女性と付き合った経験も無く

親にすら抱きしめられた覚えの無い佐々木には、親しくも無い相手から突然体の自由を奪われ、一方的に体内に近い場所を蹂躪される行為は、混乱と、恐怖すら感じるものでしかなかった。

胸をつき破りそうなほどの動悸をなんとか耐えようとしてそこに手を置いた瞬間

酷い違和感を感じる。いつも触れるはずの冷たい金属の手触りが、ない。

「な、ない」

何度首元をなでまわしても、そこに感じるのはYシャツの布の感触だけ。

院長に転科を勧められた時とは比べ物にならない絶望感が湧き上がる。

「繭!!どこだ」

叫びながら佐々木は元来た道を駆け戻る。だが思い出せる限りの道をたどり

地面をはいつくばるように植え込みの陰や、車の下まで覗きこんでも銀色のペンダントは見つからなかった。

「……もしかして、ここか」

アパートの前を流れている幅の広い汚い水がよどんでいる側溝。だが躊躇なく佐々木はそこに飛び込んだ。

「繭、どこにいたんだ、繭」

必死に叫びながら、汚い水に手を突っ込んでペンダントを探す。

いつのまにか叩きつけるような激しい雨が降りだしたが、

佐々木は夜間警邏中の警官に懐中電灯を向けられるまで、汚い水の中をかきまわしつづけていた。

「ふん……ペンダントねえ、届けられたら連絡するから。」

家に帰りなさい。もう夜中だし、不審者と間違われて撃たれるぞ」

警官に忠告されて、佐々木はしぶぬれで泥まみれのままのろのろと階段をのぼった。

震えが止まらない手で苦勞して鍵を開け、そのまま椅子に崩れるように腰を下ろし

広すぎるテーブルに突っ伏す。

「繭……どこに……いるんだ、繭」

うわ言のような問いかけに応える者は、無論なかった。

第十一話 狂乱

瞼を射る眩しい光にうつすらと目を開けると、
テーブルの裏側と椅子の足が視界一杯に写る。

自分が土足で歩きまわる床の上に倒れていると気付くのに、数瞬かかった。

と同時に酷い悪寒が背筋をかけのぼり
酷い痛みとなって頭を内側から乱打する。

肌にくっつきたりと張り付いたびしょぬれのYシャツが
凍えるほど冷たく、気持ちが悪かった。

着替えないと起き上がろうと僅かに頭を上げたたん、
部屋の全てが歪んで見える程の目眩に襲われて、
再び床に突っ伏す。

どうやらかなりの高熱が出ているらしい。

悪寒と目眩はそのせいだろう。

「……まずい、な」

いくら温暖な季節とはいえ、この身体でずぶ濡れのまま床に倒れて
いれば

肺炎になるかもしれない。

だが、息をするのも辛い身体は容易にいう事を聞いてくれない。

何度か椅子や机にすがって立ちあがろうとして失敗し、その度に冷
たく固い床に

身体が叩きつけられて全身に耐えがたい痛みがはしる。

「もう、どうでもいいや」

ついに佐々木はかすれた声で呟いて、全身の力を抜いた。

妻を無くしてしまった罰が当たったんだ、このまま死んでもしよ
うがない。

少しでも悪寒を和らげようと、両手で肩を抱いて身体を丸め、
目眩を感じないように眼を固くつぶっていると、うとうとした眠

気がやってくる。

高熱が誘う（いざなう）浅い眠りの中、佐々木は妻を探し続ける夢を見た。

倒れそうになる位走り回って、やっと妻の姿を見つけると

それはすでに氷のように冷たく硬い死体となってしまうている。

「繭!！」

自分の叫び声で佐々木は眼を覚まし、悪寒と頭痛、それに喉の渇きに苦しみながら

またとろとろと眠りに落ちて同じような夢を見た。

そんな事をどれだけ繰り返したのだろう。

何度も遠くから名前を呼ばれ佐々木は重い瞼をうっすらと開いた。目の前に妻が立っている。

「……繭？」

呼びかけに困ったように笑いながら、

妻は自分の手を熱心にタオルで拭ってくれた。

その暖かさと心地よさに、ため息が漏れる。

拭い終わったのか、妻の手がずっと伸びて自分の額に触れた。

その冷たい感触がまた気持ち良い。

「繭、ありが……とう」

「目が覚めた、佐々木先生」

妻の口から放たれた、明らかに別人の声に急速に意識が覚醒する。

と同時に妻の姿が溶けるように消えて、

まだ目眩で歪む視界の中に現われたのは

妻と同じ黒髪の、しかし比べ物にならないほどアーモンド形の瞳に

攻撃的な強い光をたたえた女性。

「ハーカー、先生？」

「動かないで、今熱を測っているから」

起き上がろうとした佐々木の肩を、

しなやかな手が意外なほど強い力で押しとどめ

耳穴に差し込んだ体温計を抜いた。

「39度5分、結構高いわ。一晚中ずぶぬれの泥まみれのまま床で寝ていたの？」

変わった趣味の持ち主ね」

いつもの調子で突っかかれて、佐々木は

「どうして、ここに？」

とかすれた声で訊ね返した。

「目が覚めたらこのジャケットが部屋にあったのよ。ポケットに先生の手紙が」

財布が入ってたから、さぞかし困ってるだろうと届けにきたの。

呼び鈴押しても返事がないから帰ろうかと思ったけど、念のためにノブを回したら

あっさり空いたから、そのまま入らせてもらったわ。

良かったわね、私が強盗じゃなくて」

呆れたような表情で、ミナは自分が昨日来ていたジャケットを軽く掲げる。

鍵をかけ忘れていたことどころか、財布を置き忘れたことさえ今まで気がつかなかった。

「でも、黙って入ってこなくても」

「遠慮して入らなかったら、先生は肺炎を起こしてあの世行きだったかもよ」

その方が良かったかしら。だとしたら手当てして損したわ、ベッドに寝かせるだけでも一苦労だったのよ」

その言葉に、佐々木は初めて自分がベッドの上にいる事に気がついた。

その上ずぶ濡れの服は脱がされて、見たことのない真新しいパジャマが着せられている。

両手の泥も綺麗におとされていて、その代わり広すぎるテーブルの上には

汚れたタオルが何枚も積まれていた。多分、彼女がやってくれたのだろう。

「……すいません」

その言葉に、頭の真横にペットボトルが落とされた。

「そう思うなら、飲みなさい。この上救急車まで呼ばされちゃたまったもんじゃないわ」

もう少し言いようがあるだろうと思いながら、佐々木は重い身体を引きずり起こした。

まだ目眩がするが、何とか起き上がって壁に寄りかかりペットボトルに口をつけると、

淡い甘味のついたスポーツドリンクが乾き切った喉を通過して、不快に火照った体に染み込んでいく。

一気に半分ほど飲み干すと、少しだけ身体が楽になった。

「昨日のこと、覚えてないの？」

「先生にに送ってもらったことだけは、かろうじて覚えているわ」
即答されて、佐々木は苦笑した。

と同時にほっとする。あんなことを覚えていられても厄介だ。

「喉は痛くない？ 咳は出るかしら？」

「いいや、頭痛がして息苦しいだけだよ」

「なら冷えと疲労から来る単なる風邪ね、暖かくして寝ていればなおるわ」

良かったわね、謹慎中で」

「休暇中だよ」

「同じようなものよ、口を開けて」

「はい？」

問い返した佐々木をミナは睨みつける。

「聴こえなかったの、口を開けなさい」

その言葉にこじ開けられたように半開きにあげた口の中にオレンジ色の塊が乗ったスプーンが突っ込まれた。

何？と尋ねる暇もなく、それは甘酸っぱい味を口の中に残してつるりと喉を滑り落ちる。

「オレンジと蜂蜜のゼリーよ。これならビタミンCも多いし」

喉を通るでしょう。吐き気はしない？」

佐々木が頷くと、ミナはさらに数回手の中の器からゼリーを彼に食べさせた。

「これだけ胃に入れば薬が飲めるでしょう。はい、解熱剤夜中には少し楽になるはずよ」

「ありがとう、夜中ってまだ……」

「今午後の四時よ」

そう言われてやっと佐々木は部屋の中が薄暗くなっている事に気づいた。

「これで、貸し借りはなしね。もう、朝からずっと恥ずかしかったのよ

貴方に送ってもらったことがね、熱を出していてくれて助かったわ」続けられたミナの言葉に、佐々木は苦笑する。

あまりと言えば、あまりに身勝手な物言いだが、これがいつもの彼女だ

昨日の姿より、なんだか安心する。

「昨日はどうしてあんなに早い時間に酔い潰れたの？」

その問いにミナは答えず、ぐると部屋を見渡して

銀のフォトスタンドに入っていた繭の写真を抜き取った。

「可愛いわね、この子が繭ちゃん？」

妹、じゃないわよね。恋人かしら」

「先生、その写真だけは触らないでほしいんだ」

その言葉に、なぜかミナはむっとしたようにことさら乱暴に写真を指に挟んで振りまわす。

「結構かわいいじゃない。どこで知り合ったの？まだ続いているの？彼女を日本において来て不安じゃないの？」

「先生、お願いだからそれを元に戻して。古い物だし

彼女と写っている唯一の物なんだ」

「へえ」

意地わるくにいつと笑って、ミナはフォトスタンドに写真を

乱暴に押し込んだ。フレームの中でぐしゃりと妻の笑顔が歪む。

「先生って振られた女の子の思い出を後生大事に持っているタイプなんだ。」

この携帯も、そしてこのペンダントもそう？」

ミナがジーンズのポケットから取り出した細い銀のチェーンがついた同じ色のリングに、佐々木はとっさに手を伸ばす。

だがそれは、彼の指先が触れる寸前にミナの手の中に消えた。

「そうなんだー。こんなの持っていて新しい恋の障害になるだけだぞ。」

ネットで見たけれど、日本の女の子って結構遊んでるんだって？
エンコウにフタマタ。この子もそうだったかもねえ」

「やめろ」

「いつまでも過去の思い出にすがってるなんて、
みつともないぞ。きつたない携帯」

白い指が古い携帯につけられたストラップの細い紐を
ことさら乱暴な動作でつまんだ。

そのまま二、三度振りまわすと大分弱っていたらしいそれは
プツリと切れて、携帯は嫌な音をたてて床の上に落ちた。

「あらごめん、液晶が割れちゃった。でもいいいわよね

過去の恋の遺物なんて、ガラクタだもの。ついでにこれも
捨てちゃおう。佐々木先生の新しい恋の為に！！」

そのまま拳を握ったミナの手が、窓の外に何かを投げ捨てるように
放物線を描いた時、佐々木の中で何かがはじけた。

ぱんつと乾いた音が暮れなずむ部屋に響く。

真っ赤になった頬を抑えたミナと、たったいま全力で彼女を平手打ちにした

自分の手を交互に見つめて佐々木は

「これ以上、繭を侮辱してみろ」

とぞっとするほど暗く静かな声で告げた。

「あんたを今すぐ窓から突き落とす」

「……な、なによ。こんなガラクタ」

その迫力に気押されたのか、ミナが少しおどおどしたように反論した瞬間、もう片方の頬に佐々木の手が叩きつけられた。たまらず床に崩れ落ちた彼女に一瞥もくれずに、佐々木は緩慢な動作で床に落ちた携帯を拾い上げる。

液晶に大きく罅が入っただけでなく、結合部分が半ば欠けてしまったそれは

佐々木の手の中で、真っ二つに割れた。

ぐらり、とひと際大きな目眩がする。

妻の声を届け続けた機械は、水につけてもその機能を失わなかったが、さすがに真っ二つになってはいくら奇跡だとしても声を繋ぐのは不可能だろう。

短い時間で交わしたのはあまりにもたわいの無い会話。

それでも、ずっと佐々木を支えてきた大切な、大切な言葉達。それをもう二度と聞くことは出来ない。

「……ああ」

喉の奥からうめき声が漏れる。

これ以上絶望することはないと思っていたのに。

「さ、佐々木先生」

おずおずとミナが伸ばした手は、酷い傷痕の残る子供のように小さい手に

邪険に振り払われた。

「触るな、出ていけ。俺があんたをもう一度殴らないうちに」

「わ、私は唯」

「聴こえなかったのか、出ていけ!!」

怒鳴り声に弾かれたように、ミナがかけ出す。

玄関の重い鉄扉が閉まる音を聞いて、やっと佐々木はくしゃくしゃになってしまった写真を丁寧に元通りにフォトスタンドに入れなおし、

携帯をそっとハンドタオルに包んだ。

そしてパジャマ姿のまま、悪寒と目眩に耐えながら階段を下りる。
投げ捨てられたペンダント。あれだけは拾わなければ。

佐々木の部屋の窓の下は、車が途切れることなくいきかう大通り。

そこに躊躇なくつつこもうとして、誰かに強く羽交い絞めにされた。

「何やってる、ブラックジャック」

「放せ、放してくれ。王」

叫びながら佐々木は身をよじる。

「繭が、繭があそこにいる。早く拾わないと。

繭！！繭！！」

「おい、大丈夫か。佐々木、佐々木兵衛！！」

「放せ、放せよ馬鹿野郎」

容赦なく爪をつきたて、血を流させても

王の自分を拘束する力は緩まない。

ならば噛みつこうと口を開けた瞬間、

「悪い、乱暴するが許せ」

囁き声と共に、みぞおちに鈍い痛みがはしり

全てが闇の中にのまれていった。

続く

第十二話 困惑

控えめなノックの音に、ベッドに横になった佐々木はぼんやりと天井を見つめていた視線をドアに向ける。

「どうぞ」

「よう、目が覚めていたのか。気分はどうだ」

そう言って枕元の椅子に腰を下ろした同僚を佐々木はやはりどこか霞がかかったような眼差しで見つめた。

「王……ここは、どこ？」

「うん、俺の事がわかるのか。よかった、少しは病状が良くなったみたいだな。」

俺の家のゲストルーム。入院させようか、とも思っただけだそうすると

お前の立場があまり良くなるだろう」

「入院って……風邪ぐらいで大げさな」

佐々木の答えに、王は苦笑して肩をすくめる。

「そうだな、でも高熱が出ているにもかかわらず、パジャマ姿のままで歩こうとする人間は別だよ」

「……え？」

「ここ数日何をやっていたか記憶はあるのか」

「数日って、今日は×月×日だろう」

王は首を振った。

「その、二日後だ」

「……なんだって……!」

慌てて起き上がった瞬間、さっと血の気が引く感覚がして目の前が暗くなる。

「ああ、急に起き上がるから。大丈夫か、頭を少し下げてそうそう、まだ熱も下がり切っていないんだ。無理するな」

「夢を、見ていた」

布団を見つめて佐々木は呟く。

故郷の街の駅の改札口。人ごみの中父親に抱きかかえるように連れて行かれる妻。それを追いかけようとすると、周りの人間が一斉に自分の体を取り押さえる。それを必死に振りほどこうともがいているうちに

妻の姿は消えてしまう。

「そうか、辛い夢だな」

そう言って佐々木の肩を優しくたたいた王の手には、無数のひっかき傷と

何かが噛みついたような青あざが複数あった。

「まさか、これは俺がやったのか」

青ざめる佐々木に、王は少し躊躇した後頷いた。

「ブラックジャックが早退した夜に何度電話をかけても繋がらないから、

当直が終わった後様子を見に来たんだ。そうしたらパジャマ姿のままで

車道に飛び出そうとしていたんだよ。慌てて押さえつけても、興奮して

何か日本語で叫んだ。マユ、だけ聞き取れたけどな。奥さんの名前か？」

小さく佐々木は頷く、夢の中の出来事だと思っていた自分を押し押さえていた人の手は王の物、だったらしい。

「酷い錯乱状態だったんだな。何を使った？」

尋ねる佐々木の右手には、針の後が幾つもあった。

「中程度の鎮静剤と向精神薬だ。それでも何度か目を覚まして出ていこうとしたから

ここに連れてきた。悪かったな、勝手な事をして」

「いいや、謝るのはこっちの方だ。入院の事まで気をまわしてもらって

ありがとう」

「いや、前に日本から留学してきた医者がやっぱり精神を病んで入院したら、あつという間に強制帰国させられたからさ。志半ばで帰りたくないだろう。ブラックジャックは」

「……ああ」

頷きながらも、再びじんわりとした絶望感が胸の中に沸き起こる。

フラッシュバックに過呼吸発作、拳句の果てに錯乱状態にまで

陥った人間が、このまま精神科医を続けていけるとはとても思えなかった。

「そんな顔するなよ。生きていれば調子が悪くなる時くらいはあるさ」

「程度つてものがあるだろう。本当にすまなかったな

俺なんかの為に色々尽くしてくれて」

「……ミナが、何をした？」

「なんで、それを」

驚く佐々木の手の平に、王はポケットから取り出したモノをそっと乗せた。銀のチェーンがついた。同じ色のリング。

「これは」

ミナが窓の外から投げ捨てたはずのペンダント。

「渡すのが遅くなってすまん、千切れたチェーンと同じような物が中々なくて、探し回っていたんだ。そしてこれは」

ともう一方のポケットから取り出したモノは、

妻の声を届け続けた古い携帯電話だ。

「何とか治せないかメーカーに問い合わせたんだが、

機種が古すぎて部品が残っていないかった。

何とか形だけは整えてみたんだが……」

手渡された携帯電話は、液晶と操作部分との結合部分に

幾重にもビニルテープが巻かれていた。

白いそれが、どこか包帯を連想させる。

両手に乗せられた、二つの品に心に満ちていた絶望感が徐々に薄らいでいく。もう、二度と手にできないと思っていた。

「……よかった……」

ペンダントと携帯を抱きしめて、佐々木は嗚咽交じりに呟く。
うれしくとも、涙が出るのだと初めて実感できた。

「すまない」

「え？」

唐突に謝罪の言葉を叫ぶような勢いで口にした王に
佐々木は面食らった。

「ブラックジャックをここまで追い詰めたのは
俺のせいだ」

「な、何を言っているんだ、王」

携帯電話を壊し、ペンダントを投げ捨てたのは
ミナだ。いくら親しいとはいえ、王が謝るのは
筋違いも甚だしい、だが、王はひたすら
すまないと繰り返すばかりだ。

「頼む、王頼むから、俺にわかるように説明してくれ」

「今は……無理だ」

苦悩に満ちた表情で首を振る同僚の姿に
佐々木はますます訳が分からなくなる。

「なんでだよ」

「まずは身体を治してくれ、佐々木」

「……」

「たっぷり寝て、食べて。熱が下がったら必ず
全部話すから」

「わかった、約束だ」

そう言った佐々木の手をしっかりと握って
王は頷いた。

続く

第十三話 対話

佐々木先生、体調はもうだいじょうぶなんですか？」

「ゆっくり休めましたか？　また頑張ってくださいね」

医局に入った時から次々と掛けられる看護師や心理士たちの短いが暖かい言葉に、佐々木は休んでいる間にたまりにたまった書類やカルテを片付けながら、安堵のため息をついた。

身体がこわばるほど張り詰めていた気持ちがふうつと緩んでいく。

患者の目の前で過呼吸発作を起こして倒れた上に、院長に

五日間もの休養を命じられた。通常の時でも、人手が十分だとはお世辞にも言えない職場である。

たった一人とはいえ、予定外の職場離脱が他のスタッフに与えた負担を

思うと、嫌味の一つや二つ、言われる事を十分に覚悟して出勤したのだが

どうやら杞憂だったようだ。だが、

――ハーカー先生は、どうしたんだろう――

なぜか自分を目の敵にしている女医の姿がまだ見えない。

昨日の夕方、四日ぶりに自分のアパートに帰り広すぎる机の上に置かれた

汚れたタオルと食べかけのゼリーを見て、佐々木は複雑な気持ちになった。

ミナの行為は許せることではないが、

彼女が自分を看病してくれた事もまた事実なのだ。

しかも佐々木は彼女を二度も、しかも全力で殴っている。

第三者から見れば非があるのは自分の方。

ミナもきつと新しい攻撃材料ができたとばかりに

今まで以上に突っかかって来るだろうと思っていたのに。

「そういえば、ハーカー先生は？　姿が見えないけれど」

昼近くになって、ついに側にいた心理士に尋ねてみたところ

「風邪で二日前から休んでいますよ。内科のスタッフ達がほっとしているのは

そのせいです」

とため息交じりにかえされた。どうやら、うつしてしまったらしい。だがほっとしているとはどういう事だろう。

精神科に比べて内科はより少人数で余裕のない

ローテーションを組んでいるはずなのに。

佐々木の表情で言いたい事を察したのか、心理士が僅かに苦笑しながら

「ほら、ハーカー先生って性格がきついじゃないですか。佐々木先生だって

大分やられているから判るでしょう。

本人がなまじ優秀な分周りの失敗に容赦がなくて

ハーカー先生と組むスタッフは毎回何時怒鳴りつけられるかと、びくびくしているんですよ」

と教えてくれた。

「そういえば、先生は今日は外来の診察は？」

「院長から止められている。当分限られた入院患者さんの診察と、カルテの整理くらいしかできないよ」

「そうですか、早く良くなるといいですね」

「ありがとう」

片手を上げて部屋を出て行った心理士を見送って、佐々木はたまってしまった書類の整理を再開する。

ミナ的態度を見ていれば、内科のスタッフたちの態度は深くうなずけるものだが、

休んだ事を喜ばれるのは酷く寂しいことだな、と思う。

そういえば、ミナが王以外と病院内で親しく話をしていたり、ランチをとっていたりする姿を見た事がなかった。

彼女は親しい同性の友人もいないのだろうか。

「よう、ブラックジャック。無事に出勤できたみたいだな、よかった」

「王、その、今回はいろいろありがとう。すっかり迷惑かけてしまつて」

佐々木の言葉に、外来診察から戻ってきた王は、
気にするなと笑つて隣に腰を下ろす。

「病人を助けるのは医師の義務だろ。それに、母さんが喜んでた。自分の水餃子をここまで褒めてくれた人は久しぶりだつて」

「いや、あれはお世辞抜きで本当においしかった」

日本の出身なら、これが口に合うかしら。喉越しもおいしい栄養もあるから

風邪の時にはもつてこいよ。

王とよく似た顔立ちの、どっしりと大地に根を下ろした

樹木のような印象の彼の母親が作ってくれた水餃子は、

この国で食べたどんな料理よりもおいしかった。

「ほら、うちは父親と兄達が料理人だからさ、めったに他人の料理は褒めないんだ」

「王があ有名なチェーンレストラン、キングチャイニーズのオーナーの孫

だったなんて。教えてくれてもよかったのに」

「レストランをやっているのは祖父と親父たちで、俺は一介の勤務医だよ。」

自慢することでもない」

「でも、御曹司じゃないか」

「チャーハン一つ満足に作れない落ちこぼれだって、一族じゃお荷物扱いされてるんだぜ」

何処かわざとらしく続けられる辺り障りのない会話。

お互い話したい事があるはずなのに、切りだすことをためらっている。

「……そういえば、ハーカー先生風邪で休んでるんだつて」

ついに佐々木が、一步踏み込んだ。

書類を記入していた王の手が止まる。

「今日、勤務は何時までだ？」

「特に何もなければ、19時には終わる」

「じゃあその後、カウンセリングルームに行こう。

医局で出来る話じゃないからな」

「判った」

頷いた佐々木に、王もまた頷き返す。

その表情を何処かで見た事があるなとおもったが、

それがいつ、どこで見たものなのか

時計の針が19時を指しても、佐々木は思い出す事が出来なかった。

※

「さて、まずはブラックジャックの話から聞かせてもらおうかな」

「俺から？」

王の話の聞き手に徹するつもりだった佐々木は、面食らった。

午後19時30分。二人が向かい合って腰を下ろしたのは、

病院で一番小さなカウンセリングルーム。

広さは6畳間ほどだが圧迫感を与えないように天井は高く、

壁紙や椅子は目に優しいベージュで統一されている。

「治したいんだろう、フラッシュバックと過呼吸を引き起こすパニック障害」

「そりゃあそうだけど、処方された薬はきちんと飲んでいるよ」

「それは当たり前だ、でも+αが必要だとは思わないか。精神科医としてさ」

「……」

佐々木は沈黙した。確かに自分の症例は特殊だ。十年もたってなぜ今妻の死を

思い出してパニック発作を起こす？

「ひょっとして、院長のご指示か？」

「あたり、実は結構多いんだ。勤めているうちに精神の具合が悪くなる職員は。」

院長はそのあたりも気を配って下さる、と言うわけだ」

「なるほどね」

今朝のスタッフの優しさの理由が何となく理解できた。

自分が佐々木と同じようになるかもしれないという思いを、皆が抱いているのだろう。

「で、王が俺のカウンセリングをやってくれるのか？」

「同僚に治療されるなんて変な気分だろうが、我慢しろよ。守秘義務は守るから」

「当たり前だ、……それで、君の話は？」

「お前の話が終わってからだ」

どうやら、よほど話しにくいものらしい。

一体王は何を知っていると言うのだろう。

「そんな顔するなよ、約束は守るから。俺としてはまず不安階層表を作りたいんだが」

精神科医としてブラックジャックはどう思う？」

「異存は無い。俺が治療する側でも同じ方法を取る」

不安階層表とは、パニック障害の原因となった原因が判っている場合、

その出来事を細分化し、何が一番怖いのか、順位付けを行うことを言う。

たとえば、犬にかまれたことが原因で犬が怖くてたまらなくなった人間がいるとしたら

犬を見る、犬のそばを通る、犬に触れる。と行動を細かく分け怖さの順位付けをするのだ。

そうすることで、自分が一番恐怖を感じる出来事を特定、認知することが出来る。

「じゃあ、言いにくいだろうがブラックジャックのパニック発作の

原因を

話してくれ、気分が悪くなったら、止めてくれてかまわない。」

「大丈夫だ。」

一つ頷いて、佐々木は単調に時を刻み続ける時計の音をBGMに妻の事を語る。出会いから、お互いの秘密の告白、それを知って尚お互い惹かれあったこと。たわいもないデートを重ね、クリスマスを楽しみにしていた事、そして、

「……俺は繭の握っていた袋を開けたんだ。

そこには「ごめんなさい」と書かれたメモ……っぐ」

そこまで語った時、胃をねじり上げられるような吐き気が襲ってきた。

「大丈夫か？」

立ち上がりかけた王とかわうじて手で制して、洗面所へと走る。

手洗いに手をついたとたん、胃の中身が陶器の器の中に一気にぶちまけられた。

「……なんで、こんなことが」

薬はきちんと飲んでいるはずなのに。

何度も嘔吐し、ふらつきながら部屋に戻ると王がテーブルに肘をついて、

顔を手で覆っていた。

「王？」

「ああ、すまん、大丈夫か」

「ああ。何だか身体症状がひどくなっているような気がする。

情けないな。十年も前の事なのに」

「無理をするな、風邪だってまだ治ったばかりだろう」

そう言いながら、王は何度も手で顔をぬぐう。

ようやく手を離れた時、佐々木はその目が真っ赤になっている事に気づいた。

泣いていた……まさか。

「今日はここまでにしよう、余り体に負担をかけてもよくない」

そうやって王はカルテを挟んだバインダーを閉じた。

「さて、俺の方だったよな」

と言いながらも、王は中々その先を続けようとしなない。

コチコチと単調に時を刻む時計の針の音だけが部屋に響いている。

「王、ちよつと一服しないか」

そうやって佐々木が立ちあがり、部屋の隅に置いてあったポットとミネラルウォーターのボトルをとった。

この病院では患者にリラックスしてもらうために、どのカウンセリングルームでも温かい飲み物が飲めるような用意がされている。

「いいけど、コーヒーはやめておいた方がいいぞ」

カフェインは、パニック発作を誘発させる原因の一つである。

「判っている、だからこれを部屋から持ってきたんだ」

佐々木が白衣のポケットから取り出したのは、緑茶のティーバック。

「ジャパニーズグリーンティー。空港で買った物だけど最近のティーバックは中々捨てたもんじゃないぜ」

しばらくすると、電気ポットがシュンシュンと湯気を吹きあげ出す。白いマグカップの中にティーバックを入れ、湯を注ぐとそれは綺麗な緑色になった。

「いい香りだな、ロンジン茶に近いものかもしれない」

そうやって、王はカップの中身を啜る。

「君が話したくなるまで待つよ」

穏やかな佐々木の言葉に、王は昼間と同じ表情をして頷き、しばらくして

意を決したように、やはり白衣のポケットから一枚の古ぼけた紙をとりだす。

「これを、覚えているか」

手渡された紙はどうやら新聞の切り抜きの様だ。かなり古いものらしく

端の方が黄ばんでいる。そして、縦書きの、見た端から理解できる

この文字は

「日本語、だよな、これ」

王は頷いた。

「その写真、ブラックジャックだろう」

指差されたそれは、酷く不鮮明で粒子の粗い写真だったが
パジャマを着て顔に包帯を巻いた子供だと言う事がわかる。

そして、その隅に小さく「坪内総合病院にて撮影、A君」とあった。

その病院は、確かに佐々木が怪我をした時入院していた病院。

だが、こんな写真を取られた覚えは記憶のどこをかき回しても
でてこなかった。

続く

第十四話 過去Ⅰ

もうとつくの昔に役目を終えた年号が記されている古い新聞の記事は、

親の犠牲になる子供達という連載の一部らしかった。

「宗教に嵌り、家庭を顧みずついに全財産を寄付した妻に、疲れ果てた夫が

無理心中を企て、子供だけが生き残った」

事件のあらましが最低限述べられた後、「命を取り留めたA君の話」として

「僕はお父さんもお母さんも恨んでいません、一生懸命勉強して二人の分まで頑張って生きていこうと思います」という作偽的な一文が続けられていた。

「時期と事件の内容から、A君は俺だと思うが」

困惑した表情で、佐々木は読み終えた記事をテーブルの上に置く。

「インタビューを受けた記憶も、記事を読んだ記憶もない」

「そうか」

「王は、これをどこで手に入れたんだ？」

その問いに、王は微かに顔をゆがませる。

「……ミナに、もらったんだ」

「ハーカー先生に？ 論文でも書く時の資料にでもしたのか？」

「いいや。ブラックジャックはミナの名前と人種の違いを

おかしいと思ったことはないか？」

唐突な問われて、佐々木は首をかしげる。

「それは……、アメリカは人種のるつぼだから特には。

君の従兄弟だからアジア系なのは当たり前だと思っていたよ」

「俺の国籍はアメリカだが、名前は中国式だろう。正直使いにくくてしょうがないんだが、華僑の祖父さんがうるさくてな。

国籍は違っても、名前は祖先の血の出自を示せて」

「ミナと君は、血が繋がっていないのか？」

「御名答。察しがよくて助かるよ。」

ミナは、もともと日本人なんだ。生後一カ月で渡米して俺の叔母、母の妹の養女になった」

「国際養子縁組、か」

日本では、色々な事情から生まれてすぐに養育を放棄された子供達
は、

乳児院で育てられ、里親の下に引き取られていく事が多いが、
中には専門の組織が仲介となって海を渡る子供達もいる。

あまり知られていないことだが海外では、日本人を養子にと望む声
は高いらしい。

「叔母さんはミナをととても可愛がっていたし、ミナも自分が養女だ
と言う事を

8歳になるまで知らなかった。俺とミナが初めて会ったのもその頃
だ」

「なにが、あったんだ」

佐々木の問いに、王は遠いところでも見るように僅かに目を細めた。

「あまり気持ちのいい話じゃないぞ」

「いまさら言うなよ、ここで止められた方が気持ちが悪い」

「……そうだな、俺の一族は華僑で、知っていると思うが同族の結
びつきが強い。」

アメリカに住みついて五〇年以上がたって、俺達三世がほぼアメリ
カ国籍を

取得していると言うのに、色々と、特に結婚となるとやかましくて
ね。

俺の母親は故国の同じコミュニティ出身の父親と結婚したんだが、
叔母はそんな風習を嫌って、ある白人男性と結婚したんだ」

「アメリカでもそんな事があるのか」

日本よりずっと血族関係はドライだと思っていた。

「まあ、俺の一族は特殊な部類だとは思うがな。もちろん俺達の祖

父や祖母も

そして相手方の両親も大反対だった、らしいぜ」
しかし、障害が多ければ多いほど燃え上がるのが恋心と言う物である。

「結局二人は反対を押し切って結婚した。でも、失ったものも随分多かったらしい。そして、何時までも燃え上がった恋心のまま、ではいけないだろう」

「そうだな」

ドラマチックな恋愛であるほど、その熱が静まり現実が見えた時の失望は大きい。

「加えて二人には子供が出来なくて、それが二人の間の溝を深めたらしい。叔母は壊れ始めた夫婦のきずなを取り戻そうとしてミナを養女に迎えたんだ」

その言葉に、佐々木はうすら寒いものが背筋を這い上って行くのを感じた。

「余り褒められた話じゃないな、子供は魔法の道具じゃないんだから」

「そうだろう。俺は子供の事は原因の一つでしかないと思うんだ。結局叔母たちはミナが八歳の時に離婚したからな。そして、叔母はふらりとミナの手を引いて母の元にやってきた」

高いお金を出してこの子を娘にしたのに、私の家庭は壊れてしまった。

もう、この子の母親でいる必要はない。

「それを娘の前で言ったのか、君の叔母さんは」

「ああ」

苦い薬を飲んだような表情で、王は頷く。

「俺は廊下からその様子を見ていたんだが、昨日の事みたいにその光景は思い出せるよ」

一方的に自分を憐れみつつける母親と、その手を握り、何の表情もなく

母の言葉を聞き続ける少女。

「元々叔母は、お嬢様と言うか、自己中心的な部分があったらしいし、

その時は精神状態も普通じゃなかったんだろう。家の前にも裸足で立っていたくらいだからな。というわけで、ミナは最悪な状況で自分の出自を知ったんだ」

幼い子供にとって、それは世界の崩壊にも等しい出来事だったに違いない。

「母は叔母と性格が真逆の人だから、すぐにミナを自分の所で引き取る

事に決めたらしい。その日から俺とミナは一緒に暮らしはじめた」

「この間少し世話になったんだけど、君のお母さんらしいな」

佐々木の脳裏に、どっしりと大地に根を下ろした大木のような印象の王の母の姿が浮かぶ。いきなり家に転がり込んできた子供の同僚にすぎない

自分にも、随分と親身に世話を焼いてくれた。本来養子とはそのような

人たちが迎えるべきなのだ。

「母は男の子しか授からなかったから、女の子が嬉しかったんだろ
うな。

ミナの事をずいぶんかわいがって、そのお陰で彼女は
徐々に元気になっていったんだ」

「いい話じゃないか」

「そのまま行けば、な。言っただろう、俺の一族は血縁に関しては
保守的だって。

しかもある程度財産があるから、よけいややこしくてな」

旧正月に当たる春節祭などの行事や、一族の祝い事などでミナは部
外者として

あからさまな差別を受けた。

「両親はずいぶんそれに対しては心を碎いていたんだが、子供って

そういうことに妙に敏感だろう。加えてミナは昔から頭が良かったし自分の立場を嫌と言うほど自覚したんだろうな」

「私は糸の切れた風船みたい。風が吹くままに飛ばされてどこにも降りられない」

あの頃のミナの口癖だ、と王は続けた。

「それは、辛かっただろうな。ハーカー先生が妙に周りに攻撃的なのはそのせいだったのか」

「いや」

首を振った王に、佐々木は違うのか、と続ける。

「話を最後まで聞いてくれ。でもその頃のミナは

まだ幸せだったと思う。一族の石頭連中とはともかく

両親は彼女と俺たち兄弟を分け隔てなく接していたし」

「君も、ミナを大事にしたんだろう」

その言葉に王は僅かに顔を赤らめた。

「あの年頃の、年中泥まみれになっているガキにしてみればミナはおとぎ話のお姫様に見えたからなあ。守ってやらなきゃと思っただよ。だけど」

「だけど？」

「一年くらいしたころかな、また突然叔母が家にやってきたんだ。再婚したから、ミナを迎えに来た。新しい夫が娘を欲しがっている」と

「おいおい、それは勝手すぎるだろう」

「だろう。母は激怒したよ、ミナはもう自分の娘だって。

だけど、ミナはそんな母に言っただ」

「私、お母さんの所に帰ります」と。

「どうして、実の母親じゃないんだろう。」

君の家で愛されていたんだろう」

「ああ、ミナが叔母の元に帰った理由

それがこの新聞記事なんだ」

王の手が、再び古びた紙をつまみ上げた。

続く

第十五話 過去Ⅰ2

「ミナは自分の出自をこっそり調べていたらしいんだ」
そして、どういう手段を使ったかは判らないが、自分が
日本で生まれた事をつきとめた、らしい。

「俺の父親が仕事がらみで時々日本に出かけて、
ちよっとしたものを持ち帰るんだが、この記事が載っていた
新聞もその一つだったんだよ。親父は深く考えずに
ねだられるまま、ミナにこの記事を読んで聞かせたらしい」
日本ではね、親に殺されちゃう子もいるんだって。
養母の元に帰ると言った夜、ミナは訳を尋ねる王に
新聞記事を見せながら言った。

「私の本当のお母さんも、生まれたばかりの私を
よその家にあげちゃうくらいだから、私の事を
嫌いだったと思うの。一緒にいたら殺されちゃったかもしれないわ。
そんな私をママは引き取って救ってくれたのよ」

「……悲しすぎる、話だ」

「多分、ミナはそう思いこむ事で辛すぎる現実から
目を背けた買ったんじゃないかと、今にしてみれば思うんだ」
佐々木の脳裏に一人の少女の姿が浮かび上がる。

アーモンド形の瞳が印象的な勝気な女医の面影残すその少女は、
子供らしくない暗い雰囲気を全身にまとい、
泣き笑いのような表情を浮かべていた。

それは、出逢った頃のばかりの妻とよく似ている、
と佐々木は思った。

「ミナは続けたよ、A君は両親に殺されかけても親を許したの。
だから、私もママを許してあげようと思う。できるよ、
同じ国で生まれたんだもの。」

それに、ママは私をこの家に置いていっただけ。

A君よりの親よりはずつとましよ」

子供の頃の話なのに、王はまるで昨日の出来事であるかのようにミナの言葉を詳細に語る。

「どっちがましだというレベルじゃないだろう。

親に捨てられるか、殺されるかなんて。これは両方『罪』なんだぜ」

「ああ、でもあの時のミナには佐々木に比べれば自分はましだと思ひ込む事で、大分救われた部分もあったと思う。新聞記事を

大切そうに持って叔母と一緒に家を出ていったよ」

佐々木は大きくため息をつく。と乱暴に自分の髪をかきあげる。

受けた覚えもないインタビュー、しかし確かに自分の事が

書かれた記事が、遠い異国で暮らす一人の少女の運命を

大きく「悪い」方へとかえてしまった。

偶然と思ひこみがもたらした結果とはいえ

肌の裏側をひっかき続けられるような、居心地の悪い罪悪感を覚えた。

「ああ、そんな顔するなよ。お前のせいじゃないって言うのは判っているから。

全てはミナの、糸の切れた風船のようだと自分を例えた

寂しい女の子の思ひこみに過ぎない

再婚した叔母は、なぜか別れた夫が住むすぐ近くに

新居を構えた。インテリア雑誌の表紙を飾れそうな綺麗な外観の家だった」

その中でミナは、学業やスポーツの成績は優秀で、

ボランティアやクラブ活動にも率先して取り組む、

誰もがうらやむような理想の娘として育っていった。

「離れて暮らすようになった、と言っても同じ町の中だったから叔母さんはしょっちゅうミナを連れて家に遊びに来ていたんだ、でも」

綺麗に着飾った叔母の口からあふれ出る言葉は、夫と娘への愚痴ばかりだった。

「叔母の二度目の夫はやはり白人で、経済力はあったけれど、気が弱くて

容姿も前の夫より大分劣っていたみたいだ。でも、そんな事は承知で叔母は結婚したはずなのに」

聞いている方が呆れるくらい、些細なことまで夫の非を責め続ける。「それはミナに対しても同じで、試験でトップを取れなかったとか、スポーツの試合で思ったほど活躍できなかったとか、そんな些細なことまで

徹底的に責め続けるんだ」

そして、やはり綺麗に着飾ったミナは母親の隣でずっとそれを聞いている。

「義父の時には黙って、自分が責められている時はごめんなさいとずっと小声で呟きながら」

そして、自分の愚痴を全て吐き出し終わると、ミナの養母は彼女を抱きしめて

「いいのよ、次からは頑張りなさい」と告げて、すっきりした顔で帰って行く。

「ミナと手を繋いで、な」

「なんて、歪な関係だ」

自分では呟いたはずなのに、その声は部屋中に響き渡った。

「佐々木の言うとおりでだよ。叔母は夫も、

娘も別れた夫に自分の幸福さを見せつける為の道具でしかなかった。

「あなたと別れた私は今、こんなに幸せよ」と言うわけだ。

でも、人はモノじゃないから自分の思った通りになりっこない。

叔母の描く幸福な家庭がどんなものかは判らないけれど、

夫とミナがいくら努力しても絶対実現できないほどの

高レベルな物であったことは確かだよ」

理想と現実のギャップの苛立ちが愚痴になり、

それを他者に聞かせる事で娘への罰とする。

罰を与えられた娘は、母の理想に自分の姿が重なるように、背伸びに背伸びを重ねる。

「ミナは一度家庭崩壊を経験しているから、どんなにいびつな物であっても

それを全力で守ろうとしたんだろうな」

ねえ、私、いい子になるよ。

わがままも言わない。勉強もがんばる。

だから、だから、世界を壊さないで。二度と私を捨てないで。お母さん。

「ハーカー先生は典型的な機能不全家族で育った
アダルトチルドレンだったんだな」

王は頷く。

「俺の母親も、何とか手を打ちたかったみたいなんだけど、当の本人が母親と

いる事を望んだからな。どうする事も出来なかった」

ハイスクールに入学するころには、

ミナはほぼ叔母が理想とするような完璧な娘になった。

「そうすると今度は、皆の前で叔母は気持ち悪いほどミナをほめちぎって、

彼女はそれを本当にうれしそうな顔で聞いているんだ」

「親の理想そのままに自分を歪めた子供と、

それを自慢する事で自分のプライドを満足させる母親、か」
傍目から見れば立派に成功した子育て。

しかし、子供の中には言葉にできない不満や

うっ屈がはち切れんばかりにたまっているだろう。

「ミナは新聞の切り抜きの中のお前を見習おうとする事で、
自分の中の不満やうっ屈を押し殺そうとしていたみたいだ。

あいつ、紙が劣化する前に何十枚とコピーをとって

お守り代わりに持ち歩いていたから」

佐々木の脳裏に、また一人の少女の姿が浮かぶ。

妻と同じ位の年齢になった少女は

古い新聞記事を握り締め、一人ベッドの中で

「大丈夫、A君よりも私はまし。A君が出来たんだから私もできる」と呟き続けていた。

「それでも、ストレスは並じゃなかったんだろう。

何か問題行動は起こさなかったのかハーカー先生は」

「起こしたさ」

組んだ両手に唇を当てて、王は苦く呟く。

「ブラックジャックも被害にあっている暴言が、それだ。10代後半の頃からミナは

親しい友人に暴言を吐いて関係をぶち壊すようなことを繰り返してきた。

叔母と同じように、相手のほんの些細な欠点が許せなくなるらしいんだ。

ある一定の距離を置いて付き合えば、礼儀正しい理想的な人間だからそのギャップについていけなくて、いつの間にかミナの周りには親しい人間が

誰もいなくなってしまった」

余りにも大きくそして悲しい、母親の理想の娘になれた代償。

「ブラックジャック、お前だけだ。ミナの暴言を黙って聞き続けた人間は」

「いや、それは俺も悪いところがあつたからで……って、なぜ俺に暴言の矛先が向かう

俺とハーカー先生は病院の同僚以外の関係はなかったぞ」

「忘れたのか、これの事を」

王はとんとんと、テーブルの上の古い新聞記事を叩く。

「ブラックジャックはここに来たところから、

自分の過去を特に隠す事はなかっただろう。

新聞の日付とお前の年齢から考えて、

ミナはすぐにA君がブラックジャックだと気付いたはずだ。

さっきも話した通り、ミナはこの新聞記事を、もっと言ってしまえばA君を心のよりどころにしていた。

ミナの中でお前は見習わなければいけない師であり、同じような辛い思い出を抱えた

同士であり、叔母の高すぎる理想にくじけそうになる

自分を支えてくれた恋人だったはずだ」

沈黙が落ちた。

さすがに喋り疲れたらしい王が、冷めきった緑茶をすする。

空になったマグカップに新しいティーバックとお湯を入れて、そして佐々木は呟いた。

「だとしたら、俺がとってきた行動は最悪だ」

続く

第十六話 謝罪

「ハーカー先生の暴言は構造的にはDVと変わらない。ドメスティックバイオレンス

相手が恋人や配偶者より結びつきが弱い友人だったから、問題が大きくならなかったただけだろう」

「ああ」

DVはそれに耐え、受容してしまう人間がいる事でエスカレートする傾向がある。

「俺は自覚しないままバタードウーマンの役割を果たしてしまった。王、精神科医ならハーカー先生の暴言が普通じゃない事も、その原因も察しがついていただろう。」

彼女は多分、母親に向けたはずの怒りや悲しみを、自分を受け入れてくれた友人たちにぶつけている。

甘えの歪み切った発露じゃないか。

内科のスタッフが彼女が休むとほっとすると言っていた。

多分ハーカー先生はもう暴言のブレーキが壊れかかっているんだ。早くしかるべき治療を受けさせないと、取り返しのつかないことになるぞ」

「判っているさ」

王が声を荒げる。乾いた音をたてて、彼の手の下で古い新聞記事が真っ二つに裂けた。

「俺だってミナを救いたい。だけど彼女は病気じゃない。」

叔母の理想の娘」という型に

自分を無理やりはめ込んだ結果の歪みが、「暴言」として吹きだしている。

叔母そっくりだよ。勝手に自分の理想をつくりあげてそれに少しでもはずれると

容赦なく責め続ける。

そんな症例の治療の第一歩が何だかブラックジャックも知っているだろう」

「本人の自覚、か」

「そうだ、自分の性格の歪みとその原因を自覚しなければ、どんな治療も効果がない。」

俺は友人に去られて落ち込むミナに何度も話したよ、本も渡した。無理やり自助グループの集会に引っ張って行った事もある。

でも駄目なんだ。あれだけ頭が良くて、聡明なのに、自分と母親の歪んだ関係だけは、認めようとしない」

「そうか、いろいろ努力していたんだ……ごめん
一方的に攻め立てて」

「何で、謝る」

泣き笑いのような奇妙な表情で、王は言った。

「俺はお前に対しても酷い事をしたんだぜ」

「酷い事って、何を？」

きょとんとした佐々木に、王はふっと小さくため息をつく。

「ミナの暴言を黙って聞きいているお前に、何も言わなかっただろう」

「そうだ、どうして教えてくれなかった。バタードウーマンの存在が暴言をエスカレートさせるのに。ハーカー先生が気の毒だ。俺がもう少し察しが良ければ自分で気づいたんだけど。すまない」その言葉に、王は参ったと言う風に小さく首を振った。

「どこまで人がいいんだ、ブラックジャックは。俺は

恋敵が苦しむさまを心中で笑いながら傍で見ていた酷い奴だぜ」

「……は？」

コイガタキという単語を佐々木が理解するまで数瞬を必要とした。

「恋敵ってなんだよ、恋敵って、さっきも言っただろう。」

俺はハーカー先生と同僚以上の関係は……」

そこまで言って佐々木は先日夜の事を思い出し

カッと身体が熱くなった。ミナが泥酔していたとはいえキスされたなどとは、いえない。

「判っている、判っているさ」

ぐしゃぐしゃと髪をかきまわしながら、絞り出すように

王は同じ言葉を繰り返した。

「全ては俺一人の身勝手な嫉妬だ。だがな、俺は、ずっとミナを傍で見してきた俺は、たった一回も暴言を吐かれた事がない」

「……それは、君がミナの理想の男性だからじゃないのか」

背が高くハンサムで、しかも佐々木がアメリカに來た当初彼はレジデント達を纏めるチーフの地位にあった。誰にでも優しくして患者からも同僚からも慕われる、理想的な医者。それは佐々木から見た

王陰月の姿だった。

「ちがうさ」

ポツリと王は呟く。

「ミナの理想は、たった一人の女性を生涯愛しつづける男性だ。

正反対だろう、俺は」

「ま、まあな」

唇の端に苦笑のかけらを浮かべて佐々木は頷いた。

当然のように王は女性に人気があった。

深い関係になる恋人が途切れた事はない

だが、どの女性とも長く続く事もなかった。

「ミナが本当に俺に心を許していたら、とっくの昔に暴言の集中砲火を

受けていた。でもそれをとっかかりに治療を始める事も出来た。

でも、彼女は俺がいくら奔放な女性遍歴を続けても、軽く苦笑して

『今に酷い目にあうわよ』と言うだけだった」

「そうか」

「俺はミナが子供のころからずっとそばにいた。

夜中に寂しがって泣く彼女と抱き合って眠った事もあるし、叔母の考える理想の娘になれないと悩む彼女を慰めて、励ました。

ボーダーラインを彷徨う彼女に一生付き合ってやろうと精神科医にもなった。それなのにミナは」

言いながら、王は二つになった新聞記事をさらに

幾つもの紙片に破り続ける。

「4年前日本からやってきたブラックジャックに、いやたった一枚の新聞記事よりも、俺に心を開いてくれなかった」口に苦い笑みを浮かべながら、王の眦には涙が滲んでいる。

「暴言を吐かれる、いや、どんなに歪んだ形であってもミナが甘える事の出来るお前が、心底うらやましくて嫉妬で気が狂いそうだった」

沈黙が落ちた。時計の針が時を刻み続ける単調な音色だけが再び部屋に満ちる。

「悪かった」

ぽつり、と佐々木が呟いたのはどのくらいの時が立った頃か。空調の微かな風に飛ばされて、紙片と化した新聞記事はテーブルの上に雪のように散らばっている。

「よく注意していれば、俺にはハーカー先生の暴言が普通と違うと気付いたはずだ、いや、気付かなければいけなかった。俺だって精神科医なんだから。」

そして、院長先生の言うとおりハーカー先生に対して怒って一定の距離を保つべきだった。

いくら知らないとはいえ、俺はハーカー先生の症状を悪化させてしまった。君が怒るのも無理はない」

「……馬鹿野郎」

両手で顔を覆って王は呻く。

「なんで、怒らないんだ。どうしてここまで話を聞いて自分が悪いなんて言えるんだ。底抜けにお人好しで、自尊心が低すぎるんだよお前は」

そして、突如立ち上がると、乱暴に佐々木の長く癖のある髪に手を突っ込んでそれをかきまわした。

「ちょ、ちよっと、王」

「どうしてお前は他の留学医師みたいに、自分の優秀さを鼻にかけた嫌味な奴じゃないんだよ。お前がもつと傲慢で、人を見下してついでにミナの容姿だけを見て

鼻の下を伸ばすような下種野郎ならよかったのに

そうすれば、いくらミナに暴言を吐かれても

ざまあみろと思うだけだった。

ミナにA君の現実はこんなもんだって言う事も出来た。

親切そうに近づいて、陰で意地悪して病院から追い出す事も出来た」
そのまま佐々木の頭を胸の中に強く抱きしめながら、王は嗚咽交じりに続ける。

「許してくれとは言わない。殴っても構わないし、一生軽蔑されてもかまわない。ただ、謝らせてくれ。ミナが佐々木の命より大事な物に取り返しをつかない事をするまで、お前が錯乱状態になるまで、黙って

本当に悪かった」

「……王」

呟く佐々木の頭上に暖かい水滴が幾つも降り注いだ。

続く。

第十七話 決心

「王、ちょっと」

しばらくして王の胸の中から抜け出した佐々木は、立ちあがって指で王に頭を下げるように促す。

大人しくそれに従った彼の髪を、酷い傷痕の残る子供のよう小さい手が

先ほど自分がされたように、激しくかきまわした。

「さ、佐々木、な、なにを」

「よくもいつも一方的に人の髪をかきまわしてくれたな。」

たまにはやらせろ、無駄にでかくて手が届かなかったんだ」

言いながらひとしきり髪をかきまわした後、佐々木はポツリと続けた。

「ハーカー先生がやったことは、王のせいじゃない」

「だが、しかし」

「それに、王はずるいよ」

と佐々木は苦笑した。

「君が皆の前では親切でも、陰ではよそ者をいじめるのが大好きな最低の野郎なら、俺は遠慮なく張り倒して軽蔑させてもらったよでも、ノートを貸してくれたり、おかしくなった同僚をわざわざ自分の家で看病したり、その上二度と戻ってこないと思った妻の形身を探し出してくれた君を、どうやって俺は軽蔑すればいいんだ」

「……佐々木」

「あ、でも一つだけわがままを聞いてもらおうかな」

「あ、ああ」

頷いた王に、佐々木は今度は少し照れくさそうな笑みをむける。

「君のお母さんが作った水餃子、あれがまた食べたい」

「お前って奴は」

耐え切れずに王が吹き出し、佐々木もそれにつられる。
張りつめた糸が切れたように、二人は長い間笑い続けた

※

「遅くまで引き留めて悪かったな」

「いいや、こちらこそ送ってくれてありがとう

その、これからハーカー先生の家に行くのか」

車の中で王は頷いた。今まで佐々木が座っていた助手席には食べ物や飲み物がはちきれんばかりに詰められたビニル袋がおかれている。

「いい加減、ミナをベットから引っ張り出して何か食べさせないとな。

ああ、そんな顔するなよ、お前のせいじゃないんだから。

大丈夫こういう事は初めてじゃない、慣れたことさ」

そう言って王は軽く肩をすくめた。

「そうか、じゃあまた明日病院で」

「はいよ、ブラックジャックもちゃんと寝ろよ。

病みあがりなんだから」

軽く片手を上げて、王はアクセルを踏んだ。

遠ざかる車のテールランプが街の明かりにまぎれるまでそれを見送って

佐々木はアパートの軋む階段をのぼり、部屋に戻ると、

そのままベッドに倒れ込んだ。

色々な事を一度に聞きすぎて、頭の芯がジン、としびれている。そのままどのくらいの時間がたっただろう。

視界の端にきらりと光る物が映った。

重い身体を引き起こしてそこに近付くと、

シルバーの地サンゴらしいピンク色の宝石がはめ込まれた女性用の装身具の一部だと判る。

多分、ミナの物だろう。

身につけたアクセサリーが千切れるほどの力で

自分は女性を殴ったのかと思うと、

じんわりとした後味の悪さが胸にこみ上がってきた。

「ミナはお前のペンダントを本当に外に投げ捨てた訳じゃない。

ちょっと脅かそうと思って投げるふりをしただけだったって。

ブラックジャックのあまりの剣幕に言いだせなかったそうだ」

車の中で聞いた王の話が思い出される。

「まあ、ミナがやったことは嫉妬も混じっていたとはいえ、

『冗談』で済まされるレベルじゃなかったよ。

彼女もブラックジャックにひっぱたかれて、

やっと自分がやった事の重大さが判ったと思う、

まあ、その後がちょっと厄介だけだな」

実はミナは風邪などではなく、自己嫌悪から酒びたりになっているという。

「気を紛らわすには最悪の方法だよな、

でもアルコールを覚える前はリストカットだったんだ。

長い目で見れば命の危険はアルコールの方が高いが、

俺はもうミナが血を流す姿を見たくないんだよ」

「辛い、だろうな」

手の中のアクセサリーの欠片に、佐々木は呟く。

育てたように子は育つ。子は親の鏡。

ミナは母親の彼女や他人とのやりとりをコミュニケーションの手段として学習し、

母親の要求に完璧に答えたご褒美として

愛情を受け取っていたのだろう。

だから、他人にも同じ事を要求する。

『私が愛情を与えられるように、私の要求に答えて』

と自ら作り上げた理想像に及ばない個所を容赦なく攻め立てる。

例えるならば、棘だらけの手袋。

それをつけた母親に抱きしめられて、嫌と言うほど傷つけられたのに
気がつけばミナも同じものをはめて他人を傷つけている。

悲しい、愚かしい負の連鎖。

大きなため息をついた時、金属的な単音が奏でる古い流行歌が

はやりうた

部屋に響いた。もう、二度と聞く事はないと思った音色に、

慌ててシワの寄ってしまった古い写真が収められているフォトスタ
ンドの前の

ハンドタオルを開く。白いビニルテープを包帯のように巻いた、

解約済みの携帯の液晶にしっかりと「木之口繭」の名前が表示され
ていた。

「もしもし、風邪は大丈夫？」

「う、うん。心配してくれてありがとう」

何ら変わりなく聞こえる妻の声に、目頭が熱くなる。

「兵衛さんごめんね」

「どうして謝るんだよ」

「もう、何もしてあげられない私にいつまでも付き合ってくれて」

「そんなことないよ」

目の前に相手がいるように、佐々木は何度も首を振る。

「君の声が聞けるだけで、俺は満足なんだ」

「兵衛さんは本当に優しい。それが私を救ってくれた」

「……」

それは違う。本当に彼女を救えたなら、

今も隣で笑っていてくれていたかもしれない。

「だから、その優しさを必要としている人に向けてあげて」

「え？」

「兵衛さんなら、できるよ」

その言葉が終わると同時に、電話は切れた。

「繭」

沈黙した携帯電話と、手の中のアクセサリの破片を交互に見つめ
佐々木は考え込む。『優しさを必要としている人』が誰であるかは

判る。

だが、彼女にはすでに王がいる。

バタードウーマンの役割をしてきた自分がそこに首を突っ込んでいい結果が出るとはとても思えなかった。

「ごめん、繭の頼みでもそれは、できないよ」

虚空に向かってつぶやくと、佐々木はのろのろと立ちあがった。

そろそろ寝ないと明日の仕事に支障が出る。

着替えようとクローゼットを開けて、驚いた。

院長に休養を命じられた日に着ていたYシャツとズボンが

きちんと洗濯され、畳まれて置いてある。

汚水のたまった側溝に飛び込んだせいで

ひどく汚れ、匂いもついていたはずなのに

広げてみたそれは、染み一つなく洗剤の仄かな芳香しか感じられない。

「ミナは、本当にブラックジャックに恋してるんだ。

信じられないかもしれないけれど

部屋にぶっ倒れていたお前を見つけた時、

パニック状態で俺に何度も電話をかけてきた。

留守電に声が残されてるけど、聞くか？」

再び脳裏に蘇る、車の中の王の言葉。

差し出された携帯電話を恐る恐る耳に当てると

「もしもし、王。すぐに電話に出て、

倒れてるの、びしょぬれで、泥まみれで

え、ええと佐々木先生がよ。す、すぐに手当てしなきゃ。

熱が高い時って同するんだったっけ。

ああ、暖かくして、寝かせて、頭を冷やして。

その前に着替えさせなきゃ。パジャマ、いるわよね

後は飲み物と、食べ物と、ああ、泥を落とさなきゃ、何もできなかった……」

いつものミナとは想像もつかない、慌てふためいた声が聞こえてき

た。

多分、この服もミナが洗濯してくれたのだろう。

佐々木の中に僅かに残っていたミナに対する怒りがすっと消えていく。

彼女も、妻と同じだ。誰にも気付かれることなく

たった一人で孤独と絶望を抱えて苦しんでいる。

「やれるだけやってみるよ、繭」

数分前とは真逆な事を呟いて、

佐々木は脱ぎかけたジャケットに再びそでを通す。

ミナの家までは十分とかからないはずだった。

※

記憶を頼りにミナの部屋の玄関前に立ったものの、

佐々木は呼び鈴に指を当てては離す、

動作をしばらく繰り返していた。

時刻は深夜1時。一応の口実としてアクセサリの欠片をポケットに突っ込んできたが

人を尋ねるには非常識すぎる時間だ。

だが、病院でこんな話などできっこない。

呼び鈴に指を当てる事数十度目、ついに佐々木はそれを押した。

家の中から微かにチャイムの音が聞こえてくるが、

しばらく待つて見ても何の応答もなかった。

考えたら、大人でもとくに夢の中の時間だ。

きっと寝ているに違いない。

自分の早急さに苦笑しながら踵を返そうとして、ふとドアノブを回してみると

それはあっさりと手の中で回転して、細く扉が開いた。

どうしようかと迷ったが、自分もやられた事だと言いわけをして静かに部屋の中に入り、その様子に驚いた。

ミナを担いで入った前回はインテリアなどに
目を向ける余裕がなかったのだが、

佐々木の部屋とさしてかわらない広さのそこには、
ぬいぐるみや人形などかわいらしい物で溢れていた。

最近キティに代表されるように

大人の女性向けのファンシーグッズも多数発売されているが、
この部屋にあるのはどうみても子供向けのものばかりだ。

何も知らない人間が見たら、

この部屋の主をまだ幼い子供だと思うだろう。

つけっぱなしの照明に鈍く光るテーブルの上に乱立した酒の瓶が
酷くちぐはぐだ。

「陰月、また戻ってきたの」

酷く不機嫌そうな声は、ベッドの上の毛布のふくらみの中から聞こ
えた。

サイドテーブルの上にも、

酒瓶と琥珀色の液体が半ば入ったコップが置かれている。

「何度言ったらわかるの、私の事は放っておいてよ。」

今度という今度は自分自身に愛想がつきたわ。

もう嫌なの、疲れたのよ生きている事が。

何も聞きたくないし、聞くつもりもないわ。ぐしゃぐしゃ言わない
で帰って」

ああ、毛布の下にいるのは小さな女の子だ。と佐々木は思う。

親に愛されるために、理想の子供を精一杯演じて疲れ果てて、
それでも演じる事をやめることが出来ない。

「ハーカー先生。そのままでもいいから聞いてよ」

佐々木の言葉に、びくりと毛布の山が震えた。

続く

第十八話 願い

しばらくだまって毛布を見つめていても、暴言どころか返事もない。

「悪いとは思ったけど、鍵が開いていたから入らせてもらったよ。でもこれでおあいこだね」

再び佐々木は、患者に対するように

穏やかで優しい口調で毛布の山に話しかける。

「王から大体の話は聞いた。ごめん、俺は君の思い描いていたような立派な人間じゃないんだよ。いくら妻との思い出の品を傷つけられたからといって女性に手を上げるような奴なんだ」

やはり、返事はない。

「そして精神科医のくせして自分の心すら持て余し、すぐそばにいる人間の

悩みすら察する事が出来ない、ハーカー先生が失望するわけだよ」

「……どうして」

ようやく毛布の下から気だるそうな掠れ声が聴こえた。

「どうして謝るの、私、先生に殴られても当然の事をしたのよ」

「それでも男が女性を殴るなんて最低だ。それに、ハーカー先生のお陰で俺は肺炎にならずに済んだ」

「ごめんなさい」

いつもの彼女とは比べ物にならない小さく弱弱しい声の謝罪。

佐々木はそれにゆっくりと首を振った。

「謝らなくてもいいよ、でも俺に申し訳ないと思うなら

これから言う事を聞いてくれないかな」

かすかに毛布の山が上下した事を認めて、佐々木は先を続ける。

「ハーカー先生は人間関係のアドイダクション（嗜癖）なんだ。

病気ではないけれど、このままでは社会生活に

重大な支障がでてくると思う。

内科医とはいえ、精神病院に勤めているんだから判るだろう」

また、小さく毛布の山が動く。

「それに、先生自身も辛いよね」

「そんな……ことない」

「辛いはずだよ」

佐々木はそう言って、ベッドの下にまで散らばった酒瓶を見渡す。

「素面でいられないんだろう。酔いが覚めるのが怖いんだろう。」

ハーカー先生、もう、頑張るのはやめようよ」

「私、頑張ってなんかいない」

「いや、頑張るのが当たり前になっているから、

気付いていないだけで、もう先生は疲れ果ててくたくたなんだよ」

返事はない。再び押し黙ってしまった毛布の塊に、佐々木は

さらに語りかける。

「助けを求めてみなよ、王がずっと手を伸ばしてくれているだろう」

「……だめ」

「どうしてさ」

「悩みなんて話したら、不幸せだと思われるわ」

「……」

その言葉に、佐々木は毛布の塊を手の平で押さえつける

巨大な顔のない女性の幻を見た。多分、常にミナは母親から

そのようにいい聞かされているのだろう。

他人から幸せだと思われる事が最も大切な人間が支配する

監獄のような家庭。彼女は『自慢の娘』と言う名の囚人だ。

「ハーカー先生、先生が投げたふりをしたペンダントは、

俺の妻の遺骨が入っているんだ。

妻は幼いころ、親に酷い虐待を受けていて、誰にも助けを求められずに

自分で死を選んでしまった。俺の手にはまだ冷たくなっていく

妻の手の感触が残っている。その時の絶望感もまだはつきりと思い出せる。

俺は、もう誰にも妻のようになってほしくないし、俺と同じ思いを

抱いてほしくない。お願いだ、ハーカー先生。伸ばされた手を握ってよ。

まだ、きつとまだ間に合うから」

しばらく待ったが返答はない。佐々木はため息をついて踵を返した。王が何年かかって説得しても駄目だったことをいくら言葉を重ねても、自分が出来るわけがなかったのだ。だが、

「……私、治るの？」

背中にぶつけられたすがるような響きのこもった言葉に佐々木の足が止まった。

ふりかえると、迷子になった子供のような表情でミナがベッドの上に座っている。その左耳だけにシルバーの地にサンゴがはめ込まれたピアスがぶら下がっていた。

「病気じゃないのに、性格なのに、治せるの？」

「治るよ」

佐々木は頷いた。

「時間はかかるかもしれないけれど、ハーカー先生がきちんと自分の問題点を見つめて、治そうと思うなら絶対に治る」

「なら」

ずっと白くしなやかな手が、佐々木の方に伸ばされる。

広げられた掌の中から、はらりと皺くちやになった紙が落ちた。古い日本の新聞記事。今までずっとミナを支え続けてきたもの。

「先生が、治して」

「……」

佐々木は黙りこんだ。

自分とミナとの間には、すでに共依存に近い関係が築かれてしまっている。

「俺より、先生を治療するふさわしい人間がいるよ」

「先生、先生はこの新聞記事のA君でしょう」

ベッドの上の新聞記事を、ミナが指差す。

「多分、そうだと思う」

「なら」

再びさがるような目でミナは佐々木を見る。

その目にはいつもの周りを威圧するような力強い光の代わりに涙が滲んでいた。

「お願い、前のように、私を救って」

ミナの表情に、亡き妻のそれが重なる。

すこしも似た所など無いはずなのに、今の彼女は驚くほど出逢った頃の

妻にそっくりだ。

「王に治療を受けるより、辛いよ」

ミナは頷いた。

「それでもいい、私は治りたい」

再び伸ばされる手、佐々木はしばらくそれを見つめた後、何かを決意した表情でその手を握り返した。

「ありがとう」

「その言葉はまだ早い、まずはこのアルコール類を全部片付けよう。そして、明日は必ず出勤してきて。職場ならアルコールに逃げるわけにはいかないだろうそれに、内科がいい加減困り果てている」

うって変わった佐々木の厳しい口調に、

ミナは一瞬不満そうに何かを言いかけたがすぐに小さくうなずいた。

続く

第十九話 苦難

それで、ブラックジャックはミナを治療すると約束したのか」
「した」

頷いた佐々木に、王は驚きと戸惑いが混ざったような複雑な表情を向けた。

昨日と同じカウンセリングルームに、

二人はやはり昨日と同じように向かい合って座っている。

時刻は日付が変わるまで、あと二時間ほどといったところだ。

「思ったより無茶をする奴だな。

自分だって問題を抱えているのに、よほど上手くやらないと共依存になるぞ」

「判っているさ、俺だって素人じゃない。だから彼女と幾つか約束をした」

かけたパズル同士が組み合わさるように、異なった嗜癖を持つもの同士が

お互いの依存を補い合うと、事態はさらに悪化する。

佐々木がミナの暴言を黙って受け入れていたということは、すでにその下地は出来上がってしまっているのだ。

「俺に暴言を吐いたら理由はどうであれ、その時点で治療は打ち切る。

それを防ぐために、治療時以外は院内での接触は必要最低限にする。さらに、飲酒やリストカットも禁止した。

もちろんやった時点で治療は終わりだ」

「……訂正する。無茶じゃなくて無茶苦茶な奴だな、そこまで一気に追い込むか、普通」

「ハーカー先生のような自覚がない患者には、まず自分が嗜癖に依存している現実を突き付ける必要がある。だからあえて一気に依存している物を禁止した」

「判らない話じゃないが」

顎に手を当てて考え込んだ王に、佐々木は続ける。

「ハーカー先生は精神病院に勤めている医師で、

しかも王が散々説得しても自分の病を認めなかったんだろう

一筋縄じゃないさ。王、申し訳ないけれどしばらく

ハーカー先生から目を離さないでほしい。依存を強引に断ち切った
せいで

かなり不安定になると思うんだ。何かあったら困る」

「言われなくても判ってるよ。俺だって精神科医だからな。

で、治療法は？ 自助グループにでもかよわせるのか」

佐々木は首を振った。

「それはもう少し先の話だよ、当分はこれで怒りのコントロールを
してもらおうと思う」

と取り出したのは、細長い棒状のものがぎっしりとつまった
ビニル袋だ。

「チョップスティックか？ 使い捨ての」

「ああ、日本じゃ割り箸って呼んでいる。暴言を吐きたくなったら
これをへし折って気分を鎮めてもらうんだ」

割り箸は軽くて細くて、持ち運びが容易な割にはへし折るには
力要る。そして派手な音を立ててわれるので、日本ではDVの
怒りをコントロールする方法として多く用いられている

「気が静まるまで何本へし折っても構わない、

ただし、へし折った本数は記録してもらう。

アルコールは暴言を放ってしまった自己嫌悪から目をそらすための
物だろうから、暴言が減れば必要ないはずだろう」

「判った。ミナのサポートは責任を持って引き受ける」

「ありがとう」

「礼は言わなくていいぞ、これを引き取ってもらえるだけでいい」
油染みの浮いた紙袋を差し出され、佐々木は苦笑しながら
それを受け取る。

「……ごめん」

「何を謝るんだ？」

不思議そうに問い返した王に、佐々木は気まり悪そうに視線をそらす。

「その、君とハーカー先生の間に割って入ったみたいで」

「馬鹿だな」

間髪いれずに言い返し、大きな手が佐々木の髪をいつものようにぐしゃぐしゃとかきまわす。

「ミナの心の健康を取り戻してくれるなら、俺は誰であろうと全身全霊で感謝するよ……俺には、出来なかったからな」
そう言って王は僅かに顔を歪ませる。

「全力を尽くすよ」

「……頼む。さて、こっちも一筋縄ではないかない患者さんの治療をはじめますか」

「え？」

戸惑う佐々木に、王は苦笑した。

「おいおい、ブラックジャックも厄介な症状を抱えた患者だと言う事を忘れるなよ。こっちは俺が全力を尽くしてやる」

「そうだったね」

夜更けのカウンセリングルームに笑い声が響く。

「あら、遅くまで頑張っているのね。疲れた時には甘い物が一番よ」

ひょいと、顔を出した院長が机の上にドーナツの袋を積み上げたのはその数分後の事である。

※

「まいったな」

椅子の背もたれに限界まで身体を預け、王と佐々木はほぼ同時に

同じ言葉を呟いた。

「なにがですか、王先生」

「お先にどうぞ、患者さん」

気まずそうに顔を見合わせ、わざとらしいやり取りの後、二人はまた揃って深いため息をついた。

ミナの治療を引き受けたと王に告げた日から、二週間後。やはり深夜に近い時刻のカウンセリングルーム。

治療中だからと仕事をおろそかにするわけにもいかず、

二人がこの部屋にいるのは大概こんな時間だ。

そして、治療の為のカウンセリングをしているといつのまにか日付が変わっている。帰るのが面倒だと

そのまま当直室で短い睡眠をとって

再び勤務につく日も多くなり、二人のロッカーは洗濯ものとして院長から押しつけられたドーナツが山になってきている。

王が白衣のポケットからコインを取り出して空中に放り投げた。落ちてきたところを左手の甲で受け止め、右手を重ねる。

「表か裏か」

「裏」

「表だ、先に話せ」

王の言葉に、佐々木はやや躊躇った後に口を開いた。

「専門外とはいえ、嗜癖の治療がこれほど難しいと思わなかった」

「……一筋縄ではいかないと言っていたじゃないか。まあ、

ミナは特別だと思うけどな。本人も医者だから知識も豊富だし、頭の回転も人並み以上だからな。認めないんだろう、おぼさんの歪んだ関係を」

「ああ」

佐々木は頷く。

「どんなに言葉を変えても、母親は最初の父親の被害者で私を支えてくれた立派な人だ、と繰り返すばかりなんだ」

「二〇年以上叔母もミナに依存してきたからな、子供が

離れていかないように出来る限りの事を吹き込んだんだろう」

「アメリカの女性にしては珍しいな、子供に

叶えられなかった自分の夢を託すタイプ、か」

腕を組んでもう一度ため息をついた佐々木に、王は

そうでもないさ、と再び口を開く。

「夢、というか理想の自己だな。俺の話で判っていると思うけど

叔母は理想が高い。医者や弁護士といった社会的地位が高い職業につきたかったのは自分なんだ。

叔母はミナでもう一度人生をやり直したつもりになっているんじゃないかな。

そしてミナは実の親を知らずに、家庭の崩壊を経験している。アイディティが酷く脆弱なんだ。

そこに叔母から離れられない原因の一因があると思う」

「そうか、異様に我慢強いのもそのせいかな。

見事に俺への暴言が消えた」

王は頷く。

「一度属したモノから捨てられる恐怖は人一倍強いと思うぞ。

だから、お前との絆も断ち切りたくないんだろう。あこがれのA君だからな。

まあ、お前の教えた怒りのコントロール方も有効なんだろうけど」

だが、佐々木は礼儀正しく丁寧な言葉遣いになったミナが、逆に生気をなくし、暴言を吐いている時は生き生きと輝いていた

アーモンド形の瞳に薄い紗幕がはったように曇っている様を見る度に彼女ではなく、ミナそっくりの人形を相手にしているような

気分になるのだった。

続く

第二十話 無自覚

「一度ハーカー先生の母親と話が出来ればいいんだけどな」

「叔母とか？」

佐々木が頷く。

「ハーカー先生の嗜癖問題の根っこは母親との関係だろう。

アルコール依存症の家族両方を適用させてみたいんだ」

「無理だな」

前髪をかきあげながら、王は渋い表情できっぱりと言い切った。

「叔母からアプローチできるなら、とづくにやっている。

あの人は、幼児的万能感から抜け出せないわがままいっぱいの女王様なんだ。周りにいた誰もがそれを矯正するより、めんどうだからと叔母のわがままを出来る限り受け入れてしまったから、余計拍車がかかったんだろうな。どんな些細なことでも、叔母が自分の非を認めたり、他人の意見を聞いたりしたところを見たことがない」

「そりゃまた強烈だな。ああ、それだから10歳前の子供を自分がん望んだからと、あっさり一度は養育放棄した養母の元にかえしたのか」

そう言って珍しく皮肉げな笑みを浮かべる佐々木。

「あまり苛めないでくれ。両親もそれはずっと後悔しているんだ。だからミナがこの病院に就職したのを機に、三人でミナを一人暮らしさせるように説得したんだ。病院へ十五分以内に到着できる場所に住む

という契約を盾にしてな」

「悪い、少しイライラしてた」

苦渋の色を深めた王の顔から、佐々木は謝りながらも目をそらす。

「いいよ、事実は事実だ。そしてまだ二週間だろう。

統合失調症やうつ病じゃないんだから、

好転するまでまだまだ時間がかかるさ。あせるなよ」

「そうだな。院長もおっしゃっていた。現代人の悪い癖だな、すぐに結果を求めてしまう。で、王は何を悩んでいるんだ？」

「ブラックジャックの病状だよ」

「俺の？」

きょんとした表情で問い返した佐々木に、

王はやれやれと肩をすくめた。

「身体症状は、軽減したか？」

「……それは」

言葉を詰まらせて、佐々木は俯く。

「処方された抗不安薬はきちんと飲んでいるんだろう」

「ああ」

「加えて」

と王はカルテを開いた。

「イメージ暴露療法を何回したと思う？」

「えっと」

再び佐々木は言葉に詰まる。

イメージ暴露療法とは、恐怖、不安を感じる場面をもう一度故意に思い出す治療法だ。

リラックスした状態で、作成した不安階層表の恐怖の順位の低い順に思い出し

その時の状況を感情を含めて細かく説明する。

これはその出来事の再体験となり

それを恐怖が薄れるまで繰り返す。

その繰り返しを最終的に最も恐怖を感じる出来事の恐怖が消えるまで続けるのだ。

「覚えていないのか、十五回以上だ。」

十年前の出来ごとにしては少し多いな。

そして申し訳ないが、俺は前回の療法でお前にトラップを仕掛けた」
「？」

「ブラックジャックが今恐怖を克服できていないレベルは上から三番目の

「ごめんなさい」と書かれた遺書を読む、だろう。

俺は前回お前にレベル1の奥さんの死を看取る場面と、レベル2の結婚式後に倒れた奥さんに駆け寄る場面をイメージさせたんだぜ」

「なんで、そんな事を」

「何か身体症状が起こったか？ 恐怖を感じたか？」

問い返されて、佐々木はしばらく黙りこんだ後、困惑しきった顔で「いや」と答えた。

「そうだろう、そして治療が終わった後も、

お前はそれがレベル1とレベル2であることに気付かなかった。レベル3をイメージした時はひどい過呼吸を起こしたのに、だ。ということは、ブラックジャックは

自分の恐怖・不安のレベルを把握できていなかった事になる」

「……そんな」

低く呻いて両手で頭を抱えた佐々木に、

王は珍しい話じゃないぞ、と慰めるように続けた。

「レベルの混乱はよくある事だ、

普通は死を看取る方が恐怖を感じると思うしな。ただ……」

そこで言葉を詰まらせ、思案するように視線を宙に彷徨わせる王。

「たのむ、どんなことでも隠さずに言ってくれ」

「先日、お前が俺の家で高熱を出して眠っていた時、時折うわ言を言っていたんだ。

日本語だったんで、正確に全てが聞き取れた訳じゃないんだが、ごめんなさい。と、それに」

「それに？」

「お父さん、お母さんは理解できた。FatherとMotherでいいんだよな、意味は」

「お父さん、お母さん、なんで俺は、そんな事」

記憶もなく、顔ですらおぼろげにしか思い出せない二人にうわ言
とはいえ

なぜ、謝っていたのか。

「佐々木、今回のパニック障害は両親に殺されかけた一件にも、
原因があるんじゃないか」

「そんなことはない」

部屋の窓が震えるほどの大声に、王以上に発した自分の方が驚い
た。

「悪い、怒鳴るつもりはなかった」

「あ、ああ。こっちこそ不用意なことを言って悪かった。

だが、お前が体験したこともミナと同じ

世界の崩壊に等しい出来事だったんだぞ」

「ハーカー先生と俺じゃ状況が違いすぎる。

俺は、親が死んでからのほうが恵まれた生活をしていた、と思う」

「たとえば？」

「3食きちんと食べれたし、毎日洗濯をした服を着せてもらえて、
風呂にも入れてもらえたな。

それに、病気になったら医者にもつれてって貰えて

あったかい布団に寝かせてもらって、それから」

「ちょ、ちよっとまでブラックジャック」

王が我慢できないといった風に、佐々木の言葉をさえぎった。

「ネグレクトされていたのか、お前は」

いや、と佐々木は首を振る。

「だから俺は、両親と生活していた記憶は一切ない。だけど

怪我が治って退院してから半年位、お世話になっていた遠縁の家では
朝と夜は三日に一遍くらいしか食事を出してもらえなかったし、

パジャマと洋服が一着づつしかなくて、日曜しか洗濯ができなかつ
た。

でも、それが普通だと思っていたし、誰も何も言ってくれなかった
から

多分両親も同じことをしていたんだろう。ああ、インフルエンザに罹ったら

邪魔だと家を追い出された事もあったな。確か学校の体育館倉庫で治るまで

じっとしていた記憶がある」

「なんで、そんなひどい話をにこやかな顔で語れるんだブラックジャックは」

恐ろしい物でも見るような表情の王に、佐々木はきよとんと問い返した。

「これ、そんなに酷い話なのかな」

「当たり前だ」

呆れたようにため息をついて、王は言を継ぐ。

「じゃあその、人間らしい生活をさせてくれたのは誰なんだ」

「前にも話したと思うけど、

同じ街のスナックとホテルを経営してた小母さん。

笑い話なんだがある時空腹に耐えかねて、スナックのあいていた勝手口から

忍び込んで氷を食べてたらいつの間にか後ろに立っててさ。

怒られると思ったらお腹すいているのかいって言われて

ご飯を食べさせてくれて、それから色々面倒見てもらってた」

くすくすと笑い声さえあげる佐々木と対照的に、王の表情は厳しいままだ。

「佐々木、俺は全く笑えないよ。記憶がないと言いながら、お前も酷い虐待を受けているじゃないか」

「……虐待、なのかな。これは」

いまいちピンとこない様子の佐々木に、王は何度も頷いた。

続く

第二十一話 寂實

「そうか。ここではよく聞く話だから、気がつかなかったよ」

何処か人ごとのように言う佐々木の手の平に、王は自分のそれを合わせる。

「気付かなかった、じゃなくて気付かないようにしていたんだろう。無意識のうちに。そんな子供時代を送ったから、

こんなに小さいんだなブラックジャックは」

重ねられた二人の手は、一回り以上大きさが違う。まるで大人と子供だ。

「俺は手が小さいんだよ。それに君はアメリカ人だろう」

「アメリカ人と言っても、俺はアングロサクソンじゃなくて、お前と同じ

アジア系だ。そんなに大きな差がつくわけもないのに、これだ」

「こじつけるなよ」

首を振りながら、それでも両手を白衣のポケットに突っ込んでしまった佐々木に

王はため息をつく。

「ブラックジャックもミナとそっくりだ。子供の頃の酷い経験のせいで

感情が麻痺して、正常な判断が出来なくなっている」

「だから、ハーカー先生よりは俺はずっとましだといっているだろう」

「虐待にどっちがましだなんて、優劣をつけるな。まったくミナといい佐々木といい、痩せ我慢にもほどがあるぜ」

「痩せ我慢なんて、してないよ」

「自覚がないだけだ、馬鹿野郎」

穏やかな佐々木の口調とは対照的に声を荒げる王。

「何を怒ってるんだ。帰るのか」

声と同じように乱暴な動作で椅子から立ち上がった王は、ああと頷く。

「今夜は帰ってじっくり治療法を考える。お前は自分が思っている以上に」

……もういい、家まで送って行くから仕度をしろ」

「歩いて帰るよ」

「人の好意を無にするな！！」

ますます声を荒げ、足跡も荒く部屋を出ていく同僚の後を佐々木は慌てて追った。

※

「そんなに酷い経験だったのかな」

三日ぶりに自宅のベッドに横になりながら、佐々木は呟く。

車を運転している間も、王はずっと無言だった。

一体自分の話の何が彼を怒らせたのかずっと考え続けているが判らない。

「まともな家庭も知らない俺が、ハーカー先生の治療を引き受けたのが

やはりまずかったのかな」

独り言を続けながら、手の中で弄ぶのは古い携帯電話。

深夜、ミナの家に行った日を最後に、妻からの電話はかかってこない。

三か月以上間が空いた時があるから、不安ではないが、今日は無性に繭の声が聞きたかった。

「繭」

ひんやりと冷たい携帯電話に佐々木は語りかける。

「普通の家庭ってどんなものだろう」

記憶の糸をたぐりよせれば、蘇ってくるのは夕暮れの小学校の教室で嬉しそうに帰って行く級友の背中を見送り続けた光景。

些細な事で怒鳴られ、殴られる場所にどうして笑顔で帰ってゆけるのか

その時は不思議でしうがなかった。

久代小母さんと暮らすようになってからは、家に帰る事は苦痛ではなくなったけれど

心の隅がいつもさわさわと落ち着かなかった。

一人暮らしをし始めたら気楽にはなったが、真っ暗な家に帰るとよく夏でも、

震えるような寒さを感じた。

もし、繭と普通の生活が出来ていたならば、ドアを開けた自分を彼女は

「おかえり」と笑って迎えてくれただろうか。

その光景を想像すると、目の奥が熱くなる。

「ただいま」

携帯電話に何度も囁くが、返事はない。

静寂が、耳に痛い。

身体の脇を冷たい風が通り過ぎていく。

心の中にたった一つの言葉が音もなく降り積もっていく

「寂しい」

起き上がってテレビをつけ、バラエティ番組にチャンネルを合わせる。

その空虚な笑い声をつまみにウィスキーを何も加えずに胃に流し込んだ。

酔いが誘う浅い眠りの中、夢を見た。

「ただいま」

元気よく声を張り上げながら、玄関の扉を開ける自分。

「おかえりなさい」

そんな自分を迎えてくれる、誰か。

姿は日の光にとけて判らないのに、重く痛む頭を抱えて目が覚めた後も、優しく暖かい声だけは耳の中に残っていた。

だが、どんなに記憶をさかのぼってもその声の持ち主を
佐々木は思い出す事が出来なかった。

続く。

第二十二話 突破口

「だから私は何回も言った通り、母にマイナスの感情は抱いていないわ。

そりゃあ、少し過干渉だなと思う事はあるけれど

一人暮らしの未婚の娘の母親って

みんなそんなものじゃない？」

前回、いやカウンセリングを始めた時から

何十回と言いつづけてきたセリフを、また目の前で繰り返されて、佐々木はさすがにうんざりとした気持ちになった。

ミナを治療を引き受けてから一カ月が経過した日曜日の夕方。

旧館と呼ばれている病院で一番古い建物の五階、

もう長い事使われておらず、埃がつもり

半ば物置と化したカウンセリングルームで、

佐々木とミナは小さなテーブルを挟んで向かい合っている。

彼女の治療は佐々木のそれとは違い私的な事なので

本当は勤務時間外に病院の外で行うべきなのだろうが

ローテーション勤務では仕事の終了時間も、休日も合わせにくいため外来診察がない比較的暇な日曜日の休憩時間を使い、

このような人目につきにくい場所でカウンセリングを続けていた。

そろそろ秋も深まってきて、いくら温暖なカリフォルニアとはいえ流石に冷え込む日が多くなってきた。

埃っぽい部屋の中はお世辞にも暖かいとはいえないが、

エアコンをつけるわけにもいかず

二人は白衣の上にそれぞれコートをひっかけて、寒さをしのいでいた。

「でも、ハーカー先生のお母さんは子供の頃の先生に随分厳しい要求を突き付けたんだって？」

この質問も何十回繰り返しただろう。

返される答えもう覚えてしまった。

「陰月から聞いたんでしょう？ 大げさなのよ。」

皆の家でも言われているんじゃない？

テストは学年一番を取れ、友人と遊ぶのはいいけれど、
パジャマパーティーなどのお泊まりは駄目

門限は午後六時、娯楽施設は映画館までそれから……」

「それは先生がいくつまで続いたの？」

「大学を卒業するまでよ」

「周りの友人と比べて窮屈すぎるとは感じなかった？」

「いいえ、その頃は勉強一筋で余り友達もいなかったし」

この台詞を言う時だけ、少しさびしそうな表情をする所まで毎回同じだ。

まるで同じ芝居を繰り返し演じているような気分になってくる。

――なんて、頑固なんだ――

いくら娘とはいえ、二十を過ぎた大人に外泊を禁止し、
外出先にまで制限を加える。

成績も上位ではなく一番でなくてはならない。

普通ならば、反発を覚えて当然の事なのに、

ミナは頑なにそれを当たり前の事と言いつける。

「映画とかドラマで大学生の生活が出てきたりするだろう、それを見て

自分の家が不自然だと思わなかった？」

「そんなものはあまり見なかったかわ。ママが嫌いだったから」

「じゃあ、ハーカー先生は休日、何をして過ごすの？」

「そうね、ママの話を聞きながらお茶を飲んだり、
ママと一緒に料理を作ったり

後は医学書を読んだりしているわ、ママの隣で」

――全ての基準は母親、か――

自分の好き嫌いではなく、母親の好き嫌いが全ての行動が決められる。

王達が強引に一人暮らしを勧めた理由が良く判る。もっとも、休日、彼女は殆どは実家に帰っているらしいが。

「医者になったのも、お母さんの勧めだったっけ」

「ええそうよ」

ミナは頷いた。

「ハイスクールに入る時にママがプレゼントをしてくれた本を読んで決心したの。ママもこの本を読んで、医者になりたかったんですって。

それまでは弁護士もいいなと思ったし、

動物園の飼育係にも少し興味があつたけどね」

「小児内科を選んだ理由は？」

「一番突発的な呼び出しが少ない科、なのよ。休日もきちんと休めるから

ママとの約束を破らずに済むし、

子供達相手なら悪い虫もつかないだろうってママが……」

「ねえ、お母さんに今一番言いたい事は何？」

唐突な佐々木の質問に、ミナはきよんとする。

「言いたいことって？」

「何でもいいよ、悪口でも褒め言葉でも、

今ぱっと心に思い付いた事をいって10秒以内に」

ミナの眉がきゅっとひそまった。

「あと5秒」

その手が机の上に置かれた袋から、

割り箸を掴みだして乾いた音をたててへし折る。

「3秒」

「いつも私の事を気にかけてくれてありがとう、お母さん」

俺た割り箸を手が白くなるほど握り締め、

引きつったような笑みを浮かべるミナに

これでもだめか、と佐々木は内心で大きなため息をついた。

考える余裕を与えない質問は、本音が漏れる確率が高いのに。

それでも彼女が口にしたのは感謝の言葉。

――よくここまで、理想の娘と言う名前の母親の操り人形が出来上がったものだ――

今、目の前に座っている女性に自分の意思はない。

見えない糸がここにはいない母親の手の中にと繋がっている。

でも、と佐々木はミナが握りしめている割り箸をちらりと見る。

彼女が割り箸を折ったと言う事は、暴言を吐きたかった証拠。

――彼女だって、無意識ではわかっているんだ――

高い要求ばかり突き付けてくる母親。

理想の子供としての自分、しか愛してくれない母親

そんな母親への不満が心の奥底で渦巻いている事を。

だが、それは意思の力に押さえつけられ決して言葉になる事はない。

――それほど、ハーカー先生は怖いんだ――

母親に嫌われ、再び捨てられる事が。

人間の子供は自然界においても脆弱な姿で生まれる。

自分で歩くことも、食事を取ることも出来ない子供にとって親の愛

されることが

命を繋ぐ唯一の方法であり、発達過程においては

自分はこの世に存在価値があるという証と感じるようになる。

世の中の大多数の親が子供に『当たり前』として注いでいる愛。

だが、ミナの頭上にそれは「条件付き」でしか降り注がれなかった。

愛されるために、つまり生き延びる為に

彼女は母親の出す「条件」を全て受け入れ

自己を押し殺して「理想の娘」の型に自分を押し込んできた。

――どんな些細なことでもいい、母親を否定出来れば――

小さな穴から漏れた水が、やがて堤防を決壊させるように

母親への本音が噴き出すはずだ。そしてそれができれば

他者への暴言と言う歪な形でストレスを吐き出す必要もなくなる。

――なにか、きっかけがあればいいんだけどな――

意思の力を吹き飛ばすほどの、強い母親への怒りか悲しみ。

だが、そんなものが都合よくおこるわけもない。

――長い時間をかけて、気付かせていくしかないのか――
もう自分が母親の庇護を必要としない年になっている事を。
母親の代わりになってくれる人が近くにいる事を。

問題は、それまでにミナのストレスが限界に達しないかとい事、
割り箸をおって少しは発散させているのだろうか、
爪にひどい噛み痕があるのを佐々木は見つけた。

自傷行為が再発しかけている。

ちりちりと胸底がやけつくような焦燥感を覚えた、その時
ふっと部屋の電気が消えた。

すでに秋の短い日は暮れきっており、部屋の中には
瞬時に暗闇が満ちる。

と、同時に今まで気にならなかった窓ガラスを叩く雨音が
急に大きく聞こえ出した。

いつのまにか雨が降り出していたらしい。

「停電かしら」

「らしいね、しかもどうやらこの棟だけみたいだ。
ここから見る限り、他の棟は明かりがついている」

「そう、じゃあ患者さん達に影響はないわね。安心した」
入院患者達は主に一階に集められている。

窓から下を見下ろす佐々木の隣に立って、
特に騒ぎが起こっていないことを確認してミナは安堵したように言
った。

「でも、何かトラブルがあるかもしれないから、戻ろうか。
暗いから気をつけて」

佐々木の言葉にミナは頷く、二人してそろそろと無造作においてある
荷物に躓かないように注意して、ドアへと歩き出した時
部屋の中を真っ白な光が一瞬埋め尽くし、
続いて大音響で落下音がした。

「雷?。」

「いや!!」

暗闇の中で、暖かく柔らかいものが佐々木にしがみつく。

「ハーカー先生？」

「わ、私雷が、駄目なの」

「え？」

佐々木が聞き返したとたん、もう一度光と音が部屋に満ちるた。

「やだ」

小柄な体に回された腕に一層力が籠った。

続く

第二十三話 葛藤

「ハーカー先生、落ち着いて。雷は建物の中にいれば大丈夫だから。とりあえず、部屋から出よう」

その言葉にミナが頷く気配が伝わってきたものの、しがみついた腕の力が

緩む気配はない。

しかたなくそのまま佐々木はそろそろと歩きだしたが、すぐに床の上に

無造作に置かれたガラクタに躓いて転びそうになった。

窓から差し込む他の棟からの僅かな明りにぼんやりと見える扉までの距離が

恐ろしく長く見える。

「ほら、ここに座って。電気がつくまで待とう」

結局怪我をしても厄介なので、近くにあった長椅子に二人は並んで腰を下ろした。

部分的な停電なので、復旧までにそう時間はかかるまい。

また窓の外が白く光り、半瞬の間を置いて轟音がそれに続く。

「いや!!」

小さな悲鳴と共に、ミナが佐々木の肩に顔を押し付ける。

コロンらしい甘い香りが鼻先をくすぐった。

「せ、先生。大丈夫だから、少し、離れて」

うわずって掠れた声で佐々木は懇願する。

激しい動悸は、彼女に欲望を感じたからではない。恐怖ゆえだ。呼吸が荒くなっていくのがわかる。

――落ち着け、落ち着くんだ――

このままでは過呼吸になってしまう。

だが、子供のように怯えたミナの前でそれを起こせば

彼女までパニックを引き起こす可能性がある。

おぼれた者が藁をつかむように、長椅子の上をまさぐっていた指先が暖かく柔らかい物に触れた。どうやら毛布の様だ。

「これに包まって、少しは落ち着くよ」

少々埃臭いそれで、ミナをすっぽりと包むとようやく肩から顔が離れしがみついていた腕の力が緩んだ。

——こんなことでも、発作が起きそうになるなんて——

少しも改善されない身体症状に、絶望感が湧きあがる。が、

「ありがとう」

ミナの小さな声に、底なし沼に沈んでいくような心地がふっと止まった。

と同時に背中にまわされた彼女の手の暖かさが全身に伝わる。

「まだ怖い？」

声をかけるとさらに少しづつ気力が戻り、呼吸が安定してくるのが判る。

人が隣にいる事を、これほどありがたいと思ったことは初めてだ。

「少し」

毛布越しに触れ合った彼女の身体が微かに震えている事が判って

佐々木は恐る恐るそこに自分の腕をまわした。

ギュッと力を込めると、ミナの震えが止まった。

恐怖解消に有効な方法。直接触れ合っていないせいか、今度は発作が起こる気配はない。

「人間、意外な所に弱点があるんだね」

稲光がするたびに、毛布の下で身を縮こませるミナの背中を優しく撫でながら

佐々木は言った。喋ると言う行為もまた、恐怖を和らげる。

「子供の頃、たった一人で留守番をしていたことがあったの」

「そう」

「その時に今日みたいに雷が原因で停電が起きて、一晩中雷の音しか聞こえない真っ暗な家の中で一人ぼっち」

「それは、怖かったね」

毛布の下でミナが頷く気配が、佐々木の腕に伝わってきた。

「怖くて、泣きたくて。でも泣いちゃ駄目だから

ベッドの上で今みたいに毛布にくるまって朝が来るまで震えていたわ。

そして翌日帰って来たママに、宿題をやっていない事で怒られた。

それ以来、雷が駄目なの」

「どうして泣いちゃいけないの？」

「ママと約束したの」

一向にやむ気配のない雷に、びくびくと怯えながらミナは話を続ける。

「泣くのは不幸で弱虫の証拠。幸せで強い子は泣かない。

私は世界一幸せで強い子だから、ママの前ではいつも笑顔でいると約束したの」

「泣いてみたら？」

「え？」

怪訝な声で問い返すミナに、

「今、泣くほど怖いんだろう。思いきって泣いてみなよ」

と佐々木は繰り返した。

「勘違いしないで、泣くほど怖かったのは子供の頃の話よ」

「今だって俺にしがみついて震えているよ。小さな子供と一緒にだ」
はっとしたように、ミナが佐々木から身体を離す。だが次の瞬間
窓の外を白く染める光と落下音に、再びミナは悲鳴をあげながら
佐々木の胸の中に飛び込んだ。

「ほら、怖いんだろう」

その背を安心させるように叩きながら、佐々木は苦笑交じりに言った。

「泣くって行為は恐怖をやわらげるんだぜ。やってみなよ
結構すっきりするから」

「だめよ」

否定の声は、しかし小さく弱弱しかった。

「ママとの約束を破っちゃ駄目。絶対にダメ」

「カリフォルニアでは子供に一人で留守番をさせておくと虐待になるんだっけ」

「……ちがうの、ママはその日すぐに帰ってくるはずだったのでもお友達とのおしゃべりが楽しくて、天気も崩れて、だから帰って来れなくて」

「なんだ、ママもハーカー先生との約束を破ったんじゃないか」

佐々木の言葉に、ミナが息を飲む気配がした。

「だったら先生も約束を破っちゃいなよ。これでおあいこだ」

いたずらをけしかける子供のような口調で、佐々木は言葉が続ける。

「先に約束を破ったのは先生のママだ。悪いのはママなんだよ」

「でも、でも」

ミナは激しく首を振った。

「約束を破られても、いいえ、どんな事をされても

私はママを許さなきゃいけないの。それが親に捨てられるような子供を

育ててくれたママへの恩返しなの。A君……貴方だって許したんでしょ

自分を殺そうとした御両親を。だから、だから私も許さなきゃいけないのよ」

苦しげな、心の奥底から絞り出すような声でそう言って、さらに呪文のように

許さなきゃ、と小声で繰り返すミナの耳元で、佐々木はそつと告げた。

「俺は、両親を許していない」

続く。

第二十四話 号泣

「嘘……」

呆然としたような声で呟くミナに、佐々木は続ける。

「本当だ。俺は入院中に取材を受けた記憶なんかない。

それどころか、退院してから今日まで、二人の墓にすら行ったことがないよ。

妻の骨をペンダントにしたのは、彼女を両親と同じ場所に入れる事が耐えられなかったからだ」

「そんな」

雷はとつくに鳴りやんだのに、ミナの体は震え続けている。

「新聞記事のA君は、記者が作り上げた架空の子供なんだよ」

「でも私……私は」

「A君じゃないけれど、同じ国に生まれて同じように
実の親に必要ないと思われた俺が、断言するよ」

再度ミナの耳元で、佐々木は優しく囁く。

「ハーカー先生は悪くない。よく頑張ったね。

もう、我慢しなくていいよ」

返事はない。

暗い部屋の中、聞こえるのは雨音だけ。

そこに、もう一つ別の音が混じり始める。

押し殺した、途切れ途切れの鳴咽。

最初は微かだったそれは、少しづつ大きくなっていった。

「ごめんなさい、ママ。ごめんなさい」

二つの言葉を繰り返しながら、ミナは小さい子供のように泣きじゃくった。

その体を毛布越しに抱きしめながら

佐々木は二つの言葉の先にある声にならない言葉を聴く。

ママ、ごめんなさい。貴方の望むような子供になれなくて

ママ、ごめんなさい。でも私、貴方に愛して欲しかった。

ママ、ごめんなさい。ありのままの私をしっかりと見て欲しかった。ママ、ごめんなさい。でも、でも、でも

「生きていても、いいですか？」

ああ、と佐々木はミナの問いに小さな呟きを洩らす。

自分も何度、同じ事を心の中で問い続けただろう。

親に捨てられた子供でも、

親に殺されかけた子供でも、

親の望むような理想な子供になれなかった子供でも、

愛しい人を救えなかった子供でも

……この世界に、生きていてもいいですか……

誰に尋ねているのだろう。

でも、問わずにはいられない。誰かが言葉以外の何かで答えてくれるまで。

「先生の人生は、先生だけのものだよ」

子供のように小さな手で、赤ん坊をあやすようにミナの背中を軽く叩きながら

佐々木は泣き続ける彼女に話しかける。

「生も死も、決めるのは自分自身だ。でも」

「でも」

涙でくしゃくしゃになった顔が佐々木を見上げる。

化粧もはげ落ちて、髪も乱れているのに今まで見たどんな彼女よりも美しいと思うのはなぜだろう。

「俺は見たいんだ。親に愛に恵まれなかった子供でも

立派に生きて幸せになれた実例を。先生が見せてくれない？」

「ありがとう」

しゃくりあげながらそう言って、またミナは佐々木の胸の中にも毛布越しに

顔をうずめて嗚咽を漏らす。

「気がすむまで、泣いていいよ」

随分長い間、我慢していたんだから。
そう言って佐々木はもう一度ミナを抱きしめた。

※

「ああ、王先生。いい所で会ったわ。毛布の予備は何処にあったかしら」

院長にのんびりと呼びとめられ、王はどうしてですかと問い返した。
「今さっきの雷で不安になった患者さんでもいるんですか？」

「いいえ。とても疲れているらしいドクターが二人、いるだけよ」
いたずらっぽい顔をした院長の答えに、王は訳が分からなくなった。
「どういう、ことですか」

「旧館の五階に毛布を持ってきてくれるかしら」

「は、はあ」

王が数分後、毛布を片手にそこに行く

院長が今は物置になっている古いカウンセリングルームの扉を
細く開けて中を覗き込んでいた。
なぜか中に明かりがついている。

「あの、院長先生」

「覗いてごらんさい、ただしそうつとね」

そう言って脇にどいた院長のかわって王が部屋の中を覗くと
古い長椅子に座り、抱き合ったような姿勢のまま
眠っている同僚と従姉妹の姿が見えた。

「……姿が見えないと思ったら!!」

「しい」

ぽっちゃりとした指を院長は自分の唇にあてる。

「今、皆は忙しいかしら」

「い、いいえ」

首を振った王に、院長はにこりと笑った。

「じゃあもう少しだけ寝かせておいてあげましょう。」

風邪をひくといけないから佐々木先生に毛布をかけてあげてね。

これはお礼よ」

油染みの浮いた紙袋を手渡して去っていく院長を、王はため息と共に見送った。そして、

「あーあ。無邪気な顔しちゃって」

苦笑しながら呟いて眠る佐々木に毛布をかける。

「……しかし、妬けるぜ。これは」

二人がこんな所にいたのは、多分ミナのカウンセリングの為だろうがなぜ毛布こしとはいえ、抱き合ったような格好でしかも眠っているのだろう。

「ミナだけでも、起こすかな」

ぼそりと呟いてそっと毛布の中の従姉妹の顔を覗き込んで王ははっとした。

頬にくっきりと涙の痕を残しながらも、その表情はとても穏やかだ。こんな顔をしたミナは、最近ずっと見た事がなかった。

「ちくしょう、なにやったんだよ。ブラックジャック」

ほんの少しだけ悔しさをにじませて呟くと、王は足音を忍ばせてそっと部屋を出て行った。

第二十五話 感情

「まったく、本当にどんな魔法を使ったんだブラックジャックは」
「だから何度も言っているだろう。自然の、雷のお陰なんだ」

もうすっかり勤務時間後に籠る事が定例になってしまった
カウンセリングルーム。一か月前の雷雨の日の出来事を、
事あることからかい半分とはいえしきりに感心する王に、
佐々木は少々呆れながら、同じ答えを繰り返す。

「「恐怖」という感情がハーカー先生の理性の鎖を緩めたんだ」
「それだけじゃないだろう、A君の「親を赦していない」

これがラクダの背を折る一本のわらになったんだな」

「大げさな、俺はきっかけを与えただけだよ。」

心の奥底に押し込んでいた感情をあふれさせる、ね」

「よく言うぜ」

王は大きくため息をつく。

「お前だから出来たんだ」

「そんな事はないよ、で、その後ハーカー先生の様子はどうか？」

「なんだ、一緒に抱き合って眠っていたのにそんな事、

直接本人に聞けばいいだろう」

「王！！」

流石に顔を赤くして声を荒げた佐々木に、王はすまん、と
謝りながらもにやにやと笑い続ける。

あの時、なぜ二人して眠ってしまったのか何度考えても判らない
ただ、停電が復旧して部屋の明かりの眩しさに目覚めた時
佐々木は慌ててミナ離れながらも、不思議な安堵感が心を満たして
いるのを

感じていた。ふと彼女を見ると真っ赤な顔でそっぽを向かれたが
その表情はとても穏やかだった。

「で、どうなんだ」

唯一つの失敗は、眠りこけている所を院長と王に見られた事だろう。

「まあ、こんな所かな」

再度の問いに、王は割り箸が入ったビニル袋を顔の前に掲げて見せた。

「随分減ったな。以前の三分の一くらいか」

佐々木の言葉に王は頷く。割り箸の数の減少は、イコールミナの苛立ちとストレスの減少だ。あの日以来ミナはカウンセリングで少しづつではあるが母への不満や怒りを口にできるようになってきた。

「それに、すごい事がこの間起こったんだ」

「へえ、どんな」

「電話でだけど、ミナが叔母に口答えした」

「……そうか」

反抗は自立への第一歩だ。

ミナの中で冒し難い偉大な存在であった「母の像」が崩れつつある。これから一山も二山もあるだろうが、母に一度でも逆らう事が出来たなら、彼女の嗜癖行為は適切な心理療法でよくなっていくだろう。

「そろそろ自助グループを勧めてみようかな」

「それがいいだろう。ミナも多分自分の過去を客観的に振り返れるようになっていくはずだ」

「……よかった」

淡い微笑を浮かべる佐々木に、王もまた頷く

「ブラックジャックは2回、ミナを救ったんだな。ありがとう」

「救ったなんて大げさな。新聞記事のA君の事も今回の事も

ハーカー先生自身の心の葛藤の結果だよ。生きる為に自己を歪ませるのも

それに気づいて、抜け出そうとするのも、結局は先生の決心一つなんだ

俺はそれをほんの少し手助けしたに過ぎない」

そう言ったとたん、王の手がまたいつものように佐々木の長い髪をぐしゃぐしゃとかきまわした。

「褒められたら素直に喜べ。本当にかわいくないなお前は」

「君に可愛いなんて言われてもな。それに褒められるのは苦手なんだ、なんだか体中がかゆくなる」

王の手がぴたりと止まった。

「なあ、佐々木」

再び対面の椅子に腰を下ろした王の表情はひどく真剣だった。

「どうしてお前はそんなに自分の感情を怖がるんだ？」

「怖がる、俺が？」

いぶかしげな問い返しに、王はもう一度大きく頷く。

「褒められたら嬉しいだろう。それをお前は「かゆみ」を

感じる事で打ち消している。それに以前に聞いた、奥さんの死後まともに食事も睡眠もとらずに勉強に没頭した件といい

佐々木は自分の喜怒哀楽を感じる事を恐れているようにしか思えない」

「そんなことないよ」

佐々木は首を振った。

「ハーカー先生にペンダントを捨てられたと思った瞬間に先生を思い切り殴ったんだぜ。怒りにまかせて」

「40度近い熱が出ていたんだろう。思考力だって

大分鈍っていただろうし、先日のミナと同じだ。

熱が理性の籬を緩めたんだ」

「……そうかな」

「あくまで憶測だが、間違っではないと思うぜ。

何かがお前の心にストップパーをかけているんだ。

そしてそれは、「ごめんなさい」という言葉を

怖がる事とも繋がっているんじゃないか。その、

佐々木の失った記憶の中で」

「憶測で全てを決めつけないでくれ。

妻の事と両親の事は全く無関係だ。俺は

虐待の事実を知らながら妻を救えなかった罪悪感を

ずっと引きずっているんだよ」

「そこまでわかつているなら、なぜ身体症状が軽減しない

投薬に認知療法を組み合わせてもう二カ月だぜ」

「……」

佐々木は言葉に詰まった。

「しかも性的虐待を受けた黒い髪の女性、だけじゃなくて

ミナに抱きつかれた時も過呼吸をおこしそうになったんだろう。

しかも相変わらず「ごめんなさい」と書いた遺書を読むシーンを思い出すと

酷い発作が出る。これは原因が別にあると思う方が普通だろう」

「でも俺は、両親の事なんか何も覚えていないんだ。写真がなければ顔だって忘れていた」

「じゃあなんでそんな状態で、両親を赦していない。記憶がなくて両親の何にそんなに怒っているんだ」

「殺されかけたんだぞ」

両手をテーブルに叩きつけて、佐々木は声を荒げた。

「おまけにこんな傷痕まで……。これのお陰でどれほど苦労したか。記憶がなくても許せなくて当然だ」

「ほら、両親の事は怒れるんだな。お前は

奥さんを失った悲しみを外に出せるまで長いカウンセリングが必要だったのに」

「……」

佐々木ははっとしてじん、としびれた自分の両手をぎゅっと握りしめた。

「佐々木」

その姿をじっと見つめながら王は再び口を開く

「辛いだろうけれど、もう一度思い出してみないか。

御両親と、事件の事を」

続く

第二十六話 諦観

「王、それは時間の無駄だよ」

その提案に、佐々木は珍しくきっぱりと首を振った。

「何度治療を受けても駄目だったんだ。

それに、これだけ長い間君に治療をしてもらっても回復の兆しがないのなら

院長のおっしゃる通り転科を考えた方がいい。

専門医の資格を取る前に発覚して良かった。この年ならまだ他の科で研修医からやり直せる」

「ふざけるな!!」

今度は王が思い切り両手をテーブルに叩きつけた。

派手な音をたててカルテを挟んだバインダーが床に落ちる。

「この三年、ブラックジャックがどれだけ努力していたか

見ていなかったと思うのか。勤務と勉強の合間を

ぬって英語を習得するだけでも苦労しただろうに、

一年もたったらお前はすっかり患者さん達との

コミュニケーションもとれるようになっていた。

『佐々木先生に診てほしい』俺は何度この言葉を聞いたと思う？

俺は恋敵としてだけじゃなく、同僚としてお前にどれだけ嫉妬したか」

「ごめん」

うつむいてぼそりと謝る佐々木。

その白衣の襟元を王は乱暴に掴み、力任せに揺さぶりながら怒鳴った。

「だからなんで謝るんだ。なんでそんなにあきらめが早いんだ。

俺に対して怒れよ。どれだけ自分を蔑ろにすれば気がすむんだ、佐々木は」

「……放せ……王、苦しい……」

身長が頭一つ違う為、首をつったような状態になってしまった佐々木の

切れ切れの言葉に、王はハッとして手を離す。

床に膝をついて激しくせき込む佐々木に、王は悪かったと呟くように謝った。

「患者が思い通りにならないからと、暴力をふるうな。俺じゃなかったら大問題だぞ」

「だから悪かったと言っているだろう。だがな、

院長が定めた期日まであと一カ月ある。ありとあらゆる方法を試しても

お前を治す。俺は諦めない、諦めてたまるか」

叩きつけるようにそう言って足音荒く部屋を出ていく王。

それが完全に聞こえなくなるまで、佐々木はただ部屋の中に立ちつくしている事しか出来なかった。

※

「感謝祭おめでとう」

そんな挨拶があちこちで交わされるようになった季節。

王に最後のカウンセリングを受けてから一週間が過ぎて

院長から申し渡された期日まで一月を切った。

あの日から佐々木は王の治療の誘いを色々な理由をつけて断り続けている。

ハロウインのカボチャはいつのまにか片付けられ

かわりに色とりどりのトウモロコシやキャンドルが飾られていく。

11月の第4木曜日に設定された感謝祭は、家族が集まりすべての物に

感謝するという、クリスマスについてアメリカでは大切にされている行事だ。

しかし家族もおらず、さらに日本人の佐々木にとっては今一実感が
わかず

気がついたらその日を迎えていた。

「よかったら、うちに来ないか。一人じゃ寂しいだろう」

王の誘いを

「家族で過ごす日なんだろう、俺が行ったら邪魔だよ」

と苦笑して断ると、彼は珍しく深くうつむいたまま再度口を開いた。

「なあ、あの時は暴力を振るって本当に悪かった、だから

その、諦めるなよ。まだ時間はある」

その髪をいつも自分がされているようにぐしゃぐしゃとかきまわして
佐々木は唯、ありがとう、とだけ言って医局を出た。

「宿直以外は今日は定時で帰りなさい」

という院長の命令だ。

外来も休みで、入院患者も症状の軽い者は外泊を許される。

いつもは賑やかな病室が今日はしんと静まりかえっていた。

……宿直、申し出ればよかったな……

日本で言えば大晦日のような浮き足立つ空気の中を帰りながら、

佐々木は思う。だが、王の治療を受けない口実として三日連続宿直を
こなした直後だった。

主だった商店はすべてシャッターが下ろされている。

今日は家族で食卓を囲むのが何よりも優先される。そして明日から
一斉にセールが始まり、クリスマス商戦の幕が開くのだ。

アメリカが1年で最も楽しげな空気に染まる、時期。

「よかった、開いていた」

そんな中でも行きつけのセルフレストランは店を開けていた。

佐々木はほっとして、いつものベーグルサンドを注文すると

「感謝祭、おめでとう。これおまけ」

と店主がいつもの表情で、ビニル袋の中にサンドイッチと一緒に
かぼちゃのパイを入れてくれた。

家に帰ってもまだ夕飯時には間があったので、

メールチェックでもしようと久々にパソコンを立ち上げる

ディスプレイに記された「HAPPY BIRTHDAY」の文字で
そういえば、今日が誕生日であったことを思い出した。

……すっかり忘れていた……

祝ってもらった記憶はあまりない。

久代小母さんと暮らしていた数年間、

小さなケーキに蝋燭を立ててもらったただけだ。

妻とは「今年は過ぎちゃったけど来年は一緒にお祝いしましょう」と約束をしたが、ついに果たされることはなかった。

四〇〇通以上来ていたメールもほとんどがスパムで

纏めてゴミ箱に放り込む。これで、することがなくなった。

「掃除でも、しようかな」

部屋中にうつすらと積もったほこりを見て、佐々木は呟いた。

少し寒い窓を開け、小さなモップで家具に積もったほこりを払う。

「……あ」

棚の一番上を背伸びして拭いていた時、モップの柄に引っかかったらしく

重要だがめったに使わない書類を挟んだバインダーが床に落ちた。

散らばったアパートの契約書や医師免許を拾い集めていると、

その中に古ぼけた写真があった。

何処かの観光地で取ったらしいそれに写っている

どことなく自分に似ている男女。自分の姿は、ない。

自分を殺そうとした父と母。

ことさら乱暴に写真をバインダーに突っ込むと

モップを放り出して、ベッドに倒れ込んだ。

ぐしゃりと髪の中に手を突っ込んでゆっくりと

記憶をさかのぼって見る。

研修医として昔患者だった病院で働いていた頃

医学生で勉強と剣道に励んでいた頃、

妻の死を忘れようと勉強に没頭していたころ。

人生で一番楽しかった妻と過ごした日々

そして、久代小母さんと暮らしていた記憶

さらに、病院で包帯を取って顔にこの傷痕を認めた瞬間。

その前は……

「だめだ」

呻くような呟きが口から漏れる。

どれほど考えても、何も思い出せない。あの日何が起こったのか
それ以前はどんな暮らしをしていたのか。全ては闇の中だ。

「繭、俺はどうしたらいいんだろう」

胸元のネックレスを弄びながら尋ねる。

古い携帯電話が鳴りだしはしないかと耳を澄ませていたが
いつまでたってもその気配はなかった。

そのかわり、少し不明瞭な音で呼び鈴が鳴った。

この時分、尋ねてくる知人などいない。

教会からの寄付の催促だろうか。

いぶかりながら、ドア越しに

「どちら様ですか」

と問いかける。

「ハーカーだけど、よかったら開けてくれない？」

「先生？」

慌てて開けたドアの向こうには、大きな袋をぶら下げた
女医の姿があった。

続く

第二十七話 晚餐

「約束はまだ有効？ 割り箸も持ってきたし

今日だけは大目に見てくれたらすごくうれしいんだけど」

笑みを浮かべようとして失敗した表情で早口に言いきったミナに、佐々木は少し驚きながらも

「いいよ、どうぞ」

と彼女を招き入れた。

「お母さんと過ごさなくていいの？」

「その、つもりだったわ」

ミナの一瞬だけ浮かべた寂しそうな表情は、すぐに佐々木が一番見慣れた、暴言を吐く寸前の攻撃的なそれになる。

「でも帰る途中で電話で母と大喧嘩して、もう帰ってくるなと言われちゃったわ。望むところと思ったんだけど、

感謝祭の料理を買っていた事を、電話を切った後で思い出したのよね。

一人じゃ食べきれないし、捨てるのももったいないし、よかったら、手伝ってくれない？ 夕飯まだでしょう」

「ああ、そう言う事だったら喜んで付き合うよ」

苦笑しながらも佐々木は頷いた。

「よかった、断られたら陰月の家に行くつもりだったけど

いくら親しいとはいえ、感謝祭に他人の家の食卓にお邪魔するのは気がひけるわ」

「……」

僅かな間とはいえ、『家族』の一員として迎えられた家庭を

「他人」と言ったミナの心中を思うと佐々木は胸が痛んだ。

「あ、そうだ。私に言われても嬉しくないでしょうけど」

そこで一度言葉を切り、ミナは照れたように頬を紅潮させて

「誕生日おめでとう」

と続けた。

「知っていたの？」

驚く佐々木に、ミナは小さく頷く。

「一応ね。プレゼントまでは用意してないわよ」

「今更欲しがらなくてもいいよ」

もう一度苦笑を浮かべた佐々木を、ミナは軽く睨んだ。

「嘘でも残念だというものよ。がっかりするじゃない」

「なら、先生も『私に言われても嬉しくない』なんて言わないでよ。俺はともうれしかったよ」

返された答えに、ミナがますます頬を赤くする。

「どうしたの？ 顔が赤いよ、風邪？」

「……ばか、料理を並べるわ、手伝って」

「う、うん」

なんで馬鹿と言われなければいけないんだろうと

内心で首をかしげながら、佐々木はミナが紙袋から取り出した

ミモザ色のテーブルクロスを受け取った。鮮やかなそれに

室内の明るさが増す。

かぼちゃのパイに、ハーフサイズのシチメンチョウ、そして

トウモロコシの粉で作られた薄パン。

一人では広すぎるテーブルに次々と並べられていく美味しそうな料理の中で

一番端にぽつんと置かれた割り箸の入った袋だけが違和感をはなっていた。

「まだ、自信がないの。目の届く所に置いておいてもいい？」

「かまわないよ、遠慮なくへし折って。」

バトワイザーなら買い置きがあるけれど、飲む？」

佐々木の言葉にミナは少し考え、首を振る。

「やめておくわ。お水があったらもらえるかしら」

「じゃあ俺もやめておくよ、ペリエがあるからそれでいい？」

「ええ、ありがとう」

前には考えられなかった穏やかな会話。

笑みを交わし合いながら二人は食卓に着いた。

このテーブルで誰かと一緒に食事をするのは初めてだ。

「今日は食べる前に感謝するの。誰でもいいから」

「そう、じゃあ。ご馳走を持ってきてくれたハーカー先生に。感謝を」

そう言って「いただきます」と両手を合わせた佐々木に

ミナは「日本の風習？」と尋ねる。

「そうだよ、食べ物に感謝するんだ」

「素敵ね。生まれた国に誇りを持ってそう。」

私を治してくれた佐々木先生に、感謝を」

ミナがさらりと続けた言葉に、佐々木は顔が熱くなった。

「喧嘩の原因を、聞いてもいいかな」

佐々木が遠慮がちに尋ねたのは、料理があらかたなくなつて、程良くお腹が満たされた頃。

「母が、結婚しろって言ったのよ」

口元にこそ寂しそうな笑みを浮かべていたがいつものようにきびきびとした口調でミナは答える。

「それはまた、急な話だね」

「そして、仕事を辞めて家庭に入って子供を産めですって。今まで散々自立しろ、手に職をつけろっていつておいて今更よね」

「うん、それに相手がいらないとどうしようもないだろう

……、まさか、王としろってこと？」

ミナは首を振った。

「母は実家、……王の家を嫌っているからそれはないのよ。」

義父の部下にいい人がいるんですって。十も年上の、笑っちゃうわなるほど、その手で来たか。

と佐々木は思った。

自分の意のままだった娘が急に反抗するようになって

母親はさらに娘をかんじがらめに縛りつけようと考えたのだ。

その為に、娘は未知であり、自分は知りつくした領域

「妻として母として夫を支える家庭」に娘を引きずりこみたい。

その上でアドバイスという名の命令を出し続ける。恐らく、一生。

「ハーカー先生は、どうしたいの？」

佐々木は尋ねた。二か月前のミナだったら不満があっても

それを押し殺して母の言うとおりにしただろう。だが、今はきつと。

「私は仕事を辞めるつもりはないわ。それに結婚なんて今は考えられない」

「それで喧嘩したんだね」

予想通りの答えに、佐々木は安堵する。もうミナは母親の操り人形ではない。

自分の意思をちゃんと言葉にできるようになった。

でもね」

ちょっとひどいいたずらをしてしまって、叱られるのをまつような子供の表情で、ミナは続ける。

「これで、いいのかしら。母を。専業主婦でずっと私を育てた母を裏切ってしまったような気がするの」

「ハーカー先生の人生は、ハーカー先生だけの人生だよ」

ナイフとフォークを置いて、佐々木は穏やかに語りかける。

「お母さんが笑っていても、その下で貴方が泣いていてはどうしようもない。と俺は思う」

「そうよね、ありがとう。ずっと迷っていたの。」

ここに来てよかった。」

そう言って今度は晴れ晴れとした笑顔を見せたミナに

佐々木もまた、嬉しくなった

続く

第二十八話 解除

「佐々木先生の方はどう？病状は好転した？」

ひとしきり笑い合った後、ミナに問われて佐々木は返事をするかわりに

テーブルに視線を落とした。

「あまり、よくないの？」

「……実は、転科を考えているんだ」
「え？」

驚くミナに、佐々木は微かに苦笑する。

「二カ月、投薬と認知療法を組み合わせた治療を受けたけれどあまり効果がないんだ。このままだったらと時間を無駄にするより思い切って違う科で一からやり直した方がいいような気がする」

「陰月は、何と言っているの？」

「俺の欠落した記憶の中に原因があると思っていてみたいんだけど、同じ精神科医として、俺はそれに賛同できないよ。

フラッシュバックした記憶は妻との別れのものだったし、

パニック障害の三分の一は明確な原因が特定できないんだ」

「先生はそれでいいの？」

ミナの再度の問いに、佐々木は黙り込む。

「留学までしたのに、そんなに簡単に志を諦めて後悔しない？」

「……仕方ないんだ」

自分に言い聞かせるように、佐々木は言った。

「いつ発作が出るか判らない状態で患者を診ることはできない。治る保証もない、だから……」

「先生が決めた事に私が口を挟む権利はないわ、でも」

そう言ってミナはアーモンド形の美しい瞳で佐々木を見つめる。

「私は一人の患者として、先生にはこれからも精神科医でいてほしいと

思うわ。そして多分、同じ思いを抱いている患者さんは大勢いる」

「ありがとう」

その目を見返す事が出来ずに、うつむいたまま佐々木は口の中で呟いた。

「誕生日にケーキを焼いてくれたこと、大学に合格したお祝に私の大好きな花を

家じゅうに飾ってくれたこと、好きな絵本を眠るまでずっと読んでくれたこと

熱を出した時、一晩中看病してくれたこと」

突然指を折りながら、唄うようにミナは言いだす。

「ハーカー先生？」

「ママが私にしてくれた、嬉しかったこと」

答えてミナは泣き笑いのような表情を佐々木に向けた。

「先生から見ればママは私の病理の原因で、酷い人、なのかもしれないけれど

それでもママは私に沢山のいい思い出を作ってくれたわ」

「そうなんだ」

そういえば、妻にも似たような事を言われたと佐々木は思う。

「だから、佐々木先生の失ってしまった記憶の中にもいい思い出はきっとあると思うの」

「……」

ミナの言葉に佐々木は無言のまま頬の傷痕に指を這わせる。

「佐々木先生の御両親の行為は決して許される物ではないけれど、先生を同じ世界に連れて行こうとした位、御両親は先生を愛していたと思うわ

本当に要らない子供だったら」

語尾が微かに震えると同時に、アーモンド形の瞳から涙が零れおちた。

「私のように、生まれた時に捨てられているわ」

「ハーカー、先生」

「ごめんなさい」

戸惑う佐々木にミナは謝る。

「だから、失った記憶を怖がり過ぎないで。きっと思い出して良かったと

思える事もあるはずだから。そこに先生の病の原因があるかもしれないなら

もう少しだけ頑張ってみて、最後まであきらめないで。お願い」

「ありがとう」

胸に満ちる感情を上手く言葉にすることが出来なくて、

佐々木は唯それだけを言った。

「ごめんなさい、せっかくの感謝祭なのに私変なことばかり言っているわ」

「そんなことないよ、俺は、その、上手く言えないけれどすぐく、そう、すぐく嬉しかった」

十年前妻と過ごした短い間に同じような思いを何度も抱き、もう二度と抱くことはないと思い込んでいた。

「本当に？」

涙でぬれたミナの顔に笑みが浮かぶ。

つられるように佐々木の顔にも笑みが浮かんだ。

「俺、すぐく大きなプレゼントをもらった気分だよ」

「そう、じゃあせっかくだからこれもやりましょうよ、ケーキじゃなくて申し訳ないけれど」

重くなった空気を吹き飛ばすように、明るく言いながらミナはかぼちゃのパイに蝋燭をたてる。

「この年でこんなことをするなんて、照れるな」

「いいのよ、お祝なんだから。電気を消すわよ」

暗くなった室内に、蝋燭の炎だけがぼんやりと浮かびあがる。オレンジ色の暖かい光を見つめているうちに、ふと佐々木は記憶の底に同じような光景を見つけた。

久代小母さんと誕生日を祝った時のものだろうか？

「蠟燭を吹き消す時に、願い事をするのよ」

……ろうそくをふーするときに、お願い事をしてごらん。
きつと神様が叶えてくれるから……

ミナの声に、別の声が重なる。久代ではなくもつと若い
そして懐かしく優しい声。

蠟燭のほの暗い明かりの中に、童話のように懐かしい顔が浮かんで
見える。

写真の中のかしこまった笑顔とは違い、優しそうに嬉しそうに
自分に向かって微笑みかけるこの二人は。

「……お父さん、お母さん……」

「佐々木先生？」

虚空を見つめて呟いた佐々木に、ミナが心配そうに声をかける。

「誕生日を、祝ってくれたことがあったんだ」

「どうしたの？大丈夫？」

「うん」

佐々木は小さくうなずいた。

もっと冷たく殺伐としたものだと思っていた忘却した記憶。

だが、今胸を満たすのは羊水に似たほの温かい思い。

「思いだしたんだ、両親が誕生日を祝ってくれた時の事を」

子供の目にはとても大きく見えたケーキ。

蠟燭を吹き消す自分を笑顔で見守っていた両親。

消えた瞬間に二人が拍手をして……。

探して探して、探し疲れて

一体何を探しているのか忘れてしまった大切な物を

ふと、部屋の片隅で見つけたら、こんな気分になるんだろうか。

「本当に？よかったわね」

うん、ともう一度頷いて佐々木は蠟燭を吹き消した。

第二十九話 回想

「思い出してみれば、俺の両親はそう酷い人達でもなかったよ」
2週間ぶりのカウンセリングルーム。小さなテーブルを挟んで
向かい合い、黙って耳を傾ける王に佐々木は語る。

どこからか微かにクリスマスソングが聞こえる。感謝祭から一週間
が過ぎて

世間はクリスマス一色だ。そして、院長が定めた期限も残りわずか。
「母は自分なりに精いっぱい子育てをしていたんだろう、な」

今から二十年以上昔の話。まだ日本経済が右肩上がりの成長を続け、
既婚男性は家庭よりも仕事を優先させることが当たり前で、
女性は結婚したら家庭に入ることが暗黙の了解であった時代。

そして、昔ながらの「地域社会」が音もなく崩壊しつつありながら、
誰も

その重大さに気付いていなかった時代。

両親を早くに亡くし、父と結婚して故郷の町にやってきた母は
頼る人も、知り合いもない場所での子育てに不安と寂しさを抱え
ていたのだろう。

伴侶だった父は仕事に忙殺される毎日。

「母が新興宗教にのめり込んでいった時の気持ちだが、今なら少しわ
かるよ」

ほの暗い笑みを浮かべながら佐々木は言った。もし、母が宗教と出
逢わなかったら

ミナの義母のように、全力で子供に依存していたかもしれない。

繰り返される多額の寄付と、奉仕活動という名目での長時間の外出。
家事がおろそかになった家の中は荒れていき、

両親は顔を見合わせる度に諍いを繰り返した。

「両親が離婚しなかったのは、時代のせいと俺がいたからだろうな」
それでも、

「ごめんね、いい子でお留守番をしていて」

抱きしめてくれながら、後ろも振り返らずに家を出て行く母親。

「ごめんね。寂しいだろう」

頭をなでてくれながら、終電間際までの残業をやめようとしなない父親。

「そんな両親を見て、俺は子供だったけどまるで波打ち際に造り捨てられた砂の城が

ゆっくりと崩れていくように、自分の家が壊れていつているのは判っていたよ」

だが、子供だった佐々木が出来ることは、

薄暗く冷え切った家の中で二人の帰りを待つ事だけだった。

「父親も仕事に逃げ込む事で、現実から目を背けていたんだな。

だから貯金を使いこまれて、現実と向かい合わざるを得なくなった時あんな行動をとったのか」

「いや」

王の言葉に佐々木は首を振る。

「父親が無理心中をするきっかけを作ったのは、俺なんだ」

あれは今日のように、クリスマスが間近に迫った冬の日の事。

珍しく父親が残業なしで家に帰ってきて、母親も奉仕活動がなく久しぶりに家族で食卓を囲んだ。

それだけの事が本当にうれしかったことを、今の佐々木ははつきりと

思い出す事が出来た。

「ねえ、お母さん明後日の参観日、国語だけどクリスマスの劇をやるんだ

きてくれるよね」

「ごめんね、明後日は昼から奉仕活動があるのいつものように

先生には連絡をしておくから、我慢してね」

困ったような笑みを浮かべた母の答えに、舞い上がっていた気持ちがいしゅんと萎んだ。

「でも、今年最後なんだよ。一生懸命練習もして友達のお母さんたちは

皆見に来てくれるんだよ」

「ごめんなさいね、でもお母さんは皆の幸せを願って活動しているの。

それは参観日に行くよりもずっと意義があって尊いことなのよ、だから我慢してね」

いつも佐々木に何かを諦めさせる時に繰り返される同じ文句の言い訳。

「いつもならそれで無理やり納得させられるんだけど、その日に限って

無性に腹が立った」

両頬の傷痕がじくじくと痛みだす。そこにやはり酷い傷跡が残る手を当てる

佐々木は話を続けた。

「嫌だ、お母さんはいつもそう言うけれど、僕はお母さんが奉仕活動をしていても

ちっとも幸せじゃないよ。来てよ、友達のお母さんと同じようにしてよ」

幼児のように痙攣を起した佐々木に、母親は声を荒げる。

「なんてことを言うの。他の会員のお子さんはみんな笑顔でお母さんを送り出しているのに」

「おい、授業参観くらい行ってやれよ。」

黙ってビールを飲んでいた父親が口を出すと、母の苛立ちはそちらに向けられた

貴方だって家のことは何もしてくれないじゃない。こんな時だけ父親面しないで。

誰が稼いで食わしていると思っているんだ。それに教育のことはお前に任せたといっているだろう。

徐々に激しさを増していく二人ののしり合いに、佐々木は慌てて

ごめんなさい、と繰り返した。だが、それに二人は気付く風もなく、やがて父親が足音も荒く物置から日曜大工に使っていた鉋を取ってくると

母が朝晩熱心に拝んでいる「神像」に向かってそれを振りあげた。

「こんなものがあるから悪いんだ」

目を血走らせ、大声を上げる父親。

叫び声を上げて、神像に覆いかぶさる母親。

その後頭部に振り下ろされる分厚い刃。

濁った悲鳴と共に天井まで吹き上がる血しぶき。

そのすべてを佐々木は瞬きすることもできずにただ、見つめていた。生温かい返り血を浴びて、父親も悲鳴を上げてナタを放り出す。

「ひ、兵衛」

全身を真っ赤に染めた母親が、片手に神像を抱えて佐々木にしがみつく。

「ごめんね……ごめんね。……様、許して下さい」

信じる神の名と謝罪をくりかえす声が、少しずつ小さくなっていく

「ごめん……なさい」

やがて母親の身体から力が抜けた。

「お母さん？」

震える声に答えはない。

「お母さん、しっかりして、お母さん」

狂ったように問いかける佐々木の前に

いつのまにか父親がナタを片手に立っていた。

「お父さん？」

「ごめんな。兵衛」

いつものように大きな手が佐々木の頭をなでる。

「お父さん？」

答えはない。ナタを握り締めたもう片方の手がゆっくりと振りあげられた。

「いっしょに、お母さんのところに行こう」

次の瞬間に顔に凄まじい衝撃が奔り、視界が真っ赤に染まった。一体何が起きたのか判らないまま、悲鳴だけが口から迸る。

「ごめんな、ごめんな」

父親の声と一緒に身体にも同じような衝撃が奔り、それは激痛へと変わっていった。

ぬるぬるする暖かい物が全身を覆っていき、鼓動の音が煩いくらいに耳の中に響く。

「痛いよ、痛いよ、痛いよ」

床に倒れてのたうちまわり、どのくらいの時間が過ぎたか紅く染まった視界の中に、椅子に登ってロープを首にかける父親の姿が写った。

「ごめんなさい」

その言葉と一緒に父親の足が椅子から離れた瞬間幼かった佐々木の「家庭」という名の世界は崩壊した。

続く

第三十話 赦宥

「よく、思い出せたな」

硬い表情の王に、佐々木は口元に苦笑の欠片を浮かべる。

「記憶はみなどこかで繋がっているものだろう、

一つを思い出したら、後は海から網を引き揚げているような感じだったよ。」

大丈夫か、顔色がよくないけれど？」

首を傾げた佐々木に、王は両手で顔を覆って首を振る。

「患者のお前が言うなよ。大丈夫だ、と言いたところだが

……すまない、悲惨な話には慣れているはずなんだが、友人の経験となると

話は別だな。佐々木は？大丈夫なのか」

「思い出すのに手いっぱい、

まだ感情が追い付いていないといった感じだ。

これからどうなるかは判らないけれど」

「佐々木が「ごめんなさい」という言葉を恐れ、自分の感情を抑さえつけていた理由がこれで判ったよ」

と王は開いたカルテを芯をひっこめたボールペンの先でつつきながら話を続ける。

「「ごめんなさい」は両親の最後の言葉、そして子供だったお前は自分の癩癩のせいで事件が起こったと思い込んだ」

「……ハーカー先生と似ているな」

「離婚と心中じゃ受けたストレスの桁が違いすぎるだろう」

王はため息をついた。

「解離性健忘が起きて当たり前だし、それが佐々木をある意味救ったんだ」

十歳の子供が受け止めるには重すぎる現実。

精神の崩壊を防ぐために脳が作り出したパンドラの箱。

だが記憶はそこに封じ込められても、感情までは忘れ去ることが出来なかった。

自分の激情が事態を引き起こしたという、罪悪感。

目の前で死んだ両親の最後の言葉「ごめんなさい」に対する恐怖。そして、

「俺が怒り続けていたのは、両親じゃなくて自分自身だったんだ」
ごめんなさい、僕のせいでお父さんはお母さんを殺して自殺しました。

ごめんなさい、僕はもう感情を現わしたりしません。一生僕は僕を許しません。

……だから、この現実が夢であって下さい……
ずっと叫んでいた。暗黒のパンドラの底で、子供の時のままの自分は。

両親への謝罪と自分への怒り、そして決してかなう事のない希望を。
「加えて佐々木はもう一度、大切な人との悲しすぎる離別を経験しただろう」

そのストレスで佐々木は一時期食べる事も、眠ることもできなくなった。

「その経験がさらにお前のパンドラの箱の鍵を頑丈にしたんだ。
絶対思い出させてはいけないものだ」と、脳が思い込んだんだろうな」
そのまま時間が流れてしまえばよかったのだろう、だが、

「俺は精神医療の道に進んで、全く同じとは言えないが
治療のために似たような話をずっと聞き続けた。それは自分の体験を追体験したいるようなものだったんだ」

「そうだな。そしてそれは解離性健忘の治療の方法の一つでもある。
パニック障害は知らないうちにパンドラの箱をこじ開けようとした事に対する

心の防御反応だったんだ」

佐々木の言葉を王が引き継ぐ。

「奥さんの記憶はダミー、というより失った記憶の代わりだったん

だ。

同じような別離の記憶だしな。まるで二重底だよ、酷く珍しい症例だ」

でもこれで治療が進むなと笑みを浮かべた王に、佐々木は暗い表情を向けた。

「確かにそうだ。だが、俺はこれ以上精神科医を続けていいんだろうか」

「……それは」

まるで罪を犯し、それを告白するような口調で佐々木は続けた。

「過去から目を背け、自分自身の感情すら持て余す。そんな俺が人の心を治す資格があるのか」

「佐々木、その判断を下すのは俺じゃないぜ」

「そうだな、すまなかった」

深くうつむいて呻くように佐々木は呟く。

「ちょっと顔を上げろよ、佐々木」

長い沈黙の後掛けられた声に佐々木が恐る恐る顔を上げると

そこには真剣な表情の親友の姿があった。

「もし俺が心を病み治療を求める患者だったら、ブラックジャックのような

天才よりも、同じように悩んで苦しんで、それでも立ち治った医者に治療してほしい」

「……王」

「それにな、こんな手紙が毎日院長室に届けられるんだってさ」

王がテーブルの上に広げたのは、色とりどりの画用紙。

そこにはたどたどしい子供の筆跡で

「It talks early with us, and i
tis Dr. Sasaki.」

（早く僕達とお話してね。佐々木先生）

と書かれていた。その数は、1枚や2枚ではない。

「これを書いてくれた子供達から背を向けて後悔しないか？」

恐怖とは全く違う理由で震える指先で、佐々木は丁寧にテーブルの上の画用紙を

拾い集める。鼻の奥がつんとした。悲しくなくても涙がでそうになるのだと

初めて実感する。

「俺は……」

震える言葉を詰まらせた佐々木の肩を王は優しくたたいた。

「ミナと同じだ。もう許してやれよ。自分自身を、さ」

「いいのかな」

両手で顔を覆って佐々木は尋ねた。

指の隙間から、透明な滴が幾つも零れおちる。

かえってきた答えは短く、完結だった。

「あたりまえだ」

続く

※ 解離性健忘症 記憶の一部が欠落する病気、その範囲は様々で数日から数年に及ぶこともある

※ 赦宥……赦すこと

第三十一話 復帰

「そう、これが三ヶ月間の治療の結果ね。王先生、御苦労さま」
提出されたカルテに目を通しながら

院長は穏やかにねぎらいの言葉をかける。

「それで、主治医としての見解は？」

相変わらず口調は穏やかだが、眼鏡の奥から王と佐々木を見つめる
眼差しは厳しく、鋭いものだった。

「まだ心的外傷が完全に癒たとはいえませんが、フラッシュバック
等の

問題はほぼ無くなったと思います。医師として治療を再開しても
なんら、問題はありません」

「そう」

その視線をまっすぐに見つめ返しきっぱりと言い切った王に、
院長は静かに頷いて、隣に立つ緊張した表情の佐々木を見る。

「では佐々木先生」

「はい」

「明日、ミキ・ロス・タチバナを再度カウンセリングなさい。
時間は三十分。相手の話を聞くことを重点において行うこと。

これで王医師の診療の結果が正しいかどうかを確かめます」

再度、佐々木は頷いた。そして翌日。

「佐々木先生、久しぶりだね。この間はびっくりしちゃったよ。
病気だったの、もういいの？」

心配そうに質問を投げかける長い黒髪の少女に、佐々木は穏やかな
微笑を向けた。

「心配してくれて有難う。この間は驚かせてごめんね。

よかったらもう一度、俺に話を聞かせてくれるかな」

少女は少し考え、そして頷く。

「いいよ。どんな話」

「君が一人で抱えていて苦しい事、悲しいことを。喋れる範囲でかまわないよ。そして一緒にそれを和らげる方法を探していこう」

カウンセリングルームの近くの精神科医局では、王を初めとして手の空いているスタッフが無言のまま、しかし皆息をつめて時計を気にしていた。

「終ったみたい」

廊下で様子を伺っていた看護師の言葉に、全員が扉と窓の隙間から様子を伺う

心理士に付き添われて部屋を出てきた少女に、院長が優しく尋ねた。

「カウンセリングはどうだった？」

「うん、なんだか心が軽くなったみたい。」

「そう、良かったわね」

「うん」

大きく頷いて去っていく少女を見て、スタッフの間にほっとした空気が流れる。

そして、続いて出てきた佐々木に、院長は告げる。

「佐々木先生、今日から通常業務に戻りなさい。」

その前に貴方が抜けた穴を塞いでいた他のスタッフにしっかりお礼を言って。ね」

頷いて医局に戻った佐々木に、スタッフから次々と声かけられる。

「三ヶ月もよくも楽しめたな」

「その分今日から倍くらい働いてもらうぞ」

「佐々木先生じゃなきゃ駄目だって、何人に泣きつかれたと思うんですか」

「と、言うわけで今日からがんばれよ。佐々木君」

乱暴な言葉に込められた、温かい感情。

それに佐々木はただありがとう、と何度も繰り返した。

※

クリスマスが近づくと、流石に温暖なカリフォルニアでも寒さが急速に厳しくなる。華やかに飾りつけた街の中をコートやマフラーを身につけて歩く人々。それは遠い異国でありながら

どこか佐々木の故郷の街を思い出させる風景だった。そして迎えた、クリスマス・イブ。

日本と同じように華やかで、日本よりずっと大切に思われているこの日を

佐々木はいつもと同じように病院で迎えた。

「今日は当直か、運が悪いな。来年に期待しろよ」

夕刻、慰めの言葉をかけてかえって行く同僚達を笑顔で見送り同じように当直のスタッフ達と症状が軽い入院患者達とで

ささやかなクリスマスパーティーを開いた。

それ以外は急患も、症状が急変する患者もなく

特別な日の夜は、いつもよりずっと静かに更けていく。

「佐々木先生、仮眠をとって下さいよ。」

今日は何事もなさそうですし」

と言ってくれた看護師に頷いて医局を後にしたものの

そのまま仮眠室に向かう気になれなくて、佐々木は屋上に上った。

真夜中に近い時刻、満天の星空の下、

街にはいつもよりずっと多くの灯が点っている。

あの一つ一つの下に、幸せな笑顔があるんだろうか。

いや、あって欲しいな。

そんな事をぼんやりと考えながら、胸のペンダントを触る。

「繭、クリスマスおめでとう」

十年前、妻の臨終の際に呟いた言葉を今年も繰り返した。

「こんな所にいたの、佐々木先生」

鉄扉がきしむ音と共に背後からかけられた声に佐々木が振り返ると

そこには、マグカップを両手に持ったミナが立っていた。

「ハーカー先生」

「ホットミルクを多めに作りすぎちゃって、飲んでくれる人を探していたの、引き受けてくれない？」

佐々木は頷いて、そして二人はベンチに並んで腰を下ろした。

「ハーカー先生も、今日は宿直だったんだ」

「そうよ、こんな日に一人で部屋にいたって寂しいだけだから」

「確かにそうだ」

くすくすと笑いあって二人は熱いミルクを啜った。

「お母さんとまだ喧嘩は続いているの？」

ミナは頷く。

「すねて、駄々をこねて、まるで子供みたい。」

前だったら私が我慢して言う事を聞いていたんだけど、

先月から通っている自助グループで同じような体験をしている人の話を沢山聞いて、自分が悪くない事は折れる必要がないと思っただの」

「うん、それがいいよ」

頷き返しながら、佐々木はもう彼女は大丈夫だと思った。

そういえば、最近ミナが以前ほど口うるさくなくなったという噂を内科の医局から聞いた。

「少し、距離を置いた方がいいのね、私たち親子今までべったりし過ぎていたから」

「そうだね、割り箸は？まだへし折っている？」
時々ね、とミナは答えた。

「最後に折ったのは1週間前かしら。」

部屋のどこに置いたか忘れてしまって、少し探し回ったわ」
「すごいじゃないか」

割り箸の存在を忘れるほどなら、もうすぐ意思の力だけで怒りを抑えられるようになるだろう。

人と適切なコミュニケーションが取れるようになったなら

彼女の人生はずっと素晴らしい物になるはずだ。

そして、いつも隣で自分を支えてくれている人の気持ちにも
気付くだろう。

想像してみると王とミナは実にお似合いのカップルだ。

そう思うと、自然に笑みがこみあげてきた。

続く

第三十二話 出立

「佐々木先生の方はどうなの？
もう発作は完全に起こらなくなった？」

「患者さんの診察に支障はなくなったよ。……でも」
「でも？」

真剣な表情で顔を見つめられて、佐々木はどきりとして
頬が熱くなった。

暴言を浴びせ続けられた時は気付かなかったが、ミナは
殆ど化粧をしていなくても、かなりの美人だ。

女性を見てこんな気持ちになったのは、妻を失って以来の事。

「よ、夜一人で部屋にいる時なんかはまだ、駄目だな」

美しい顔の中でも特に印象的なアーモンド形の瞳を

まともに見ていられなくて、顔をそらして佐々木は答える。

狭いとはいえ薄暗い家の中に一人きりでいると、

思い出した記憶に怒りや悲しみが湧き上がり、それに

何度自分のせいではないと言われても消す事の出来ない罪悪感が加
わって

過呼吸になったり、鬱状態に陥ることがある。

「でも、過呼吸といっても軽い物ですぐ収まるし

鬱状態は……自力で乗り越えるしかないな。王には早く

彼女作って慰めてもらえよ、なんてからかわれているけど」

と照れ隠しに佐々木は笑った。

「……私じゃ、駄目？」

「へ？」

ややあって返された言葉に、佐々木は驚く。

冗談かと思ったが、ミナの表情は相変わらず真剣だ。

「えっと……そ、それは」

上手い言葉が見つからず、しどろもどろになる佐々木に

ミナは悲しげにうつむいた。

「そうよね、私は先生に酷い言葉ばかりぶつけてきたし、大切な奥さんとの思い出の品を壊してしまったし、こんなこと言われても、迷惑よね」

その様子を益々佐々木は戸惑う。

「い、いや。迷惑とかそう言う事じゃなくて

その、ハーカー先生には俺なんかよりもっとふさわしい人がいると思うんだ」

「陰月のこと？」

頷いた佐々木に、ミナは幾つもの感情が入り混じったような複雑な微笑を返した。

「陰月は……好きよ。子供のころからずっとそばにいてくれて何時も味方になってくれて。でも彼は、そう、兄みたいなもので男女の仲になるなんて考えられない」

ミナの言葉を聞きながら、佐々木はこれを王が聞いたならさぞかし悲しむだろうなと思った。

「でも、王は先生の事を愛しているよ。それに

先生が俺に初めて言った事、覚えている？」

『あんたの英語は下手すぎて理解できない』だよ

俺はそれが悔しくて、必死でスピーキングを勉強して

お陰で随分早く英語が上達したんだ。暴言も役に立つんだよ」

言ってからしまったと思った。

これはどう聞いても嫌味だ。

「馬鹿」

ミナの握り締めた手が佐々木の胸を叩く。

「馬鹿、先生の馬鹿」

「ご、ごめん」

謝りながら、これとよく似た事が昔あったと思います。

あの時はファストフードの店内で、気障ったらしい映画の決め台詞に繭は笑いだしたけど。

「謝らないでよ。先生はどうしていつも優しすぎるの？

もっとひどい言葉で罵ってくれればよかった、

そうすれば、そうすれば私はきっぱり先生の事……」

「ごめん、でも」

もう一度謝って、佐々木は続ける。

「前にも言ったけど、俺は先生の思い描いていたA君じゃないよ。

それに患者が回復期に治療者に恋愛感情を抱くのはよくあることだ。

先生ももう少しすれば、きっと俺なんかよりもっといい人がいる事に

絶対に気が付くよ」

「馬鹿にしないで!!」

実に久々に怒鳴られて、佐々木はびっくりとした。と同時に

アーモンド形の瞳に強い光をたたえてこちらを見つめ返す

ミナに、不思議な安堵感を覚えた。ああ、やっといつもの彼女が

戻ってきた。

「私だって専門は違うけど、医者よ。先生が私の中で

作り上げたA君と別人だってことも、患者が治療者にそういう感情を

抱く例があることだって判っている」

アーモンド形の瞳の端に透明な滴が盛り上がる。

「何度も自問自答したわ。絶対に先生が受け入れてくれるはずがな

いと

諦めようと努力もした。でも駄目なの。私は、初めて会ったその日

から

ずっとずっと」

つっと形良い頬を透明な滴が伝う。

「先生が、好き」

……ああ……

胸を満たしていく泣きそうになる程、暖かく心地よい感情に

佐々木は大きなため息をついた。

どうして人から愛される事は、これほど嬉しいんだろう。

十代の頃、コンビニの狭いレジの中で働きながらも

人とのかわることが怖くて、恋愛など無縁のものだと思い込んでいた。

分厚いガラス瓶の中にいるような、灰色の日常を変えてくれたのは「繭」。同じように心と体に深い傷を負った少女。

彼女が逝ってしまった時、残りの人生を贖罪のために生きようと誓った。

大切な人を救えなかった。実の両親から殺されかけた自分が出る唯一の事。

もう二度と、女性を愛する事はないと思っていた。愛される事もないと思っていた。

それなのに……。

……繭、お父さん、お母さん……

心の中でそつと佐々木は問いかける。

……いいですか？……

俺は、出来るなら俺は、もう一度人を愛してみたいです。

微かな電子音が佐々木の白衣のポケットから

鳴り響いたのはその時だ。

「どうしてこれがこんな所に」

そこから出てきたアパートに置いてあるはずの古い携帯に

佐々木は驚く。液晶に表示されている名前は「木之口 繭」

「先生それ、まだ使えるの？」

ミナも驚いた表情で白いテープが包帯のように巻かれた

携帯を見つめていた。

「もしもし」

「もしもし、兵衛さん。尋ねる必要なんてないんだよ」

久しぶりに聞いた妻の声は今までの中で一番嬉しそうだった。

「今まで私の未練に付き合ってくれてありがとう。」

兵衛さん、もう自分を縛らないで、幸せになって」

「……繭、ありがとう」

声を詰まらせて佐々木は答える、多分これが妻との最後の会話にな

るだろう。

そんな、予感がした。

「最後のわがまま、聞いてくれる？」

「なに？」

「隣の人に、電話を代わって」

小さくうなずいて、佐々木は戸惑うミナに電話を渡す。

「誰、なの？」

「信じられないかもしれないけれど、妻だよ」

驚きの表情のまま電話を耳にあてたミナは、

何度も頷き、そして最後に呟くように

「もちろんよ」

と言った後、再び電話を佐々木に手渡した。

「兵衛さん、いままでありがとう。私、もう行くね

そろそろ歩きだしてみようと思うの。また、会えたら嬉しいな」

「うん……こちらこそありがとう、繭。会えるさ、絶対に」

佐々木が答えた直後、ぷつんと音をたてて電話は切れた。

まるで力尽きたように真っ暗になったひび割れた液晶画面に

佐々木は自分の予感が正しい事を確信する。

と、するりとした感触と共に佐々木の胸からペンダントが滑り落ち、

受け止める暇もなくコンクリートの床に落ちる。

澄んだ小さな音をたてて、リングが真っ二つに割れた。

そこから零れおちた白く細かい妻の遺灰が

冬の夜風に乗って空に舞いあげられていく。

少し前ならば半狂乱になっていたはずの出来事を

今、佐々木は酷く穏やかな気持ちで見つめていた。

妻は二度目の旅立ちの時を迎えたのだ。

「割れちゃったね」

中が空っぽになってしまった銀のリングを拾い上げて佐々木は仄かに苦笑した。

「奥さんに言われたわ」

子供のように小さな手にそつと自分の手を重ねてミナは言った。

「兵衛さんをずっと好きでいて下さいって」

「ハーカー先生」

涙の跡が残る美しい顔をじつと見つめて佐々木は口を開いた。

「俺は不器用で、英語も下手で、先生をこれからずっとイライラさせるかもしれないよ

それでもいい？」

「そういうところもひっくるめて、貴方が好きなの」

その答えに佐々木は微笑する。それにつられるようにミナの顔にも笑みが浮かんだ。

「じゃあ、夜にどうしようも寂しくなったら、電話しても、いいかな」

「何処にいてもすぐに飛んでいくわ。一晩中だって抱きしめてあげる。」

前に先生がそうしてくれたように」
二つの顔がそつと近づく。

ミナとの二度目のキスは、甘いミルクの味がした。

続く

次回最終回です

最終話 指輪

冬が終わり、春が過ぎそして初夏がやってきた。

「先日行われた専門医認定試験の結果が出ました。

フェローシップは全員会議室に集まるように」

院長の招集に、佐々木と王は緊張した面持ちで医局を出る。

「自信はあるか？」

「全力は尽くしたけど、どうだろう」

佐々木の答えに王はにやりと笑って、

「毎晩ミナと勉強してたんじゃないのか？」

ベッドの中でさ」

と茶化す。

クリスマスイブの告白の一部始終を、佐々木は翌日申し訳なさそうに屋上で王に報告した。

「で、受けたのか受けなかったのか、佐々木は？」

酷く真剣な顔で問われ、佐々木は俯いて受けた。と答える。

いつものようにぐしゃぐしゃと髪をかきまわされるのを覚悟していたが

しばらくまっても王の手が近づく気配はない。

恐る恐る顔を上げると、王は佐々木に背を向けたまま一言

「ミナを、頼むぜ」

とだけ言って足早に階下に去って行った。

二人の間でこの事はこれで終わった。王はその翌日だけ酷い二日酔い状態で

出勤したが、後は今までと変わることなく恋人となった

ミナと佐々木に接してくれる。唯時折きわどい冗談を佐々木にだけ

言うようにはなったが

それは仕方のない事だろう。

会議室に入ると、すでに内科のフェローシップ達がやはり緊張した

面持ちで

座っていた。

さりげなさを装って佐々木がミナの隣に腰を下ろすと、彼女の汗ばんだ手が

指先に触れた。やはりミナも緊張しているようだ。

この試験に受ければ、アメリカ国内だけとはいえより高度な医療行為が許され

日本に大手を振って帰れるが、落ちてしまっていたら、今までの研修は

すべて無駄になってしまう。

王に話したように、自分の実力の限界まで出し切った実感はあったがやはり言葉の壁は厚かった。

「では、まず内科から発表します。すごいわ、全員合格で

しかも主席で合格した者がいるわ。おめでとう、ミナ・ハーカー先生」

拍手に包まれて、ミナは頬を上気させて専門医認定証を受け取る。

口々にかけられるおめでとうの声に、ありがとうと答えている姿を見て

佐々木は目を細めた。春が近づくころから、内科のスタッフ達と院内で

ミナが楽しそうに談笑している姿が見られるようになり、彼女の嗜癖が

過去の物になりつつあるのが実感できる。

「つづいて精神科の方を発表します。こちらも

嬉しいことに主席合格者がいます。その人は最後に回しましょう」次々と呼ばれていく名前に、佐々木の名前はなく

やはり取り残された王と不安げに視線を交し合う。

「それでは、主席合格者を発表します。王 陰月」

やった、と王がガッツポーズを取って、しかしすぐにはっとしたように佐々木のほうを振り返った。

「おめでとう、王」

親友でもある同僚に、佐々木は心からのお祝いの言葉を述べる。残念だが、これが自分の実力だ。しょうがない。

「そしてもう1名。佐々木兵衛」

どうやって自分をアメリカに送り出してくれた上司に報告しようと考えていた佐々木は一瞬自分の名前が呼ばれた事に気付かなかった。

ミナにつつかれて、ようやく院長を含め全員の視線が自分に集まっている事に気付く。

わきあがった拍手に戸惑いながら、佐々木は院長の前に立った。

「二人共主席合格おめでとう、特に佐々木先生、言葉の壁と心の傷とその二つを良く乗り越えましたね。私は、貴方を誇りに思いますよ」

「ありがとうございます」

穏やかで優しい院長の口調に、胸を熱くしながら

佐々木は紙であるはずなのに、限りなく重く感じる専門医認定証を受け取った。

※

「おい、佐々木。これは一体何の冗談だ」

足音荒く王が佐々木のデスクにやってきたのは夏が終わり、秋が過ぎ再びクリスマスを迎えようとしていた日の事。

乱暴に机に叩きつけられた封筒に、佐々木は苦笑した。

「ああ……内緒にしておきたかったんだけど」

「内緒にしておきたかったけど？　どういうつもりだ

国境なき医師団に入団って、お前は日本に帰るんじゃないのか」
噛みつきそうな形相でそこまで言って王はハッとしたように口を閉ざす。

「まさか、あのテロの一件が原因か？」

その言葉に、佐々木はもう一度苦笑する。

「それもあるけど、小児精神科専門医は数が少ないからずっと募集をかけていたらしい。なりたての俺でももう手を挙げてきてくれと言われたよ」

「だからって、精神科医が戦場で何をする気だそしてなんでお前が行く必要がある」

「戦場じゃないよ。行くのは戦争終結地域だ。ほら、この間軍隊が完全撤退したあの国だ。」

戦争後遺症で苦しんでいる子供達がたくさんいる。

それに、俺は家族がいらないから、誰かが行かなければいけないのなら一番適任だろう。日本にはもう話をしてある、しぶしぶだけその後二年まってもらえたよ」

「ミナはどうする気だ！そろそろ将来の事も話し合うつもりだってこの間彼女から聞いたぞ」

佐々木はごめんと小さく口の中で呟いた。

「彼女には、まだ話していないんだ。ぎりぎりまで黙っていてくれないか？」

「佐々木……お前、なんで」

呆然とする王に、佐々木は少し苦しそうな表情を向けた。

「俺はどうしようもなく怖がりで、卑怯者なんだ」

「だから何を怖がるんだ」

「ミナと過ごした日々は本当に楽しくて、心が安らぐ日々だったよ。でもいつまでもこのままと言うわけにはいかないだろう。」

もうお互い遊びの恋愛をする年じゃない……でも」

佐々木は酷い傷痕の残る子供のように小さい手を胸の前でぎゅっと握りしめる。

「俺はどうしてもその先に進めない。家庭を、持つことが怖い」

「どうして、佐々木とミナだったらきつと幸せな家庭を築けるよ」

「幸せの家庭ってどういうものだ？俺は知らない。そしてミナも知らないんだよ」

佐々木の言葉に王は黙り込んだ。

「だからこれが一番いい方法なんだ。俺が黙って姿を消せばミナはきつと怒って俺を軽蔑して、そして忘れてくれるだろう？」

「……お前って奴は」

「こんなことばかり頼んで悪いけど、俺がいなくなった後ミナを支えてあげてくれ。お願いだ。」

「他人の恋のしりぬぐいなんてやってられるか、大馬鹿野郎」

声高に叫んで足跡荒く去っていく友人を、佐々木は黙って見送った。

※

「えっと、買い物リストはこれでいいのかな」

メモ用紙にずらりとかかれた品物を、もう一度見返して佐々木は呟いた。

アメリカを去る日まで二週間をきった。

ミナには色々な理由をつけてあっていない。

王ともあれつきり挨拶すら交わしていない。

「……最低のことをしているから、当たり前か」

数年間、親身になって付き合ってくれた友人とこんな形での別れは寂しかったが、

すべては自分の選択の結果だ。だれも責めることはできない・

今は色々考えるより、目先のことを考えていこう。

そう思ってドアを開け、そこに立っていた人影にぎょつとして立ちすくんだ。

「……ミナ」

「王から聞いたわ」

アーモンド形の瞳を久しぶりに怒気できらめかせて彼女は佐々木をにらみつけた

「ごめん」

うつむく佐々木の手から、ミナはすばやく買い物リストを取り上げ

る。

「ちょっと」

「うん、足りないわよね。全然足りないわ」

と呟きながら、ポケットから出したボールペンでなにやら色々書き足していくミナに、佐々木は慌てた。

「何するんだ」

「追加分を書いているのよ。これじゃあどう見ても一人分だから」

「一人分って」

うろたえる佐々木の眼前に、1枚の紙が突きつけられる。

「内科医も募集してて良かったわ。今日届いたの。」

私も入団したのよ。国教なき医師団。赴任地もいっしょ。

婚約者って書いたのが効いたのね。きっと」

「ミナ!!!」

「なによ、黙って一人で悩んで、一人で勝手に去っていかうとして私はなんだったの。貴方に頼り切ることしか出来ない女だと思ったの」

「ミナ、俺は」

「一年付き合っても、貴方は私の事を全然わかっていなかったのね頭にきた。」

貴方が逃げても私はどこまでも追いかけるわ。

なによ、今のままの関係がいいならずっとそれでも構わないわよ。

結婚なんて所詮紙切れ一枚の契約にすぎないわ」

勢い良くそこまで言って、ミナは佐々木の胸に顔をうずめた

「私が嫌いになったならはつきり言いなさいよ。こっちから消えてあげるから。」

佐々木はその体をあいかわらずぎこちない動作で抱きしめる

「そんなんじゃない。好きだよ。大好きだ」

「なら、私はついて行く。駄目だって言われても勝手についていくから」

それに、貴方の奥さんとの約束を勝手破らせないで」

「約束？」

ミナは頷いた。

「ずっとあなたを好きでいる約束」

「ああ、もう」

盛大にため息をついて、佐々木は再びミナの手からメモ用紙とボールペンを取り上げる。

戸惑いとほんの少しの怒りと、そしてそれらをすべて覆い隠すほどの嬉しさが体の奥から

こみあげてきた。

「わかった、君がその気なら俺ももうコソコソと逃げるのはやめた。婚約者ならいざという時に立場が弱すぎる。

泣いて嫌だと言ってももう知らない。これを持って俺と一緒に来い」
乱暴にリストの一番最後に何かを書き足すと佐々木はミナの手をとって階段を下りた。

「リスト、君が持ってて。二人分の買い物はすごい量になるから」

「ねえ、この最後の言葉、日本語でしょ。何を書いてあるか教えて」

「店に行けばわかる。俺は安月給でそんなに高いのは買ってやれないけど

石がついてちゃ治療の邪魔になるだけだろう」

「だからなんなのよ」

それには答えず、ただミナの手を握り締めて佐々木は歩く。

「いいわ。たとえそれがなんであつても私はそれを持って貴方についていく」

そう言ってミナはもう一度リストを見る。

英語で書かれた長い列の一番最後、唯一日本後で書かれたその文字は「指輪」

だった。

※

「ほんとうに馬鹿息子だよ。あれは」

日本の片隅にある小さな町、その病院の診察室の一つで年を経てはいるが、なお婀娜めいた色気が残る老女が同じ位の年の医者を相手に愚痴をこぼしていた。

「アメリカに行ったと思ったら、今度は戦場にいく、だなんてなに考えてるんだろうねえ、本当に」

「まあ、佐々木君の事ですから深く考えた末の事だったんでしよう見守っていてあげましょうよ、彼の人生なんですから、久代さん」

「でもね、羽場先生」

尚も不服そうに、久代は羽場医師に一枚の写真を見せる。

「こんな綺麗な嫁さんをもらったんなら、きちんと式を挙げればいいものを」

写真だけとって、両親の墓参りだけしてさっさと引っ込むなんて」

「三日しか、いられないんだ」

久しぶりに日本に帰ってきた佐々木は、そう言ってあわただしく入籍だ

墓参りだと妻と一緒に駆け回ると、又あつという間に旅立ってしまった。

「そうですか、やっと御両親の墓参りにも行く事が出来たんですか。結婚もできて、佐々木君はようやく完全にガラス瓶の中から出てくれたんですね」

羽場医師が目を細めて見つめる写真の中には、ウエディングドレスを着たミナの横で

照れくさそうに笑うタキシード姿の佐々木が写っていた。

「昔、これとよく似た光景をICUの特別室で見た気がします…」

「そうだねえ、今度はあんな悲しい事は起こらないよ。」

二人はきつと白髪の爺さんばあさんになるまで一緒に暮らすのさ」
そういつて久代は大切そうにそっと写真をなでた。

※

「めずらしいねえ、こんな所に新婚夫婦でやってくるなんて」

ほこりっぽいバンのトラックに荷物をいれながら、運転手は笑う。

「新婚旅行向きの場所じゃないぜ」

「遊びに来たわけじゃないですから」

苦笑して返答した佐々木に、運転手はもう一度笑い返した。

「ちがいない。夫が精神科医で妻が内科医。頼りにしてるぜ

ちなみに俺は外科医だ。名前はエドワード。ようこそ、戦場へ。腰抜かすなよ」

「大丈夫よ。血が怖くて医者はやってられないから」

そういったミナに、エドワードは勝気な嫁さんだな、苦勞するだろう。

と佐々木に問いかけた。

「そこが彼女のいいところですから」

「おっとこれはごちそうさま。乗ったか。出発するぞ」

けたたましいエンジン音を立てて車が走り出す。

車外に見える風景は、一面の廃墟。

「後悔、している？」

いいえ、とミナは首を振って同じ指輪をはめた佐々木の手を握り締めた。

「貴方といればどこでもいい」

「ありがとう」

「おお、この歌しているか。日本語なんだぜ。ジエータイが持ち込んで

はやらせたんだ」

大げさな身振りでカーラジオを指差すエドワード。

佐々木の耳に、久々に理解できる言葉の歌が流れてきた。

「縦の糸は、貴方。横の糸は、私。

会うべき人に出会えることを人は幸せと呼びます」

「歌詞はわからないけど、綺麗なメロディね」
ミナの言葉に佐々木は頷いた。ラジオから歌は流れ続ける。
「もう少しだ、ついたら早速働いてもらうぜ」
エドワードが指差した先に、赤い月形を染め抜いた
いくつものテントが見えた。

終り

※ 歌詞引用 中島みゆき 「糸」

最終話 指輪（後書き）

この話も以前二次創作として書いたものをオリジナルに仕立て直したものです。

<http://adasinogibun.web.fc2.com/index.html>

二次創作版はこちらのサイトの同名小説で。

悲恋以外の恋愛小説に初挑戦してみました。

この三人のドクターは私の一番のお気に入りなので
これからも、佐々木、あるいはミナや王を主人公にした物語を
投稿していくつもりです

次回作、一度ここにUPした「desperado」の完全版を明日から

UPし始めます

ご意見ご感想をいただければ躍り上がって喜びます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7604j/>

砂の船第二部 「糸」

2010年10月11日05時19分発行